

栃木県埋蔵文化財調査報告第 385 集

# 堀米城跡・堀米遺跡

—快適で安全な道づくり事業費（補助）一般県道堀米  
停車場線堀米工区に伴う発掘調査—

2017. 3

栃木県教育委員会  
公益財団法人とちぎ未来づくり財団

ほり ごめ じょう せき      ほり ごめ い せき  
堀米城跡・堀米遺跡

—快適で安全な道づくり事業費（補助）一般県道堀米  
停車場線堀米工区に伴う発掘調査—

2017. 3

栃木県教育委員会  
公益財団法人とちぎ未来づくり財団

## 序

堀米城跡・堀米遺跡は、栃木県の南西部、佐野市に位置しています。佐野市は豊かな自然と多くの歴史と文化財を擁するとともに、東西・南北の高速道路が交わり、首都圏近郊の利便性から、さらなる発展が期待されています。

この度、県土整備部による一般県道堀米停車場線の改良工事に先立ち、路線内に所在する遺跡の取扱いについて、関係機関と協議の上、記録保存を目的とした発掘調査を行いました。

発掘調査では、堀米城跡の一画にあたる堀跡や古墳時代から平安時代の集落である堀米遺跡の一部を確認しました。城跡は、この地域に勢力を張った堀籠氏の居城であり、今回の調査で、初めて姿を現しました。堀米遺跡は、昭和20年代より知られており、市街地開発に伴っていく度もの発掘調査が行われてきており、この度の調査で、本遺跡がさらに大きく広がっていることが明らかになりました。

本報告書は、堀米城跡・堀米遺跡の発掘調査成果をまとめたものです。本書が県民の皆様にとって郷土の歴史を理解する一助になるとともに、各方面において広く御活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から報告書作成に至るまで、多大なる御協力をいただきました栃木県県土整備部、佐野市教育委員会をはじめとする関係機関、並びに関係各位に対しまして、厚くお礼申し上げます。

平成29年3月

栃木県教育委員会

教育長 宇田 貞夫

## 例 言

- 1 本書は、快適で安全な道づくり事業費（補助）一般県道堀米停車場線堀米工区に伴い実施した堀米城跡・堀米遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本事業は、栃木県教育委員会から公益財団法人とちぎ未来づくり財団が委託を受けて、埋蔵文化財センターが実施した。事業の実施に当たっては、県教育委員会からの指導のもとに行った。
- 3 調査体制は以下のとおりである。

### 発掘調査

平成 26 年度 副所長兼整理課長 田代 隆、副主幹 植木茂雄、副主幹 津野 仁、  
嘱託調査員 猪瀬亜沙美

平成 27 年度 副所長兼整理課長 藤田典夫、副主幹 津野 仁、嘱託調査員 猪瀬亜沙美

平成 28 年度 整理課長 塚本師也、副主幹 津野 仁、主査 初山孝行


### 整理・報告書作成

平成 28 年度 整理課長 塚本師也、副主幹 津野 仁

- 4 本報告書の執筆・編集は津野が担当した。
- 5 表土除去・埋め戻し業務については、朝日建設株式会社・三陽建設株式会社に委託した。
- 6 基準点測量について、平成 26 年度は株式会社ニッコーに委託した。
- 7 遺構測量図化業務については、株式会社ニッコー・中央航業株式会社に委託した。
- 8 岩石鑑定については、バリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。
- 9 本遺跡の発掘調査・整理報告に当たり、下記の方々に御指導・御協力を頂いた。厚く御礼の意を表します。  
県土整備部・安足土木事務所・佐野市教育委員会・佐野郷土博物館・一向寺・穴澤義功・長谷川沙
- 10 発掘調査の参加者は次の通りである。  
青木義一・井腰 稔・岡本のぞみ・小曾根明子・小玉淳子・菊池昌之・熊倉洋子・小林志穂美・  
提箸一雄・猿橋美佐子・柴田一男・島谷義博・清水季剛・杉原新一・須藤由紀夫・南雲 進・  
福田弘子・前原哲夫・山上菊三・山田得地・吉永 茂
- 11 整理作業・報告書作成の参加者は次の通りである。  
池澤友希世・佐久間京子・武田智子・松本美沙子
- 12 本遺跡の調査概要は、埋蔵文化財センター年報・栃木県埋蔵文化財保護行政年報で報告されているが、本書を正式報告とする。
- 13 本遺跡の出土遺物・資料類は、栃木県埋蔵文化財センターで保管している。



## 凡 例

- 1 遺跡の略称は、佐野市堀米城跡・堀米遺跡を略したSN-HRである。
- 2 遺構の略称は、堀：SD、SI：竪穴住居跡、SX：地下式坑、SE：井戸跡、SK：土坑である。
- 3 全体図の座標は、世界測地系に基づき、図示した方位は座標北である。遺跡の位置は東日本大震災後の位置を示す。
- 4 遺構の縮尺は、竪穴住居跡・地下式坑・井戸跡・土坑1/80、カマド1/40である。このほかの図については、縮尺を変更し、スケールを示したので、参照されたい。
- 5 土層図中の番号はゴシックが基本土層の番号、明朝体は遺物の番号を示す。基本土層は第3章第1節に提示した。
- 6 遺物のうち土器は1/4、鉄製品等は1/2であり、縮尺を図面の脇に示した。
- 7 遺物実測図中のスクリーントーンは、以下の通りである。  
 黒色処理
- 8 土器実測図の器面調整のうち、ナデは破線、ケズリは実線で示した。
- 9 観察表中の大きさに示した( )付き数字は、復元推定値であることを示す。

# 目次

序	
例言	i
凡例	ii
目次	iii
第1章 調査の経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の方法	3
第3節 調査の経過	4
第2章 遺跡の環境	5
第1節 地理的環境	5
第2節 歴史的環境	7
第3章 発見された遺構と遺物	13
第1節 調査の概要	13
第2節 堀米城跡	21
(1) 堀跡・溝跡	21
(2) 地下式坑	21
(3) 土坑	24
第3節 堀米遺跡	29
(1) 竪穴住居跡	29
(2) 井戸跡	67
(3) 土坑	72
(4) 道路側溝	79
(5) その他の遺構・遺物	81
第4章 総括	83
第1節 堀米遺跡の古墳時代後期から平安時代の土器変遷	83
第2節 堀米遺跡の遺構変遷	87
第3節 堀米遺跡と鉄生産	91
(1) 県内の鍛冶遺構	91
(2) 県内の鉄生産関連遺物の時期的な動向	94
(3) 集落動向と鍛冶	103
(4) 県内の古代鑄造関連遺物	105

第4節	安蘇郡内の土鍾からみた漁労	107
(1)	形態による分類	107
(2)	土鍾の分布	108
第5節	堀米城跡と中世の遺構・遺物	110
(1)	堀の時期	110
(2)	周辺地割りとの関係	110
(3)	堀米遺跡8区の遺構群	111
(4)	鋳物について	112
付編	堀米遺跡発掘調査に係る自然化学分析	116

## 挿図目次

第1図	堀米城跡・堀米遺跡の位置	1	第39図	16区S1-92出土遺物実測図(2)	51
第2図	堀米遺跡の範囲と調査地	2	第40図	16区S1-93実測図(1)	52
第3図	堀米城跡・堀米遺跡の位置と周辺の地形図	5	第41図	16区S1-93実測図(2)	53
第4図	堀米城跡・堀米遺跡周辺の遺跡分布図	6	第42図	16区S1-93出土遺物実測図	54
第5図	馬門南遺跡の生業具	8	第43図	16区S1-96実測図	57
第6図	寺之後遺跡の編物石	9	第44図	16区S1-96出土遺物実測図	58
第7図	館之前遺跡・安楽寺出土・赤城神社蔵品	10	第45図	16区S1-99実測図・出土遺物実測図	59
第8図	唐沢山神社蔵大甕の金具実測図	11	第46図	16区S1-117実測図・出土遺物実測図	60
第9図	間連城跡概略図	11	第47図	16区S1-119実測図	62
第10図	堀米周辺の地割	12	第48図	16区S1-119出土遺物実測図(1)	62
第11図	堀米城跡・堀米遺跡調査区位置と全体図	14	第49図	16区S1-119出土遺物実測図(2)	63
第12図	1・4・5・6・7区全体図	15	第50図	16区S1-120実測図	64
第13図	8区全体図	16	第51図	16区S1-120出土遺物実測図	65
第14図	9・10区全体図	17	第52図	16区S1-122実測図・出土遺物実測図	66
第15図	11・13・14・15区全体図	18	第53図	8区SE-54実測図・出土遺物実測図	68
第16図	16区全体図	19	第54図	10区SE-76実測図	68
第17図	基本土層	20	第55図	16区SE-114・121実測図・出土遺物実測図	70
第18図	1区SD-01実測図・出土遺物実測図	22	第56図	8区SK-40実測図	72
第19図	7区SX-23実測図	23	第57図	8区SK-41・42・43・44・45・46・47・48・49A・49B・50・51・52・53・55・57・58・59・60・61・62A・62B・63実測図	73
第20図	4区SK-02・03・04実測図・4区SK-02・04・5区SK-10・13・SD-06・6区SK-26出土遺物実測図	24	第58図	9～15区土坑実測図	75
第21図	5区SK-05・SD-06・SK-07・08・09・10・11・12・13・14・15・16・17・34・35・36実測図	26	第59図	8区SK-42・43・55・11区SK-71出土遺物実測図	76
第22図	6区SK-18・19・20・21・25・26・27・30・31実測図	27	第60図	16区SK-89・90・91・94・95・97・103・105・108・109・110・111・116・124・125実測図	77
第23図	7区SK-22・37・38・39実測図	28	第61図	16区SK-100・101A・101B・102・104・106A・106B・106C・107・112・113A・113B・118・123実測図	78
第24図	8区S1-64実測図・出土遺物実測図	29	第62図	16区SK-105・118出土遺物実測図	78
第25図	9区S1-65・70実測図	31	第63図	8・9・10区道路側溝実測図・出土遺物実測図	80
第26図	9区S1-70実測図	31	第64図	13区実測図・出土遺物実測図	81
第27図	9区S1-65出土遺物実測図	32	第65図	縄文時代の遺物実測図	82
第28図	9区S1-70出土遺物実測図	33	第66図	旧石器調査位置と土層	82
第29図	10区S1-74実測図・出土遺物実測図	34	第67図	堀米遺跡土器変遷図(1)	84
第30図	10区S1-75実測図・出土遺物実測図	36	第68図	堀米遺跡土器変遷図(2)	85
第31図	11区S1-66実測図	38	第69図	堀米遺跡遺構変遷図(1)	88
第32図	11区S1-66出土遺物実測図(1)	39	第70図	堀米遺跡遺構変遷図(2)	89
第33図	11区S1-66出土遺物実測図(2)	40	第71図	堀米遺跡遺構変遷図(3)	90
第34図	14区S1-79A・79B・80実測図	43	第72図	栃木県内における古代鍛冶遺構	92
第35図	14区S1-79A・79B・80出土・南部表採遺物実測図	44	第73図	栃木県内における古代鍛冶遺構と鍛冶関連遺物分布	93
第36図	15区S1-81・88実測図・出土遺物実測図	48	第74図	栃木県内における古代鍛冶遺構と鍛冶関連遺物数の時期別変遷図	99
第37図	16区S1-92実測図	50			
第38図	16区S1-92出土遺物実測図(1)	50			

第75図	鍛冶遺構・鉄滓等出土遺跡 位置図(1) .....	100
第76図	鍛冶遺構・鉄滓等出土遺跡 位置図(2) .....	101
第77図	鍛冶遺構・鉄滓等出土遺跡 位置図(3) .....	102

第78図	県内鍛冶遺構・関連遺物の時期と型 .....	104
第79図	県内出土鉄鋼・鍛脚・鋳型実測図 .....	106
第80図	佐野市域出土の土鍾(1) .....	108
第81図	佐野市域出土の土鍾(2) .....	109
第82図	堀米城跡周辺の地利 .....	111
第83図	鋳造浴解が復元図と羽口 .....	113

## 目 次

第1表	堀米城跡・堀米遺跡周辺の遺跡一覧 .....	7
第2表	1区S D-01 出土遺物観察表 .....	23
第3表	4区S K-02 出土遺物観察表 .....	25
第4表	4区S K-04 出土遺物観察表 .....	25
第5表	5区S D-06 出土遺物観察表 .....	25
第6表	5区S K-10 出土遺物観察表 .....	25
第7表	5区S K-13 出土遺物観察表 .....	25
第8表	6区S K-26 出土遺物観察表 .....	25
第9表	8区S I-64 出土遺物観察表 .....	30
第10表	9区S I-65 出土遺物観察表 .....	33・34
第11表	9区S I-70 出土遺物観察表 .....	34
第12表	10区S I-74 出土遺物観察表 .....	35
第13表	10区S I-75 出土遺物観察表 .....	37
第14表	11区S I-66 出土遺物観察表 .....	40・41
第15表	14区S I-79A 出土遺物観察表 .....	45
第16表	14区S I-79B 出土遺物観察表 .....	45・46
第17表	14区S I-80 出土遺物観察表 .....	46
第18表	14区南部表探遺物観察表 .....	46
第19表	15区S I-81 出土遺物観察表 .....	48
第20表	15区S I-88 出土遺物観察表 .....	48
第21表	16区S I-92 出土遺物観察表 .....	51

第22表	16区S I-93 出土遺物観察表 .....	55・56
第23表	16区S I-96 出土遺物観察表 .....	59
第24表	16区S I-99 出土遺物観察表 .....	60
第25表	16区S I-117 出土遺物観察表 .....	61
第26表	16区S I-119 出土遺物観察表 .....	63
第27表	16区S I-120 出土遺物観察表 .....	65
第28表	16区S I-122 出土遺物観察表 .....	67
第29表	8区S E-54 出土遺物観察表 .....	69
第30表	16区S E-114 出土遺物観察表 .....	71
第31表	16区S E-121 出土遺物観察表 .....	71
第32表	8区S K-42 出土遺物観察表 .....	76
第33表	8区S K-43 出土遺物観察表 .....	76
第34表	8区S K-55 出土遺物観察表 .....	76
第35表	11区S K-71 出土遺物観察表 .....	76
第36表	16区S K-105 出土遺物観察表 .....	79
第37表	16区S K-118 出土遺物観察表 .....	79
第38表	8区南北道路側溝出土遺物観察表 .....	79
第39表	13区出土遺物観察表 .....	82
第40表	堀米遺跡竈穴住居跡の時期 .....	87
第41表	県内鉄生産関連遺構・遺物一覧表 .....	96~99

## 図版目次

- 図版一 堀米城跡 遺構一  
1区S D-01 (南西から)  
1区S D-01 (南から)  
4区全景 (南西から)  
5区全景 (西から)  
6区全景 (西から)
- 図版二 堀米城跡 遺構二  
7区S X-23 セクション (南から)  
4区S K-02 セクション (北西から)  
4区S K-02 遺物出土状況 (北西から)  
4区S K-04 セクション (南から)  
5区S D-06 セクション (南から)  
5区S D-06 完掘 (南から)  
5区S K-12・13・14・16 完掘 (南から)  
5区S K-17 完掘 (西から)
- 図版三 堀米遺跡 各調査区一  
8区北部全景 (北西から)  
9区南部全景 (西から)  
9区北部全景 (南から)  
10区北部全景 (南から)
- 図版四 堀米遺跡 各調査区二  
16区北部全景 (南から)  
16区北部全景 (西から)
- 図版五 堀米遺跡 遺構一  
8区S I-64 セクション (南東から)  
9区S I-65 完掘 (南東から)  
9区S I-65 カマド遺物出土状況 (南から)  
9区S I-65 遺物出土状況 (南東から)  
9区S I-70 完掘 (南西から)  
9区S I-70 カマド (南西から)  
10区S I-74 完掘 (南から)  
10区S I-74 カマド (南から)
- 図版六 堀米遺跡 遺構二  
10区S I-74 炉 (南から)  
10区S I-75 遺物出土状況 (南西から)  
10区S I-75 遺物出土状況 (東から)  
10区S I-75 セクション (南東から)  
10区S I-75 ピットセクション (南から)  
11区S I-66 遺物出土状況 (北東から)  
11区S I-66 貯蔵穴セクション (南から)  
11区S I-66 カマド (上から)
- 図版七 堀米遺跡 遺構三  
11区S I-66 カマド (上から)  
11区S I-66 貯蔵穴遺物出土状況 (北東から)  
11区S I-66 南半部 (西から)  
14区S I-79B 北辺、S I-80 完掘 (西から)  
14区S I-79B カマド (西から)
- 14区S I-79B 中央部 (南から)  
14区S I-79A セクション (南から)  
14区S I-80 カマド遺物出土状況 (南から)
- 図版八 堀米遺跡 遺構四  
14区 南部 (S I-79A・S K-78) 全景 (西から)  
15区S I-81 完掘 (西から)  
15区S I-81 セクション (北から)  
15区S I-88 完掘 (南から)  
15区南部全景 (西から)  
15区北部全景 (南から)  
16区S I-92・99 セクション (南東から)  
16区S I-92 遺物出土状況 (南から)
- 図版九 堀米遺跡 遺構五  
16区S I-92 遺物出土状況 (南東から)  
16区S I-92 カマド (南から)  
16区S I-92 カマド掘り方 (南から)  
16区S I-93 セクション (北東から)  
16区S I-93 遺物出土状況 (南から)  
16区S I-93 完掘 (南から)  
16区S I-93 完掘 (西から)  
16区S I-93 カマド (南から)
- 図版一〇 堀米遺跡 遺構六  
16区S I-93 カマド掘り方 (南から)  
16区S I-93 掘り方 (北東から)  
16区S I-96 完掘 (南東から)  
16区S I-96 貯蔵穴セクション (南から)  
16区S I-96 貯蔵穴 (南から)  
16区S I-96 カマド掘り方 (南東から)  
16区S I-96 カマド (南から)  
16区S I-92 掘り方、S I-96・99 完掘 (南から)
- 図版一一 堀米遺跡 遺構七  
16区S I-92 掘り方、S I-96・99 完掘 (東から)  
16区S I-99 カマド掘り方 (南から)  
16区S I-117 完掘 (南東から)  
16区S I-117 P I セクション (南西から)  
16区S I-117 掘り方 (南東から)  
16区S I-119 完掘 (南から)  
16区S I-119 完掘 (東から)  
16区S I-119 裏出土状況 (南東から)
- 図版一二 堀米遺跡 遺構八  
16区S I-119 遺物出土状況 (北東から)  
16区S I-119 東壁際坏出土状況 (南から)  
16区S I-119 カマド (南から)  
16区S I-120 セクション (南西から)  
16区S I-120 完掘 (南から)  
16区S I-120 掘り方 (南西から)  
16区S I-122 完掘 (南から)  
16区S I-122 セクション (南から)

図版一三 堀米遺跡 遺構九

- 16区S I - 122 カマドセクション (東から)
- 16区S I - 122 カマド (南から)
- 8区S E - 54 セクション (南西から)
- 8区S E - 54 上部完掘 (北から)
- 10区S E - 76 セクション (西から)
- 16区S E - 114 セクション (南から)
- 16区S E - 114 上部完掘 (南から)
- 16区S E - 121 遺物出土状況 (西から)

図版一四 堀米遺跡 遺構一〇

- 16区S E - 121 遺物出土状況 (南西から)
- 16区S E - 121 セクション (西から)
- 8区S K - 40 セクション (南西から)
- 8区S K - 42・43 セクション (東から)
- 8区S K - 44 セクション (南東から)
- 8区S K - 45 セクション (南東から)
- 8区S K - 46 セクション (南から)
- 8区S K - 47 セクション (南東から)

図版一五 堀米遺跡 遺構一一

- 8区S K - 49A・50 セクション (西から)
- 8区S K - 61 完掘 (南西から)
- 8区S K - 62A セクション (南西から)
- 8区S K - 63 セクション (南西から)
- 11区S K - 71 椀形埴輪出土状況 (西から)
- 11区S K - 67・68、S I - 66 完掘 (南西から)
- 16区S K - 94 セクション (南から)
- 16区S K - 101A 完掘 (南から)

図版一六 堀米遺跡 遺構一二

- 16区S K - 102 セクション (南から)
- 16区S K - 106A・106B・106C 完掘 (南から)
- 16区S K - 107 完掘 (南西から)
- 16区S K - 110 セクション (南から)
- 16区S K - 111 完掘 (南から)
- 16区S K - 123 完掘 (南西から)
- 8区北部道路南北側溝 (北西から)

図版一七 堀米遺跡 遺構一三

- 8区道路南北側溝セクションB-B' (南西から)
- 8区道路東西側溝完掘 (北西から)
- 9区道路南北側溝セクションC-C' (北から)
- 13区北部全景 (西から)
- 13区中央部セクション (南西から)
- 旧石器調査全景 (南から)
- 旧石器調査ルーム土層 (南から)
- 旧石器調査ローム土層 (西から)

図版一八 遺物一

- 1区S D - 01・4区S K - 02・04・5区S K - 13・
- 6区S K - 26・8区S K - 43・55・S I - 64・
- 9区S I - 65 出土遺物

図版一九 遺物二

- 9区S I - 65・70・10区S I - 74・75 出土遺物

図版二〇 遺物三

- 10区S I - 75・11区S I - 66・14区S I - 79A
- 出土遺物

図版二一 遺物四

- 11区S I - 66・14区S I - 79A・79B・80
- 出土遺物

図版二二 遺物五

- 14区南部表採・14区S I - 80・15区S I - 81・
- 88・16区S I - 92・93 出土遺物

図版二三 遺物六

- 16区S I - 93・96・117・119・122 出土遺物

図版二四 遺物七

- 8区S E - 54・16区S E - 114・121・S I - 93・
- 119 出土遺物

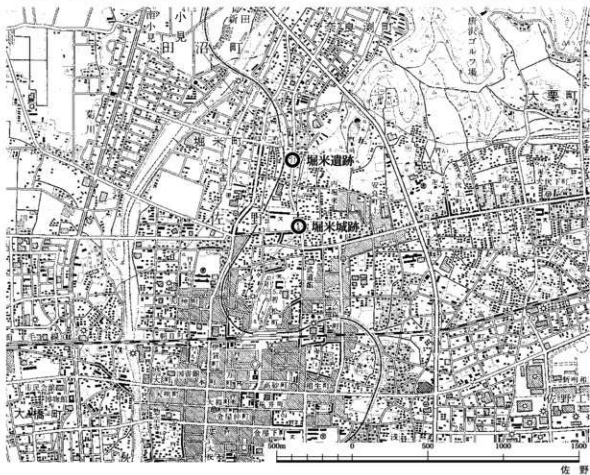
## 第1章 調査の経緯

### 第1節 調査に至る経緯（第1・2図）

佐野市は、栃木県の南西部にあって、この地域で足利市に次ぐ規模の市となっている。平成17年（2005）には、旧佐野市と田沼町・葛生町が合併して、新佐野市となった。交通では、南北に東北自動車道、東西に北関東自動車道が佐野市と接する旧岩舟町域で交差し、市内には佐野藤岡、田沼のインターチェンジがあり、国道50号が佐野藤岡インターチェンジに接続することからも、物流・製造などの拠点となっている。この周囲に商業施設もあり、発展し続けている。田沼インターチェンジ周辺も工場などを設置しており、交通アクセスの利点によって、佐野市域は今後も経済的な展開が期待されている。

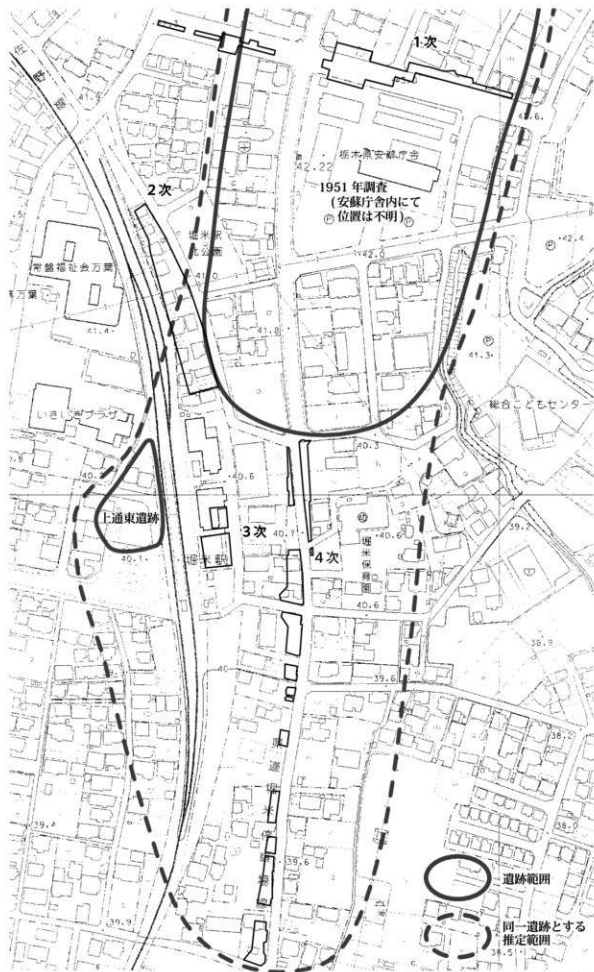
県道151号堀米停車場線は、佐野市街地の北部にあり、東武佐野線堀米駅の停車場から県道141号唐沢公園線までの延長967mの道路である。唐沢公園線とは内堀米においてT字路で交差し、西にのびてから北に折れて停車場に至る。堀米停車場線に接続する県道では、市街地から赤見町に向かう県道237号赤見本町線と堀米停車場線が東武佐野線のアンダーで繋がったことから、さらに交通の重要性が増すことが予想される。堀米停車場線の北側は県道16号佐野田沼線（通称東産業道路）に市道で繋がっている。佐野田沼線から北関東自動車道にも向かうことになり、周囲には県安蘇庁舎や佐野市こどもの国などもあって、交通の多い線であった。このため、現道の車道・歩道拡幅の改良工事が要求されていた。

改良工事予定地には鎌倉時代の堀米城跡が所在することから、県土整備部の開発計画を受けて、県教委



第1図 堀米城跡・堀米遺跡の位置





第2図 堀米遺跡の範囲と調査地

1:2,500

員会文化財課は平成25年11月に、平成25・26年度の事業予定地においてトレンチ7本を設定し、遺構・遺物の確認調査を行った。その結果、調査地南部において堀跡や土坑が確認されたことから、事業の実施前に、発掘調査を要することになった。

このような開発計画と確認調査結果を踏まえて、県教育委員会文化財課と県土整備部の協議を経て、平成26年度に現地発掘調査を実施することとなった。4月1日付けで、文化財課長から公益財団法人とちぎ未来づくり財団理事長に堀名城跡発掘調査の費用見積が依頼された。これを受けて財団理事長から文化財課長に同日費用見積の回答がなされた。

さらに同日付けで、文化財課長から財団理事長に契約締結の依頼文書が送付され、栃木県知事と財団理事長間で埋蔵文化財発掘調査業務委託契約が締結された。

現地における発掘調査は、平成26年度は4月から8月に実施することとして、諸準備を行い、5月から現地調査を開始した。

平成27年度は9月30日付けで、文化財課長から財団理事長に見積依頼があり、同日業務委託契約を締結した。調査は前年度実施した北側の部分について、10月から12月まで行うことになった。

平成28年度は4月1日付けで、文化財課長から財団理事長に見積依頼があり、同日業務委託契約を締結した。現地調査は前年度実施した北側で、堀米停車場脇部分について、4月から6月まで行うこととして、調査終了後は整理作業を行い、年度内にこれまでの発掘調査結果を報告書として刊行することにした。

## 第2節 調査の方法

調査は道路の拡幅工事による範囲を行うために、細長くなっている。このため、生活道路などで区分された箇所を調査区と呼称し、南側より1区から16区に分割した。ただし、12区は県教育委員会確認調査の結果、遺構が無かった部分であるが、調査を行った区であることから、調査区として扱った。市街地の調査であり、民家や事業所出入口を確保しなければならず、26年度は限られた調査範囲となった。27年度は民家などの出入口について、地域住民の協力を得て、調査区を分割調査により出入口を確保し、可能な部分を調査範囲とした。また、道路には上下水道・ガス管が複雑に埋設されており、27年度には佐野市水道局・都市建設部下水道課・ガス会社の協力を得て、埋設位置を確認して、事故を防ぐ観点から、この位置を調査範囲外とした。表土除去は重機により、ソフトローム面まで掘削した。26年度には路線内から排土を搬出して、仮置した。27・28年度は路線内の各調査区内で排土を反転し、半分ずつ調査を行った。このため、1回の調査は限定された範囲となることもあった。

表土除去後、26年度はグリッド杭設定を委託して行った。27・28年度は道路幅杭に公共座標値があることから、これを基本にして、調査区内に任意の仮杭を設定し、道路幅杭と調査区内仮杭の位置関係を記録した。各年度ともに、これらの杭を基にして公共座標を入れた全体図を作成し、調査区全体図を作成した。ただし、幅杭の座標は東日本大震災前のもので、地震で位置がズれていることから、座標修正を行った。

表土除去後には遺構を確認する。遺構番号は1区から遺構の種類を分けずに通し番号とした。竪穴住居跡は土層観察用ベルトを設定して覆土を掘り下げ、土坑などは覆土を半載して、土層を観察した。観察結果を基に図面を作成した。平面図について、26年度は写真から作図を委託したが、27・28年度は平板で実測した。

写真撮影は遺構・遺物出土状況・土層等について、カラーリバーサル・モノクロ35mmフィルム、デジタルカメラで記録したが、モノクロ撮影は行わなかったこともある。

### 第3節 調査の経過

平成26年度は、4月中に現地調査の準備を行い、5月22日から重機による表土除去を開始した。排土は調査地から別な場所に搬出し、6月2日からは発掘作業員により遺構確認を始め、翌日から遺構の覆土掘り下げを行った。調査は、1区から7区について行い、平面図は写真図化委託により、土層図は調査員・作業員で作図した。調査終了後に埋め戻して、機材等を7月31日に撤収した。

平成27年度は、10月中旬まで現地調査の準備を行い、10月20日から表土除去を開始した。本年度は、各調査区の排土は調査区内に置くこととしたため、各調査区は2回や3回に分けて狭い範囲を調査することになった。10月22日からは発掘作業員により、遺構確認を昨年度調査地の北側（8区）から行い、竪穴住居跡や土坑の掘り下げを始めた。8区は11月4日までに調査を終えて、埋め戻した。9区は10月22日から11月6日まで調査を行い、10区は排土を調査区内で移動して、3回に分けて調査し、11月17日に終了した。11区は10月23日から表土除去を始めて、2回に分けて1軒の竪穴住居跡を調査した。民家の出入り口のため、短期間の調査で、11月6日に終了した。13区は10月29日から11月6日まで調査を行い、排土を調査区内で移動し、3回に分けて発掘した。14区は11月24日と25日に行い、調査区を南北に2回に分けて発掘した。15区は12月7日から11日まで調査し、出入口の関係で2回に分けて発掘した。

平成28年度は、5月9日から16区の表土除去を始め、6月24日まで、南北に反転して2回に分けて調査した。現地調査終了後は、7月から整理作業を6ヶ月行い、図面整理や出土品の整理・図化などを経て、報告書刊行に至った。



15区 遺構確認



竪穴住居跡掘り下げ



10区 作業風景



地元小学生に説明会

## 第2章 遺跡の環境

### 第1節 地理的環境 (第3図)

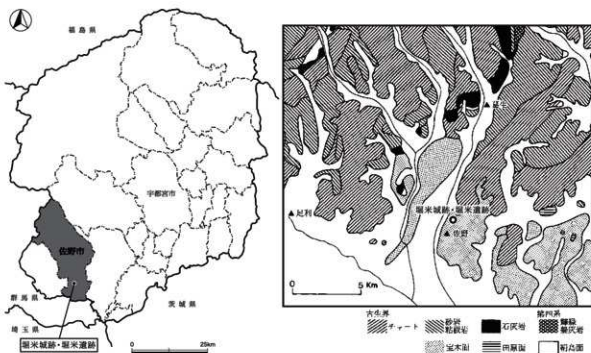
栃木県は、関東地方の北部に位置し、その中央部は平野が南北に広がる。東西は山地であって、山地と平野部の面積は2対1程である。県の西側には、足尾山地など標高の高い山が連なり、対照的に東側は八溝山地と呼ばれる低い山地がのびている。東西の山地に挟まれた平野は、関東平野の北縁で、平野北部は主に丘陵地、南部は洪積台地と沖積地となっている。

佐野市は、県の南西部、足尾山地南縁部が平野部に接する地域になっている。県の南端で、南は群馬県館林市や板倉町と渡良瀬川を挟んで接している。河川は、足尾山地から流れ出る秋山川を中心に、東に三杉川、西に才川・旗川・出流川が南流し、いずれも渡良瀬川に注いでいる。三杉川から渡良瀬川との間には、越名沼が存在していたが、干拓工事でなくなった。

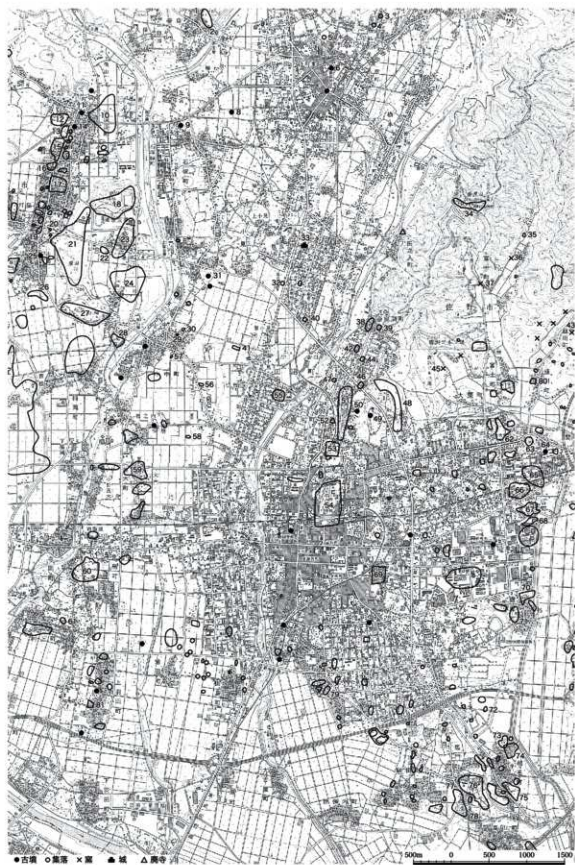
本遺跡は、佐野市街地の北西部にあって、秋山川などで開析した扇状地性低地に面し、台地の西端に立地する。台地は宝木面にあたり、南北に長くのびている。北側には、唐沢山に代表される山並みが旧葛生町と岩舟町の境となって続いている。遺跡はその山地から台地へ変わった付近に位置している。

西側の秋山川は、旧葛生町の山間地から南東に流れ、その市街地付近で南西に流れを変えて、開析地の幅を広くしていく。このため、この低地は、現在も豊かな穀倉地帯であり、清らかで豊富な湧水がみられる。

さらに遺跡周辺の地形をみると、台地上において堀米町東部で低地が樹枝状に入り組んでいる。山地の南側を南北に流れる小河川があって、三杉川に合流する。このように、本遺跡は小さな浸食谷が入る南北台地上の西端に立地している。



第3図 堀米城跡・堀米遺跡の位置と周辺の地形図



第4図 堀米城跡・堀米遺跡周辺の遺跡分布図

第1表 堀米城跡・堀米遺跡周辺の遺跡一覧

No.	遺跡名	種別	No.	遺跡名	種別	No.	遺跡名	種別
1	堀山城跡	城館跡	28	小峯山遺跡	集落跡	55	権道寺廃寺跡	寺院跡
2	堀山古墳群	古墳	29	後口遺跡	散布地	56	藤田遺跡	散布地
3	樋子尾遺跡	散布地	30	人丸神社裏遺跡	集落跡	57	穴田遺跡	散布地
4	関根遺跡	散布地	31	トコチ山古墳	古墳	58	町田遺跡	散布地
5	堀城塚遺跡	集落跡	32	寺之後遺跡	集落跡	59	館之田遺跡	集落跡
6	稲荷久保古墳	古墳	33	観音寺城(清水城)跡	城館跡	60	大日安摩寺跡	廃寺
7	一飯塚古墳	古墳	34	唐沢山城跡	城館跡	61	村上中書遺跡	散布地
8	菅丁原古墳	古墳	35	行屋遺跡	墓跡	62	新町遺跡	集落跡
9	十三墓塚古墳	古墳	36	ゼニゴ沢家跡	窯跡	63	米山古墳群	古墳
10	四十八塚古墳群	古墳	37	上富士家跡	窯跡	64	米山東古墳	古墳
11	出流原白山古墳	古墳	38	奈良側古墳群	古墳	65	住宅団地内遺跡	集落跡
12	出流原遺跡	集落跡	39	天日山墓跡	墓地	66	橋田遺跡	集落跡
13	北の内遺跡	集落跡	40	一丁田遺跡	散布地	67	クジラ山西遺跡	集落跡
14	宿高2号墳	古墳	41	中塚遺跡	散布地	68	工業団地内遺跡	集落跡
15	向原遺跡	集落跡	42	奈良側遺跡	散布地	69	阿曾沼城跡	城館跡
16	ドーギ遺跡	散布地	43	荻川窯跡群 二通窯跡	窯跡	70	北の山遺跡	集落跡
17	横小路城跡	城館跡	44	中塚遺跡	散布地	71	ゴロノミヤ遺跡	集落跡
18	中山古墳群	古墳	45	唐沢山ゴルフ場塚輪遺跡	窯跡	72	エダロノ遺跡	散布地
19	松家遺跡	集落跡	46	下田遺跡	散布地	73	松山古墳	集落跡・古墳
20	千代岡北遺跡	散布地	47	上通西遺跡	散布地	74	松本丹波守館跡	城館跡
21	東山古墳群	古墳	48	堀米古墳群	古墳	75	愛宕山古墳群	古墳
22	藤沼遺跡	集落跡	49	八幡山古墳	古墳	76	宮西遺跡	集落跡
23	藤沼古墳群	古墳	50	茶臼山古墳	古墳	77	馬門愛宕塚古墳	古墳
24	五箇古墳群	古墳	51	堀米城跡	集落跡	78	馬門市街跡	集落跡
25	赤見市街古墳	古墳	52	上通東遺跡	散布地	79	若宮遺跡	集落跡
26	十三鉢塚古墳群	古墳	53	堀米城跡	城館跡	80	小倉城跡	城館跡
27	愛宕山古墳群	古墳	54	佐野城(春日岡城)跡	城館跡	81	羽田城跡	城館跡

## 第2節 歴史的環境 (第4～10図・第1表)

堀米遺跡で発見された古墳時代後期から平安時代前期、中世鎌倉時代頃の周辺の遺跡について概観する。周辺の後期古墳は、近隣で北側に奈良岡古墳群が3基、田之入古墳群が2基、北東側に古河岩古墳群が2基、東側に堀米古墳群で7基残っている。以前は堀米・犬伏の丘陵上に10基以上が群在していたという(前沢1975)。これらの古墳群は、秋山川以東で、佐野の台地を囲む丘陵やその縁に立地し、本遺跡に居営した集団の墓域として最も蓋然性が高い。この古墳群を包括するこの地域の首長墓としては、赤見地区で墳丘35mのトコチ山古墳や十二天塚古墳が挙げられる。後者の古墳は墳丘径45m、周溝径97mに復元され、埴輪を有する。犬伏周辺にも米山古墳や33mの米山東古墳、時期が不確定ながら一辺38mの方墳の大榎塚古墳がある。

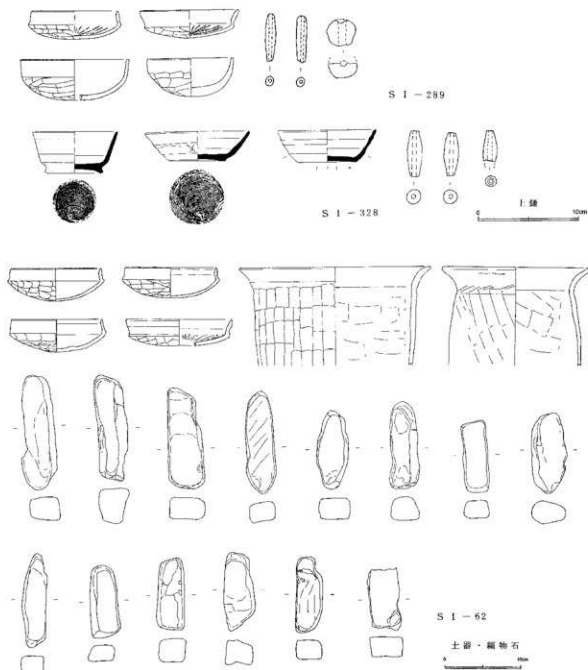
これらが、古墳時代後期の地域首長墓であろう。この地域は、後期に前方後円墳が確認できない点が特徴であり、足利市域で前方後円墳が多い点と対照的である。これら群集墳の上位政治勢力は、足利市域の前方後円墳群を介するか否か不明であるが、栃木県南部域で最も大型古墳群である栃木市・壬生町・小山市・下野市にまたがって築かれる古墳群が、下毛野をまとめる最も大きな勢力であろう。6世紀後半以降では、吾妻古墳・甲塚古墳・愛宕塚古墳等、下毛野古墳群と呼ばれる古墳群が挙げられる。そこで、堀米周辺の古墳群勢力の階層関係を図式的に示せば、次のようになるであろう。

奈良岡古墳群・田之入古墳群・堀米古墳群等→トコチ山古墳・十二天塚古墳等→吾妻古墳等

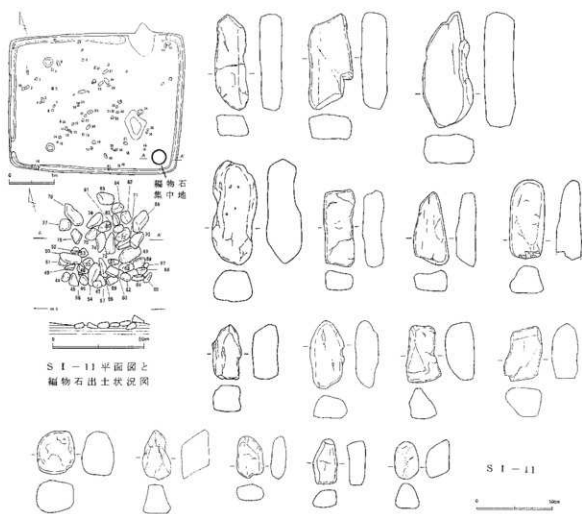
生産域である秋山川と旗川に挟まれた範囲は低地であり、堀米古墳群などに対する川の西側では赤見地区に多くの後期群集墳が存在する。東山古墳群・中山古墳群・蓮沼古墳群・五箇古墳群・愛宕山古墳群・小峯山の古墳群などを挙げることができる。これらは、円墳群で構成されており、足尾山塊から旧田沼市街地で開ける秋山川低地と旗川低地の生産域を統括した十二天塚古墳被葬者等の傘下にあった集団の墓とみなすこ

とができるであろう。さらに堀米遺跡の居住集団は、このような地域の支配関係に組み込まれていたと推定することができる。

次に、集落遺跡の分布傾向などについてみる。この点については、中村岳彦氏が古墳時代の佐野周辺の遺跡分布と集落展開の特徴を示している(中村 2016)。氏による古墳時代の遺跡分布をみると、台地の中央部には遺跡が少なく、縁辺部に多く所在しているようである。集落動向の画期について、6世紀前半頃には大型竪穴建物が出現し、集落の画期を迎える。その後7世紀後半になり、大型竪穴建物や群構成が解体するなど、大きな変化を迎え、国家的編成の影響を受けるという。佐野地域の集落動向をみるうえで、注目すべ



第5図 馬門南遺跡の生業具



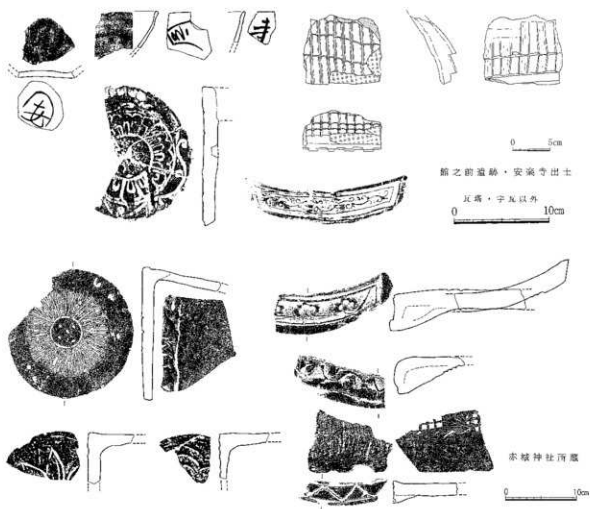
第6図 寺之後遺跡の編物石

き見解である。また、カマドの煙道形態から、佐野の南部域と北部域での類似性を指摘し、形態差を集団の差異とみている。地域集落の動向は、多角的な視点から今後も検討していく必要がある。

次に、生産域をみていくと、水田には秋山川と旗川に挟まれた低地が使われたと推測される。吉水付近までは自然堤防による微高地となっているが、これよりも南側は湧水に恵まれた扇状地性低地となっている。『栃木県史通史編2』によれば、秋山川・才川の流域で、並木町・大橋町・伊保内町周辺には条里遺構が分布していたとされる(岡田 1980)。この条里遺構の遡源がいつになるかは明らかでないが、水田好適地であることは推測できよう。

周辺遺跡の生業についてみると、生業に係わる資料で最も顕著なのは網漁に用いる土鍾・土玉と蓆編みに使う鍾(編物石)である。遺跡による出土傾向の差異は顕著である。南部地域に位置する馬門南遺跡では渡良瀬川に近いことに起因し、土鍾や土玉が多い。また、越名沼に面する黒袴台遺跡では、大型土鍾も出土しており、多様な漁法がこの地域でも採られていたとみられる。また、編物石も馬門南遺跡で比較的多く出土している。漁労や蓆作りなど多様な生業を行っていたことが明らかである。寺之後遺跡で編物石が堅穴住居の隅にまとまって42箇置かれた状態で発見された。これにより、編物石の多様な形態が把握でき、長さで2倍以上に及ぶ川原石が混用されていたようである。





第7図 館之前遺跡・安楽寺出土、赤城神社所蔵品

奈良・平安時代には、安蘇郡に4つの郷があり、本遺跡周辺は麻統郷になると考えられる。郡家の位置は不確定であるが、瓦や黒書土器などの出土傾向からみて、秋山川低地の微高地上にある館之前遺跡や安楽寺付近か、佐野台地南端の赤城神社付近とみられる。前者であれば、本遺跡から郡家は比較的近くて、郡家所在郷になる可能性がある。

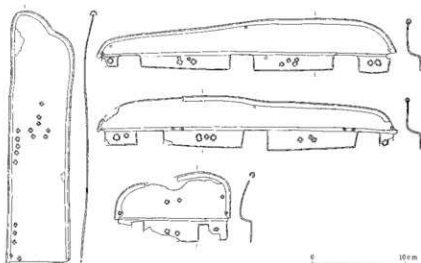
集落の分布を前掲の中村氏の論考に掲載された図などからみると、佐野台地の中央部に一定数確認できるようになり、台地奥部への畑作開発などが拡大したと読みとることができる。当該期の代表的な遺跡としては、黒袴台遺跡・馬門南遺跡・ゴロノミヤ遺跡・館之前遺跡などを挙げることができる。この時期には、三義山周辺で窯業生産が盛んになり、須恵器・瓦が作られ、瓦は国府・国分二寺など、須恵器は下野国内全域や武蔵国などにも流通する。また、東山道駅路が犬伏などを通っていたと推測されており、本遺跡の南側にあたる。平安時代末には、藤姓足利氏から佐野氏が分かれ、この地域を支配した。唐沢山神社に伝わる大置金具は佐野氏伝来の鍔であり、避来矢と号して尊崇されている。

この地を広く治めていたのは佐野氏であるが、鎌倉時代から南北朝項の実態は記録などがない。佐野氏の城に関する最初の記述は、『松隠私語』の文明3年（1471）の記述に「天明之上之山佐野城」とあり、これが唐沢山城と考えられている。これ以前については系図が伝わるのみといってよいだろう。佐野氏の史料が

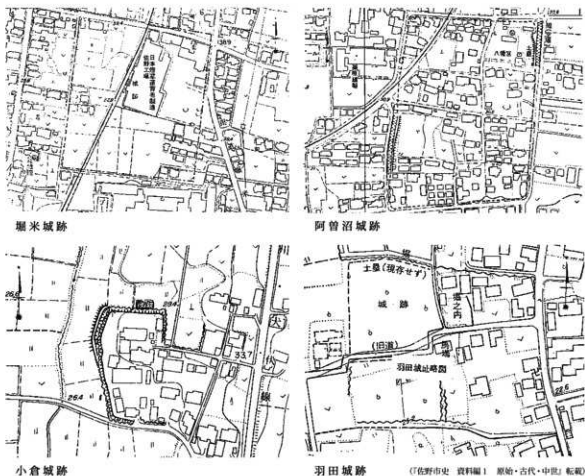
増えるのは戦国時代になってからである。佐野氏の居城は清水城と唐沢山城であり、市の南部には平城、北部には山城が多く築かれる。山城には要谷山城のように石垣が広く築かれるものもあって、戦国時代の佐野氏の城郭網をみていくことができる。

しかし、鎌倉時代の佐野市域を支配した地域勢力関係は不明な点が多い。『佐

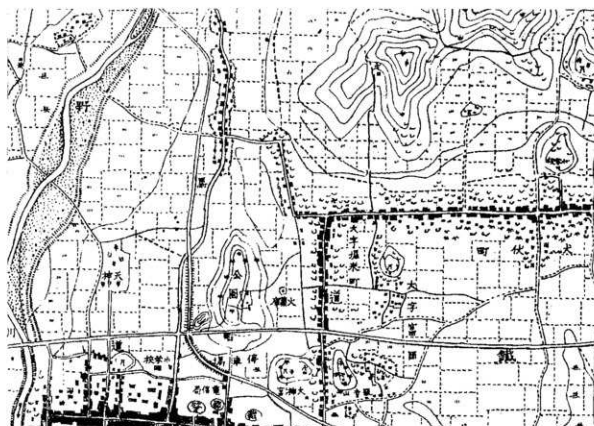
野市史 資料編1』に掲載された鎌倉時代の城館をみると、清水城跡（興聖寺城跡）・赤見城跡・阿曾沼城跡・小倉城跡・羽田城跡、及び堀米城跡など限られる。清水城跡は佐野氏の祖となる一人国綱の居住地という説もあり、これに従えば、堀米城跡は秋山川を挟んで佐野氏の勢力基盤地に対峙する城・小地域勢力であっ



第8図 唐沢山神社蔵大鎧の金具追実測図



第9図 関連城跡概略図



明治20年出版 1/20,000 地図 (参謀本部陸軍部測量局作成)

第10図 堀米周辺の地割

たことになる。市史で復元された域の範囲と古地図(第10図)の地割を対比すると、堀の方向は古地図の地割と概ね合っている。堀米城跡は、日本寺の梵鐘銘から堀籠氏の居城と考えられている。この梵鐘は元亨元年(1321)鋳造であり、堀籠有元が大檀那になっている。しかし、堀籠氏が出現する時期も明らかでなく、勢力範囲やその時期については、今後の課題であろう。

【主要参考文献】

- 青木健二ほか 1990『館之前遺跡』佐野市教育委員会
- 岡田隆夫 1980『美里』『栃木県史 通史編2 古代2』栃木県
- 小島友美ほか 2002『ゴロノミヤ遺跡』佐野市教育委員会
- 齊藤 弘 1988「十二天塚古墳の形態と規模」『市道 1059 号線改良工事地内遺跡発掘調査報告書 向原遺跡・蓮沼遺跡・十二天塚古墳』佐野市教育委員会
- 佐野市史編さん委員会 1975『佐野市史 資料編1 原始・古代・中世』佐野市
- 佐野市立博物館 2015『上杉謙信がやってきた 図録』
- 中村岳彦ほか 2010『墳城塚遺跡』佐野市教育委員会
- 中村岳彦 2016「栃木県・佐野地域における古墳時代後期集落の動態」『地域考古学』1号
- 仲山英樹 1995『馬門南遺跡』栃木県教育委員会・(財)栃木県文化振興事業団
- 前沢輝政 1975『下野の古代史(下)』有峰書店
- 茂木克美・池田敏宏 2003「瓦塔二題—安蘇地域採集瓦塔について—」『唐澤考古』22
- 茂木克美・大橋泰夫 2003「佐野市赤城神社保管の遺物について」『栃木県考古学雑誌』第24集
- 宮田忠洋ほか 2009『堀米遺跡Ⅲ』佐野市教育委員会
- 吉田 哲 2001『馬門南遺跡Ⅱ』栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯学習文化財団

## 第3章 発見された遺構と遺物

### 第1節 調査の概要（第11～17図、図版三・四）

県道堀米停車場線改良工事に伴う発掘調査は、路線が南北に長く、拡張工事によるため、調査区も南北に細長くなっている。また、市街地のため、生活道路や上下水道やガスなどのライフラインの埋設物が細かく入っている。このため、市民生活に支障のない範囲で最大限の調査を行うことが要請される。平成26年度は、調査を南端から実施したが、先述のような理由により、開発予定地の南半部を中心とした調査とせざるを得なかった。平成27年度は生活道路や埋設物が多いことから、調査できなかった箇所も多い。8区以外は、民家などの出入口部分について、協力を得ながら、排土を反転して調査を行った。以下、1区から調査概要を述べる。

1区は中世の堀跡が発見された。堀は周辺の道路の方向と同じく南北方向を向いていた。堀米城跡の一面と考えられ、覆土中から生産関連遺物も出土した。

2・3区では、遺構・遺物は発見されなかった。

4・5・6区では、中世のかわらけなどを出土した土坑や溝が発見された。5区の溝跡も1区の堀跡と同じ方向にのびており、関連が留意される。6区では方形竪穴の可能性もある遺構が発見された。

7区では地下式坑とみられる遺構が確認され、1区から7区までは主に中世の遺構が展開した範囲といえるであろう。

8区は、古代集落が展開する南限といえる。さらに、中世の井戸跡や土坑も確認され、1区から続く中世遺跡が主体となる北限であろう。また、現市道・県道かそれ以前の道路の側溝が確認された。

9～11区は古代集落が散在して発見された。竪穴住居跡は古墳時代後期から平安時代前期の所産である。さらに、8区から続く道路の側溝も9・10区まで確認された。

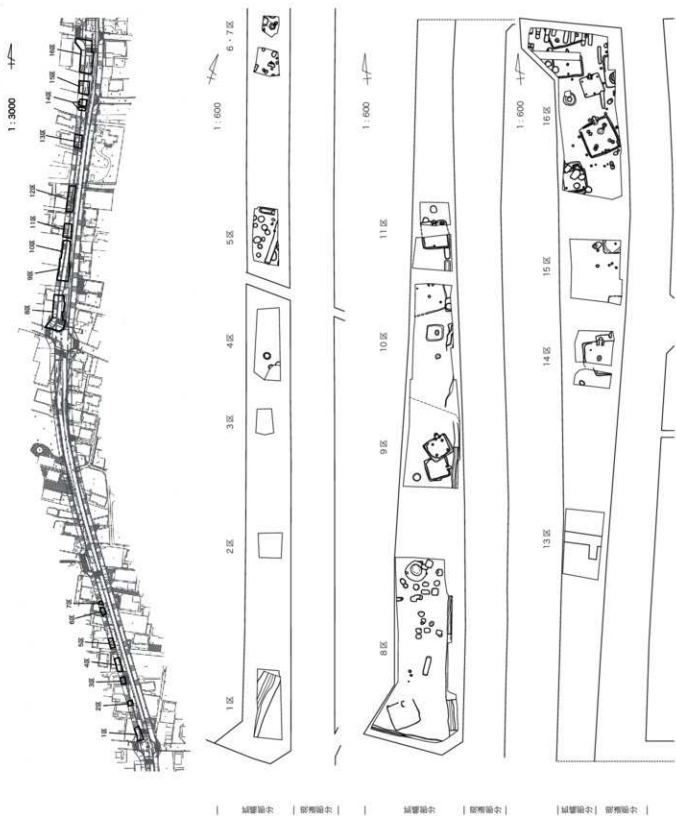
12区は、県教育委員会の確認調査の結果、遺構は確認されず、発掘調査（本調査）を行う対象から除外された。8区から続く古代集落の遺構は発見されず、ここで集落が小区分される可能性がある。一連の調査地であることから、この部分を12区として扱っておく。

13区では、古代集落の遺構は発見されず、遺構確認面としたローム面も低くて、埋没谷が東西に入っていることが確認された。この小支谷によって、古代集落も小さな境となっていた。

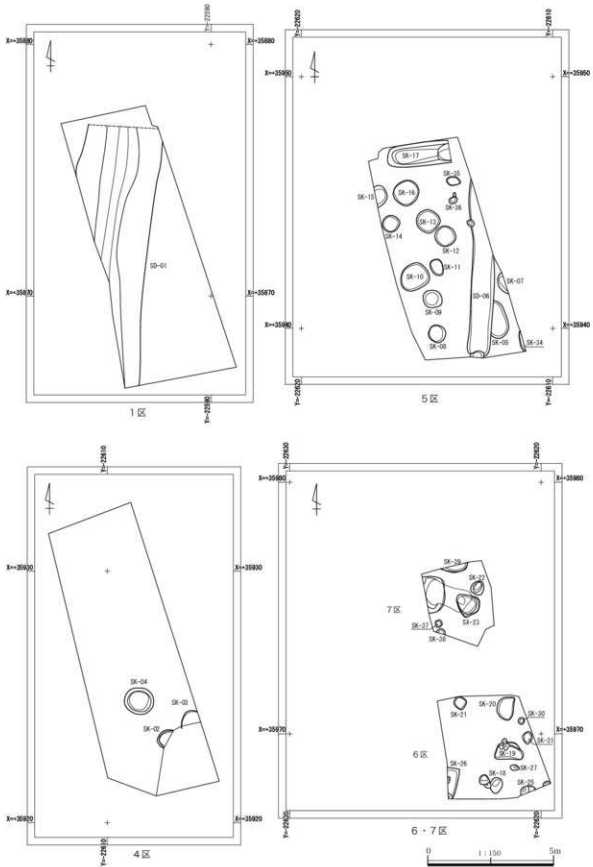
14・15区では竪穴住居跡が散在して発見された。特に14区では鍛冶関連遺物がまとまって出土したことから、平安時代前期にこの付近で鉄生産の行われていたことが明らかになった。

16区では古墳時代後期から平安時代前期の集落を構成する竪穴住居の分布密度が増す。古代集落の中心部に近づいたといえる。井戸跡も集落に伴う可能性がある。

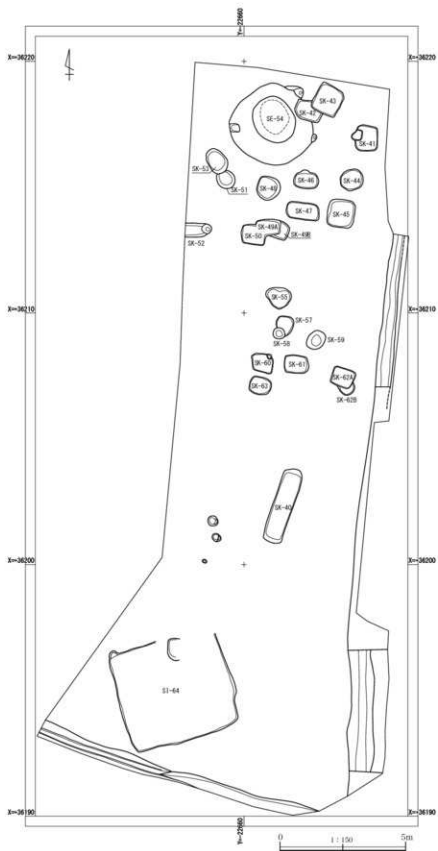
以上のように、1区から8区までが鎌倉時代から室町時代頃の中世の遺跡が主に展開する範囲である。堀米城跡に関連する場所であろう。8区から11区が古墳時代後期から平安時代前期の古代集落が展開する。13区で小支谷が入って、その北側の14区以北において、古代集落が密に展開する。ここからが従来より指摘されてきた堀米遺跡の範囲といえるであろう。このため、厳密には小支谷によって小区分された8区から11区の古代集落は、新発見の古代集落とみるべきであろう。



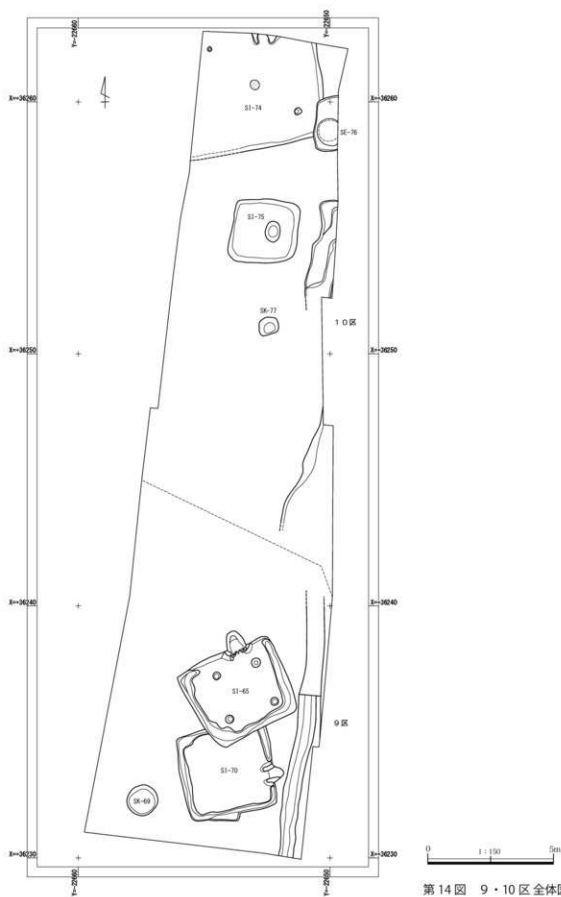
第11図 堀米城跡・堀米遺跡調査区位置之全体図



第12図 1・4・5・6・7区全体図

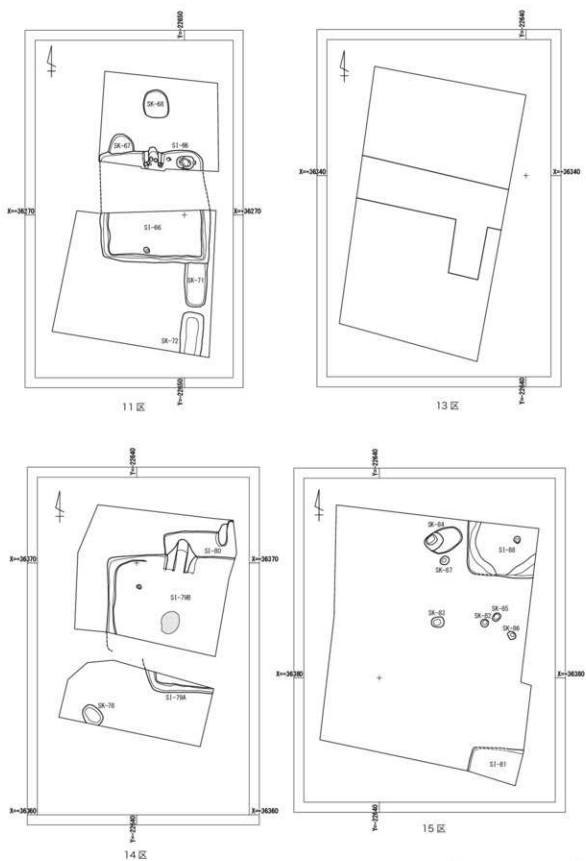


第13図 8区全体図

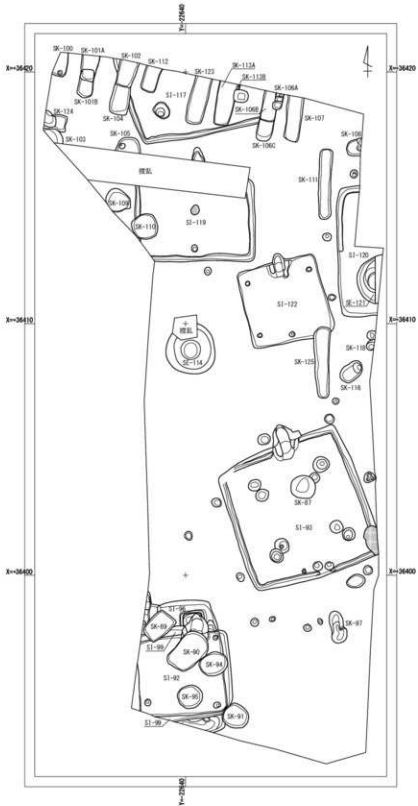


第14図 9・10区全体図

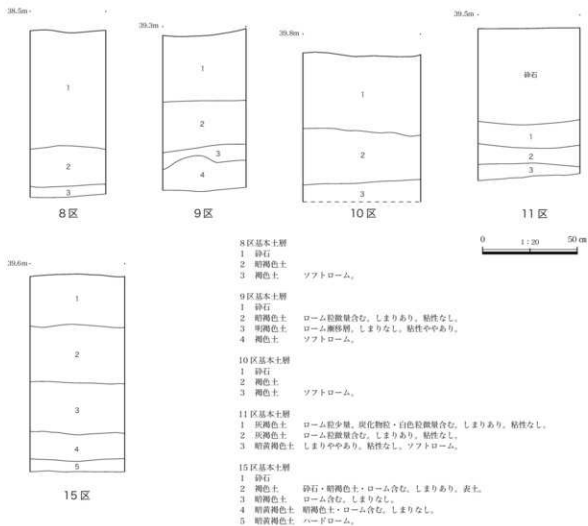
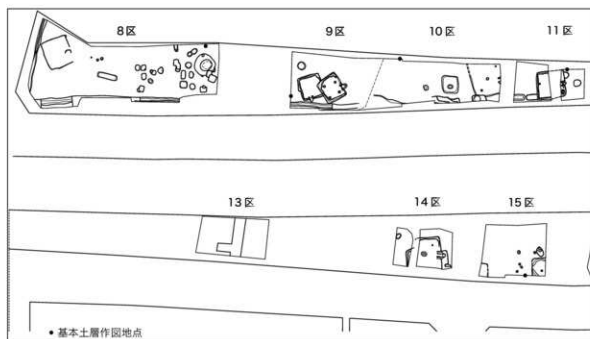




第15図 11・13・14・15区全体図



第16図 16区全体図



第17図 基本土層

## 第2節 堀米城跡

平成26年度の調査区（1～7区）では、堀米城跡推定地に近い位置であることから城跡関連遺跡として調査を行った。その結果、中世の堀跡や地下式坑・土坑が発見された。

### （1）堀跡・溝跡

#### 1区SD-01（第18図、第2表、図版一・一八）

堀籠氏が居住したとされる堀米城跡は、『佐野市史 資料編1』によれば、堀米駅の南方250m程の所に堀跡と土塁が残っていたという。市史には推定地も示されているが、今回の調査では、この推定位置よりも南方から堀跡が発見された。

堀は調査区南端の1区で発見され、遺構確認面で幅3.2m、確認できた長さは10.3m程である。短軸断面は薬研形で、底は0.3～0.4m程の平坦面になっており、水平で一方が低くなる形態ではない。側面はほぼ直線状になっているが、中位の緩やかな傾斜変換点を結んで平面図に示した。堀は、南北に近い方向でのびており、この東側に残る道と平行している。

堀の覆土は上層から黒褐色土、明褐色土、暗褐色土で、最下層には暗茶褐色土が堆積していた。壁際の図中3層はローム粒をやや多量含んでいるが、1・2層ではロームブロックやローム粒は少なく、全体的に自然堆積した土と判断される。堀の掘削土・土塁の崩落土と考えられる土は確認できなかった。

遺物は、全て覆土掘り下げ中に出土した。1～3は非ロクロのかわらけで、内外面に粘土接合痕や押圧痕がある。1は大型で平底になっており、2・3は小型品で丸底であり、形態や大きさで分類できる。4・5はロクロ製のかわらけである。底部は回転糸切り痕があり、4はやや大型のものであろう。6は胴部外面に平行の叩き痕があり、8は銅銭で天聖元寶（北宋1023年初鋳）、9は馬の歯で分離した一部であらう。10の羽口は小さな残片であるが、表面がガラス質化しており、炉内に挿入した一部とみられる。溶解炉の炉壁の一部が付いている。この他にも図化しなかったが、炉壁片が少数出土した。

#### 5区SD-06（第20・21図、第5表、図版二）

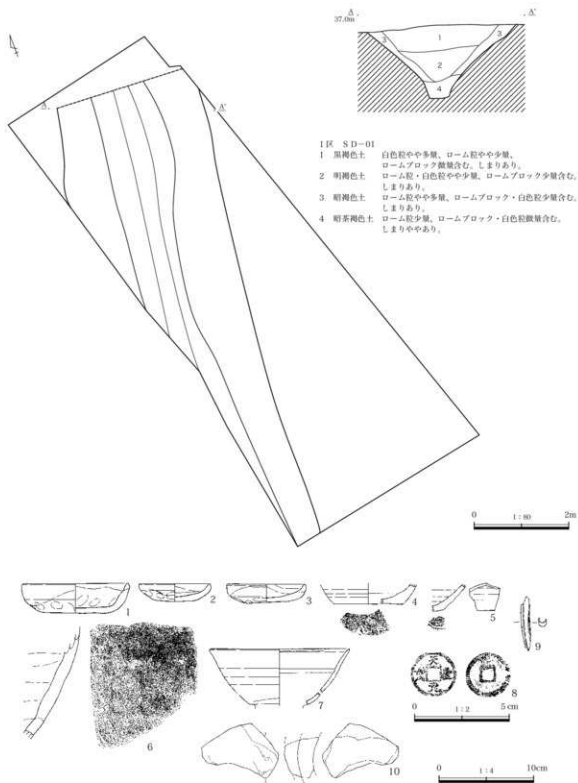
5区で南北方向にのびる溝である。その方向は、1区SD-01や宅地化前の周辺の地割りに一致している。溝の幅は0.8～0.9mで、確認できた長さは7.0mである。南端では小さな土坑と重なっているが、溝が切れており、この部分が入り口になっていた可能性も残る。底面の高さは10cm程の高低差はあるが、南北一方に低くなるものではない。深さは確認面から25～30cm程である。北端にはSK-17とした遺構がある。土坑と報告するが、細長くて溝状になり、SK-17と直交する可能性も残る。覆土はローム粒を少量含む褐色土であった。

覆土中からかわらけの底部片が出土した。ロクロナデ、底部回転糸切りで、小型のものである。本遺構が中世になる可能性を示唆する遺物である。

### （2）地下式坑

#### 7区SX-23（第19図、図版二）

7区で発見された。当初調査区中央の掘り込みと調査区西端のものを別遺構として掘り下げた。しかし、前者の底面に段差があり、西壁の低位が判明しなかった。一方、後者を掘り下げると、東側壁の低位がはずりにトンネル状になった。このため、両者は同一遺構で、天井部が一部遺存する地下式坑と判断した。



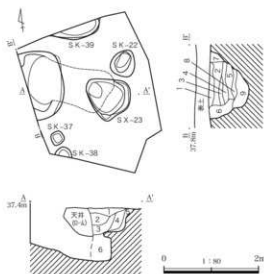
第18図 1区SD-01実測図・出土遺物実測図

第2表 1区SD-01 出土遺物観察表

No.	器種	大きさ (cm)	技法等	胎土	焼成	色調	残存率	注記
1	かわらけ	口径: 11.0 器高: 3.1	内: 粘土接合痕・押圧痕あり、ナデ・ヨコナデ。 外: 口縁部ヨコナデ、体部押圧痕、体部へ口縁部に粘土接合痕、底部押圧痕。	良好。灰色微粒・黒色微粒少量、赤褐色粒微量。	良好	内外: 乳褐色	口縁部一部 欠きほぼ完存	
2	かわらけ	口径: (7.4) 器高: 1.9	内: ナデ・ヨコナデ・ナデ上げ。 外: 口縁部ヨコナデ、底部粘土接合痕・押圧痕あり。	良好。灰色細粒・黒色細粒・赤褐色粒少量。	やや不良	内外: 乳褐色	口縁～底部 1/4	
3	かわらけ	口径: 8.2 器高: 2.0	内: ヨコナデ・ナデ・ナデ上げ。 外: 口縁部ヨコナデ・粘土接合痕あり、底部押圧痕。	良好。灰色細粒やや多量、赤褐色細粒微量。	良好	内外: 乳褐色	口縁～底部 3/4	
4	かわらけ	底径: (7.2)	内: ロクロナデ。 外: 体部ロクロナデ、底部回転糸切り。	良好。灰色細粒やや多量、赤褐色粒少量。	良好	内外: 乳白色	底～体部下 位1/4	
5	かわらけ		内外: 体部ロクロナデ。 外: 底部回転糸切り。	良好。赤褐色細粒少量、黒色細粒・白色細粒微量。	良好	内: 淡褐色 外: 淡褐色・灰色	底～体部 中・下位一 部	
6	常滑産 壺		内: ナデ・粘土接合痕あり。 外: 印き・ナデ、自然釉付着。	やや粗い。白色細粒多量、白色粒・白色粗粒少量。	良好	内: 暗灰色 外: 暗灰緑色	胴部一部	
7	碗	口径: (14.6)	ロクロナデのち外面下端回転ヘラケズリ。 内面～体部外面灰釉施す。	精良。	良好	内外: 明灰緑色	口縁～体部 1/4	
8	天竺元寶						完存	
9	馬歯						一部	
10	羽口	羽口厚: 1.8 一1.5 孔径: (10.4)	羽口外側は黒褐色ガラス化しており、表面は黒褐色。洋が一部垂下する。溶解印の大口徑羽口。	白色粒多量・黒色粒少量	良好	内: 橙色	仰内側一部	

底面の形状から東側が竪坑で、西側が室であろう。竪坑は確認面で1.0×0.9m程の規模で、平面扇状になっている。東側から降りて、幅0.4m程の平坦部があり、室に至る。室は幅0.8～1.0m程で、東西に細長くなっている。南壁は、天井崩落部と遺存部の境付近で15cm程の段が確認され、片袖状である。天井は遺構確認面から0.6m程の厚さで残っている。この付近では、現在の地表から遺構確認面まで0.2～0.3m程であり、当時の天井の厚さを最大にみても0.8～0.9mである。天井の下面から室の底面までは0.5m程であり、室の天井は極めて低い。図化した範囲では、室底面は奥壁に向かいやや上がっており、さらに天井が低い構造になっていた可能性がある。

覆土は、竪坑部分では、土層図A-A'で示したように、ロームブロックやローム粒が多くて、埋め戻し



第19図 7区SX-23 実測図

## A-A'

- 1 黒褐色土 ローム粒やや少量、白色粒少量含む。しまりややあり。
- 2 暗褐色土 ロームブロックやや多量、白色粒やや少量含む。しまりややなし。
- 3 明茶褐色土 ロームブロック・白色粒やや多量、ローム粒やや少量含む。しまりややあり。
- 4 明灰褐色土 ロームブロック・ローム粒やや多量、白色粒少量含む。しまりあり。
- 5 暗灰褐色土 ロームブロック多量、ローム粒・白色粒少量含む。しまりあり。
- 6 黄褐色土 ロームブロック・ローム粒多量、白色粒微量含む。

## B-B'

- 1 褐色土 粘土・灰化土・ローム粒微量含む。しまりややあり。粘性なし。
- 2 明褐色土 ローム粒やや多量、ロームブロック少量含む。しまりなし。粘性ややあり。
- 3 褐色土 ロームブロック・ローム粒少量含む。しまりなし。粘性ややあり。
- 4 明褐色土 ローム粒多量、ロームブロックやや多量含む。しまりなし。粘性ややあり。
- 5 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒少量含む。しまりなし。粘性ややあり。
- 6 明褐色土 ローム粒多量、ロームブロック少量含む。しまりなし。粘性あり。
- 7 明褐色土 ローム粒やや多量含む。
- 8 明褐色土 ロームブロック・ローム粒多量含む。しまりなし。粘性ややあり。
- 9 明褐色土 ロームブロック主体、褐色土少量含む。しまりなし。粘性あり。

た土であることが容易に推察することができる。土層図B・B'では最下層の9・10層がロームブロック主体であり、厚さ0.3m程になる。この層は天井崩落土と判断することができる。これよりも上の1～5層は9・10層に比べてロームの割合が低い。しかし、自然堆積とみるにはロームが多くて、陥没後に埋めた土とみるべきであろう。

遺構内から遺物は出土していない。

### (3) 土坑

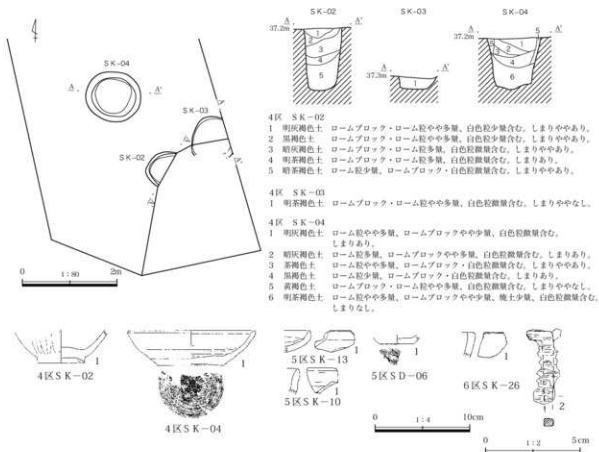
調査区内から中世の遺物が出土した土坑や時期不明の土坑が発見された。特徴あるものなどについて、説明していく。

#### 4区SK-02 (第20図、第3表、図版二・一八)

平面円形で、径80cm、確認面からの深さ130cm程の筒型をした土坑である。半分程が遺存していた。覆土はロームブロックを多量かやや多量含んだ層が多くて、人為的に埋め戻した可能性が高い。覆土中から龍泉窯の甕が出た。体部にやや細い蓮弁文がある。

#### 4区SK-04 (第20図、第4表、図版二・一八)

平面円形で、径105～115cm、確認面からの深さ110cm程の筒型をした土坑である。周囲の壁は垂直気味に立ち上がっている。形態的にはSK-02と類似している。覆土は中位の4層でロームが少なかったが、



第20図 4区SK-02・03・04 実測図・  
4区SK-02・04・5区SK-10・13・SD-06・6区SK-26 出土遺物実測図

第3表 4区SK-02 出土遺物観察表

No.	器種	大きさ(cm・g)	技法等	胎土	焼成	色調	残存率	注記
1	青磁碗	高台:(5.0)	内外面ロクロナデ。 外:体部蓋弁文、底部削り台し高台。 内面~外面高台外側まで旋輪。 龍泉窯。	良好。	良好	内外:灰緑色	高台~体部下位1/3	

第4表 4区SK-04 出土遺物観察表

No.	器種	大きさ(cm・g)	技法等	胎土	焼成	色調	残存率	注記
1	かわらけ	口径:(13.2) 底径:7.0 器高:3.7	内面~体部外面ロクロナデ。 外:底部回転糸切り。	良好。赤褐色細粒 や少量、赤褐色 粗粒・黒色細粒微 量。	良好	内外:明褐色	底部3/5、体 部1/4	No.1・ 2・表 探

第5表 5区SD-06 出土遺物観察表

No.	器種	大きさ(cm・g)	技法等	胎土	焼成	色調	残存率	注記
1	かわらけ	底径:(3.6)	内外面ロクロナデ。 外:底部回転糸切り。	良好。赤褐色粒・ 黒色細粒少量。	良好	内外:乳褐色	底部1/4	

第6表 5区SK-10 出土遺物観察表

No.	器種	大きさ(cm・g)	技法等	胎土	焼成	色調	残存率	注記
1	かわらけ		内面~口縁部外面ヨコナデ。 外:口縁部に粘土接合痕、体部に押圧痕。	良好。赤褐色細粒 少量。	良好	内外:明褐色	口縁部一部	

第7表 5区SK-13 出土遺物観察表

No.	器種	大きさ(cm・g)	技法等	胎土	焼成	色調	残存率	注記
1	かわらけ		内:ナデ。 外:口縁部ヨコナデ、底部押圧痕。	良好。黒色細粒・ 灰色細粒少量。	良好	内外:乳白色	口縁部一 部、底部1/8	

第8表 6区SK-26 出土遺物観察表

No.	器種	大きさ(cm・g)	技法等	胎土	焼成	色調	残存率	注記
1	内耳土器		内外:口縁部ヨコナデ。	良好。白色細粒・ 黒色細粒少量。	良好	内外:明褐色	口縁部一部	
2	鉄製品 釘	重さ:3.87	頭をL字形に折り曲げる。断面方形で表面 には釘足に直交する方向に木質が付いている。				足端欠損	

上位に1・2層、下位の6層で多く確認された。また、6層上面において焼土があったことから、この土坑の土は埋め戻されたと判断することができる。遺物は掘り下げ中に出土したかわらけを図化した。出土した高さは、底面から85cm・95cm程浮いた上層や遺構確認面である。ロクロナデしており、底部に回転糸切り痕が確認できる。

## 5区SK-10 (第20・21図、第6表)

5区は平面円形の土坑が群材している。径によって1m前後のSK-10・12・13・16、70~80cm前後のSK-08・09・14・15、それよりも小型のSK-36などに分類することができる。1m前後の土坑は確認面からの深さ10~20cmで、底面は皿形をしている点共通する。70~80cm前後の土坑も底面が皿形で、確認面からの深さは浅い。

SK-10は、この土坑群の中で最も大きなものである。覆土は暗褐色土ブロックやローム粒を多く含んでおり、埋め戻した土と判断することができる。大型土坑に分類されたSK-12・13も覆土にロームを多く含んでいることから、SK-10と同じように埋めたとみられる。

本土坑からは、非ロクロでヨコナデを施したかわらけ片が出土した。外面には押圧痕や粘土接合痕が確認され、本土坑が中世になることを示唆する遺物である。

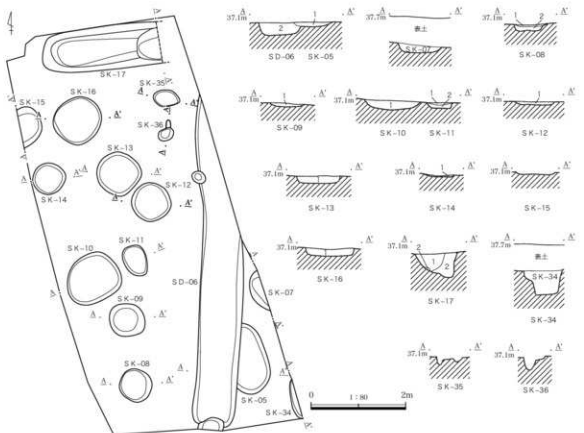


5区SK-13 (第20・21図、第7表、図版二・一八)

5区の円形土坑であり、SK-10と同形に分類される。平面の径は90～95cm程、遺構確認面からの深さは16cmで、底面は皿形である。覆土から非ロクロで、底部に押圧痕のあるかわらけが出土した。SK-10でも非ロクロかわらけが出土しており、土坑の形態も類似することから、これらの円形土坑が中世にすることを示唆する。

5区SK-17 (第21図、図版二)

5区の北端で発見された。東西に2.5m以上の長さである。平面図でみると、土層図を作成した東端に楕円形の土坑が重複するようである。西側の浅い部分は確認面から深さ40cm程で、東側の深い部分は西側から7cm程の段差をもっている。このため、別な遺構の可能性も残る。深い方の部分の土層は図中の2層がローム主体の暗黄褐色土であり、人為的な埋め戻し土である。



SK-05・SD-06

1 褐色土 ローム粒やや少量、SD-06よりも多く含む。

2 褐色土 ローム粒少量含む。

SK-08

1 褐色土 暗褐色土ブロック・ロームブロック少量含む。

2 黄褐色土 ローム土主体。

SK-09

1 暗褐色土 ローム粒やや多量、ロームブロック少量含む。

SK-10

1 褐色土 暗褐色土ブロック多量、ローム粒やや多量含む。

SK-11

1 褐色土 ローム粒少量含む。

2 明褐色土 ロームブロック主体。

SK-12

1 褐色土 ローム粒やや多量、暗褐色土少量含む。

SK-13

1 褐色土 暗褐色土ブロック多量、ローム粒やや多量、ロームブロック少量含む。

SK-14

1 褐色土 ローム粒・暗褐色土ブロック少量含む。

SK-16

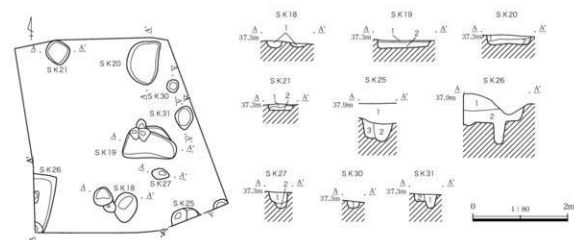
1 褐色土 ローム粒少量含む。

SK-17

1 暗褐色土 ローム粒少量含む。

2 暗黄褐色土 ローム粒・ロームブロック主体、褐色土少量含む。

第21図 5区SK-05・SD-06・SK-07・08・09・10・11・12・13・14・15・16・17・34・35・36 実測図



- 6区  
 SK-18  
 1 褐色土 ローム粒やや多量含む。しまり・粘性あり。  
 SK-19  
 1 黒褐色土 ローム粒少量含む。しまり・粘性あり。  
 2 黄褐色土 ローム主体。  
 SK-20  
 1 黒褐色土 ローム粒少量含む。しまり・粘性あり。  
 2 褐色土 ローム粒やや多量含む。しまり・粘性あり。  
 SK-21  
 1 褐色土 ローム粒少量含む。しまり・粘性ややあり。  
 2 黄褐色土 ローム主体。しまり・粘性あり。  
 SK-25  
 1 黒褐色土 ローム粒(径1mm以下)少量含む。しまりあり。  
 2 茶褐色土 ローム粒(5mm以下)やや多量。ローム粒(1~2cm)やや少量含む。しまりややあり。  
 3 明褐色土 ローム粒・ロームブロック多量含む。

- SK-26  
 1 黒褐色土 ローム粒微量含む。しまりあり。  
 2 明褐色土 ローム粒(径5mm・1cm)少量含む。しまり中量あり。  
 SK-27  
 1 黒褐色土 ローム粒多量含む。しまり・粘性あり。  
 2 黄褐色土 ローム主体。  
 SK-30  
 1 黒褐色土 ローム粒少量。ロームブロック(径1~2cm)微量含む。しまり・粘性あり。  
 SK-31  
 1 黒褐色土 ローム粒(1~2mm)少量。ロームブロック(径2~3cm)微量含む。しまり・粘性あり。  
 2 黄褐色土 ローム粒多量含む。しまり・粘性あり。

第22図 6区SK-18・19・20・21・25・26・27・30・31実測図

## 6区SK-26(第20・22図、第8表、図版一八)

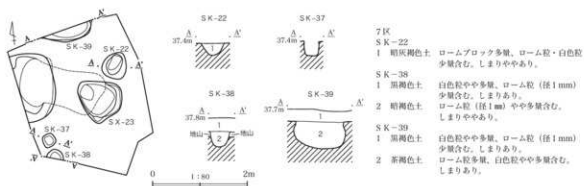
調査区の南西隅にあり、遺構の北東部を調査した。調査した部分での平面形は直線的な北辺と東辺が直角に曲がり、端正な掘り方である。規模は南北1.2m以上、東西0.5m以上である。確認面からの深さは3~7cm程と浅いが、土層図では地山を35cm程掘り込んでいる。径25cm程の平面楕円形のピットがあり、柱穴の可能性もあるが、ピットと遺構の土層は同じであった。底面は平坦で、セクションポイントA付近では断面血形に深さ6cm程深くなっている。土層はローム粒を含む暗褐色土であった。図中1層は表土である。掘り方の形態やピットからみて、方形竪穴遺構の可能性もある。

遺物は、内耳土器の口縁部破片と鉄釘片が図化できた。内耳土器は、口縁部が少し内彎しており、中世の所産であろう。釘は頭がL字形に曲がり、足の直行方向に木目がのびる木質が付き、使用後のものである。

## 7区SK-39(第23図)

7区の調査区北端にある。調査できた範囲では平面楕円形に近く、土層図でみる掘り方深さは56cmになるが、遺構確認面からの深さは44cmである。底面は血形で、土層図の断面形をみると巾着状に掘り方上位で括れている。覆土は図中2層でローム粒を多く含む茶褐色土で、人為的に埋め戻された土と判断される。1層は表土である。

第3章 発見された遺構と遺物



第23図 7区SK-22・37・38・39実測図

## 第3節 堀米遺跡

平成 27・28 年の調査区 (8～16 区) では、古墳時代後期から平安時代の集落跡が主体であり、中世の井戸や土坑なども確認された。ここでは、遺跡の主体となる時期とその性格が古代の集落跡であることから、堀米遺跡として報告する。今回の調査地は、従来の遺跡範囲から外れ、遺跡の南側にあたるが、遺跡範囲が南側に広がったことになる。以下、確認された遺構・遺物について報告する。

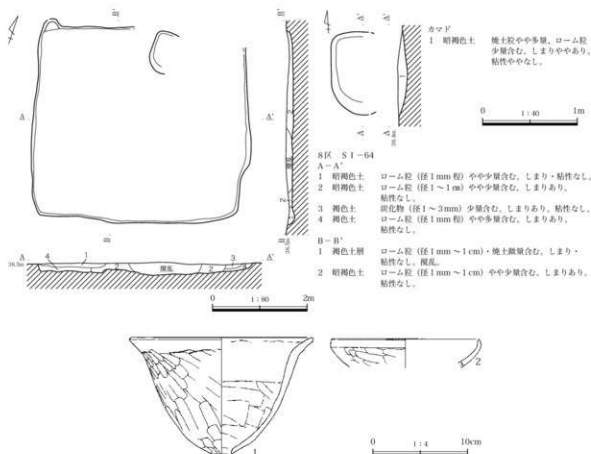
## (1) 竪穴住居跡

## 8区 S1-64 (第24図、第9表、図版五・一八)

8区の南部に単独で存在する。周囲は攪乱が著しく、確認できた壁や床は少ないが、遺存する部分を繋いで掘り下げ・遺構図を作成した。平面形はやや東西が長いが、方形に近くて、規模は南北 4.1 m、東西 4.6 m である。北西隅は攪乱で突出した形態になっており、北東隅から北壁の東半分は残っていない。確認面からの深さは 5～20 cm 程であり、遺存は良好ではない。床面は傾きは少ないが、凹凸のある部分や平坦な部分もあった。

カマドは北辺にあったとみられ、火床面が北辺中央やや東寄りに確認できた。袖や天井部などの構築物はすでになく、燃焼部とみられる部分で焼土粒がやや多かった。このカマドも東半分は攪乱で遺存していない。底面は皿状であり、焚き口ピットなどの掘り込みは行っていない。

覆土は褐色土や暗褐色土で、焼土や炭化物を含んでいたことから、埋め戻した可能性がある。



第24図 8区 S1-64 実測図・出土物実測図

第9表 8区S1-64出土遺物観察表

No.	器種	大きさ (cm <sup>2</sup> )	技法等	胎土	焼成	色調	残存率	注記
1	土師器 甗	口径：18.8 孔径：(2.0) 器高：12.4	内：胴部下半横方向ナデ、上半～口縁部外面ヨコナデ、口縁部に粘土接合痕あり。孔ケズリ。 外：胴上半を下半から上方へケズリのち下半を斜下方にケズリ、下端は横方向ケズリ、黒斑あり。	やや粗い、白色粒・灰色粒・黒色微粒やや多量。	やや良好	内：明褐色 外：褐色、黒褐色	口縁部完存、胴部2/3、孔一部	
2	土師器 坪	口径：(15.4)	内面～口縁部外面ヨコナデ、外：底部横方向ケズリ。	赤褐色粒やや少量、白色微粒・黒色細粒少量。	良好	内外：明褐色	口縁部1/6	

遺物は、土師器の甗と坪が図化できた。甗は、胴部の上半分を下から斜め上方に削り、その後下半部を上から斜め下方に削る。下端は右から左方向に削り、3段階に削って整形している。蒸し孔は径2cmの小さなものである。坪は口径15cm余りに復元できた破片である。底部は左から右方向に削る。坪の時期に比べて、甗が小型である点が特徴といえる。

## 9区S1-65 (第25・27図、第10表、図版五・一八・一九)

2軒の住居跡が重複して発見され、本住居の方が新しいと判断した。住居跡の平面形は北辺が南辺に比べて少し長く、やや台形に近い。規模は北西-南東で3.45m、南西-北東で3.8～4.0mである。主軸は、グリッド北に対して西に振れている。北辺はカマドが東寄りに造られているが、カマドの西側と東側では段差があり、東側の部分は棚であった可能性がある。その幅は東西90cm、南北20cm程になるが、遺構確認面の関係から地山の掘り残しが確認できるのみである。

床面はハードローム層を掘り込み、貼床せずに、直接床としている。周溝は北辺を除き巡る。幅や掘り方は不整形で、南隅は幅が広くなっているが、概ね幅15～20cm程である。主柱が4本あり、これを結んだ範囲は硬く踏みめられていた。

柱穴は住居東側に少し寄った位置にある。径30～35cm、深さは30～40cm程で、径15～18cm程の柱痕を確認することができた。柱の周囲にはローム主体の暗黄褐色土を用いて充填・固定していた。

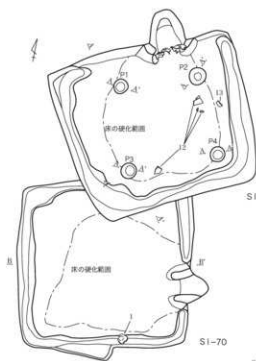
カマドは、北辺の中央東寄りに設置し、袖の一部と煙道が遺存している。袖は暗黄褐色土で構築し(8層)、両袖の間を渡したブリッジの芯に土師器の甗を2個以上(6・7)繋いでいた。カマドの土層に関する所見は、1・2・4層は流入土、5層は煙道の天井、6層は煙道の流入土・崩落土、7層はブリッジ内の土、8層は袖である。煙道は平面舟首形、燃焼部は北壁のライン上になる。

覆土は、まとまったロームブロックなどを含んでおらず、自然堆積したと考えられる。

遺物は、カマドから出土した6・7・8がこの住居に伴うものであろう。ほかは二次的な流入品とみられる。1は内面黒色処理を施し、放射状ミガキの丸底坪で、この地域・時期では稀有なものである。2の平底土師器が甗類と時期的に合う。土師器甗は薄手の5・6・8と厚手の3・7に分類でき、後者は胴部が細長くのびる点が特徴である。須恵器甗は内面同心円に切り込み線が1本あり、9は外面擬格子叩き、10は回転カキ目がある。須恵器の鉢は外面平行叩きと削りを施し、胎土から三義産であろう。13は胎土から三義産平瓦で、凹面は糸切り痕のある一枚作りになる。

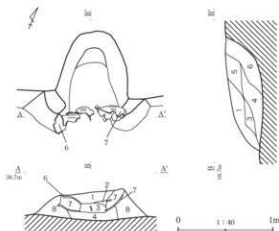
## 9区S1-70 (第25・26・28図、第11表、図版五・一九)

本住居跡はS1-65よりも古い。概ね方形を呈し、規模は南北3.5m、東西3.7m、南辺には土坑が重複している。周溝がカマドの部分を除いて全周しており、幅は20～30cmの部分が大抵であるが、北西隅では

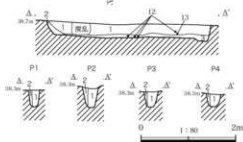


S1-65

S1-70



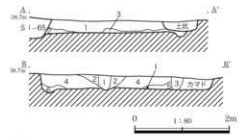
- カマド
- |          |  |
|----------|--|
| 1 暗褐色土   | ローム粒少量、焼土粒微量含む。しまり・粘性なし。               |
| 2 暗褐色土   | ローム粒中や多量、焼土粒少量含む。しまり・粘性なし。             |
| 3 暗褐色土   | 焼土粒多量、ローム粒少量含む。しまり・粘性なし。               |
| 4 暗褐色土   | ローム粒少量、焼土粒微量含む。しまり・粘性なし。               |
| 5 暗褐色土   | ローム粒中や多量含む。しまりなし。粘性やや中なし。              |
| 6 暗褐色土   | 焼土多量、ローム粒中や少量含む。しまり・粘性なし。              |
| 7 灰褐色砂質土 | 山砂・焼土粒少量含む。しまりややあり。粘性なし。               |
| 8 暗褐色土   | ロームブロック多量、ローム粒中や多量、焼土粒少量含む。しまり・粘性ややあり。 |



第25図

- 9区 S1-65
- |        |  |
|--------|--|
| 1 暗褐色土 | 白色粒少量、ローム粒・炭化物・焼土粒微量含む。しまりなし。粘性ややあり。     |
| 2 暗褐色土 | ローム粒中や多量、ロームブロック少量、炭化物微量含む。しまりなし。粘性ややあり。 |
| 3 褐色土  | ローム粒中や少量含む。しまり・粘性ややあり。                   |
- P1～P4
- |        |                      |
|--------|----------------------|
| 1 褐色土  | ローム粒少量。しまり・粘性なし。     |
| 2 暗褐色土 | ローム土主体。しまりややあり。粘性なし。 |

9区 S1-65・70 実測図

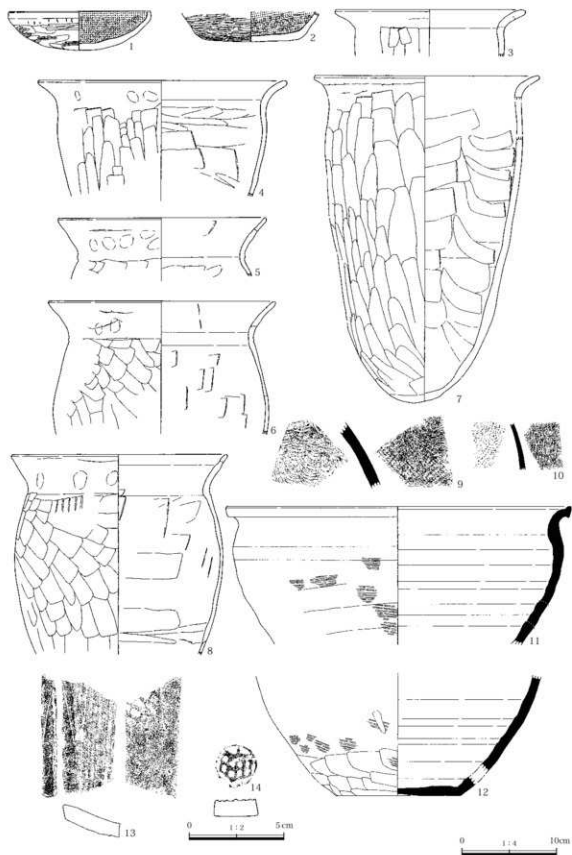


第26図

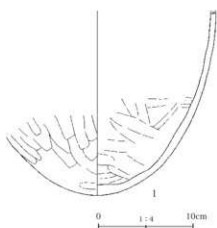
- 10区 S1-70
- A-A'
- |        |   |
|--------|---|
| 1 暗褐色土 | ローム粒 (径1mm～1cm) 多量、ロームブロック (径3cm) 微量含む。     |
| 2 褐色土  | ローム粒 (径1mm) 中や少量、ロームブロック (径1cm) 微量含む。しまりあり。 |
| 3 褐色土  | ローム粒 (径1mm) 中や多量含む。しまりあり。                   |
- B-B'
- |        |  |
|--------|--|
| 1 暗褐色土 | ローム粒 (径1mm) 少量含む。しまりなし。  |
| 2 褐色土  | ローム粒 (径1～5mm) 中や多量含む。しまりあり。  |
| 3 暗褐色土 | ローム粒 (径1～5mm) 中や少量含む。しまりなし。微孔が。  |
| 4 暗褐色土 | ローム粒 (径1mm～1cm) 多量、ロームブロック (径3cm) 微量含む。  |
| 5 褐色土  | 暗褐色土主体 (カマドの一部)、ローム粒 (1～5mm) 中や少量、ロームブロック (径3cm) 微量含む。しまりあり。ロームブロック (径1cm)・ローム粒 (径1mm) 中や多量含む。しまりなし。 |

- カマド
- |        |  |
|--------|--|
| 1 暗褐色土 | ローム粒多量、焼土粒少量含む。しまりややあり。粘性ややなし。         |
| 2 暗褐色土 | ローム粒中や多量、焼土粒少量含む。しまりなし。粘性あり。           |
| 3 暗褐色土 | 焼土粒・ローム粒中や多量、焼土ブロック少量含む。しまり・粘性なし。      |
| 4 赤褐色土 | 焼土ブロックからなる。しまり・粘性なし。                   |
| 5 暗褐色土 | 焼土粒多量、焼土ブロック・ローム粒少量含む。しまりなし。粘性ややあり。(油) |
| 6 暗褐色土 | ローム粒中や多量含む。しまりややなし。粘性なし。(油)            |
| 7 暗褐色土 | 焼土粒少量含む。しまりなし。粘性ややなし。(油)               |

9区 S1-70 実測図



第27図 9区S1-65出土遺物実測図



第28図 9区S1-70出土遺物実測図

幅広になっている。床面はカマド前から周溝脇や住居の北部を除いて硬く踏みしめられており、土間と推定することができる。貼床せずに、ハードローンを直接床にしている。

カマドは東壁の中央南寄りに設置する。カマド土層の所見は、2層が煙道天井、3層が流入土、5～7層が袖である。煙道は平面舟首形で、上面は椀形によって削られていたが、この煙道は本県でも一般的な形態である。

覆土は、床面近くや壁際が褐色土で、ほかの部分では暗褐色土である。

遺物は床面近くから出土した土師器製の破片を図化した。胴部外面下位は下から斜め上方に削り、中位はナデで無調整となっている。丸底で、この地域では稀有な形態である。

第10表 9区S1-65出土遺物観察表

No.	器種	大きさ(cm-g)	技法等	胎土	焼成	色調	残存率	注記
1	土師器 坏	口径：(14.8) 器高：4.2	内：口縁部ヨコナデ、底部左回転方向に放射状ミガキ、黒色処理。 外：口縁部ヨコナデ、下端無調整、底部ヘラケズリのちやや粗いミガキ。	やや良好、黒色細粒・灰色粒やや多量、赤褐色粒・白色細粒少量。	良好	内：黒色 外：乳褐色	口縁～底部 1/3	カマド 内
2	土師器 坏	底径：10.2	口縁部ナデか。 内：黒色処理、底部～体部ミガキ。 外：底部～体部ミガキ、二次底部面あり。	良好。黒色細粒・白色細粒少量。	良好	内：黒色 外：明褐色	底～体部下 位1/2	
3	土師器 甕	口径：(19.6)	内：口縁部ヨコナデ、胴部ナデ。 外：口縁部ヨコナデ、粘土接合痕あり、胴部ヘラケズリ。	やや粗い、灰色細粒・黒色細粒多量、白色細粒少量。	良好	内外：淡褐色	口縁～胴部 上端1/8	覆土下層
4	土師器 甕	口径：(26.0)	内：口縁部ヨコナデ、胴部ナデ・ヘラナデ・一部ハケ状、コガが全面に付着。 外：胴部縦方向ケズリ、口縁部ヨコナデ、押正痕あり。	やや粗い、黒色細粒多量、赤褐色粒やや多量、白色粒・透明粒少量。	良好	内：暗褐色 外：明褐色	口縁部1/4、 胴部上位1/5 以下	覆土・ 覆土下層
5	土師器 甕	口径：(21.6)	内：口縁部ヨコナデ・ヘラナデ、胴部ナデ。 外：口縁部粘土接合痕・押正痕あり、ヨコナデ、胴部横方向ヘラケズリ。	良好。黒色細粒多量、白色粒・褐色粒少量。	良好	内：明褐色 外：赤褐色	口縁～胴部 1/5	覆土下層
6	土師器 甕	口径：(23.6)	内：口縁部ヘラナデ・ヨコナデ、胴部ヘラナデ・ナデ、粘土接合痕あり。 外：口縁部押正痕・粘土接合痕あり、ヨコナデ、胴部上位下方から左斜上方向へ、中位下方ヘラケズリ。	やや粗い、白色細粒・灰色粒やや多量、褐色粒・黒色細粒少量。	良好	内外：暗赤褐色	口縁部1/5、 胴部上半1/6	No.1
7	土師器 甕	口径：23.4 器高：34.4	内：口縁部ヨコナデ、胴部横方向・斜方向ヘラナデ・ナデ。 外：胴部上方から下方ケズリ、口縁部ヨコナデ、外面に粘土接合痕あり、底部に黒班あり。丸底。	灰色粒やや多量、白色粒・黒色細粒・赤褐色粒少量。	良好	内：明褐色・乳褐色 外：明褐色・乳褐色・暗褐色	口縁部3/5、 胴部2/3、底 部ほぼ完存	No.3 覆土上層・ 覆土中層
8	土師器 甕	口径：22.4	内：口縁部ヨコナデ・一部ヘラナデ、胴部ナデ・ヘラナデ、粘土接合痕あり。 外：口縁部粘土接合痕・押正痕あり、ヨコナデ、胴部下方から上方・斜上方、上位は右から左方向ヘラケズリ。	やや粗い、白色細粒やや多量、赤褐色粒・黒色細粒やや多量。	良好	内：暗赤褐色 外：暗赤褐色・暗褐色	口縁部4/5、 胴部1/3	カマド・ 覆土下層
9	須恵器 甕		内：胴部同心円当り具痕。 外：縦格子叩き。	やや粗い、白色細粒やや多量、白色粒少量。	良好	内：灰色 外：暗灰色	胴部一部	
10	須恵器 甕		内：胴部同心円当り具痕。 外：平行叩きのちカキ目。	良好。白色細粒やや多量、白色粒少量。	良好	内：灰色 外：暗灰色	胴部一部	
11	須恵器 鉢	口径：(36.0)	内：口縁部ナデ。 外：口縁部ヨコナデ、体部上位回転ヘラケズリ、中・下位平行叩き、粘土接合痕あり。三蓋産。	良好。白色粒やや少量、白色細粒・黒色細粒少量。	良好	内：明灰色 外：暗灰色	口縁部～体部 上位1/4、 体部中位一 部	覆土下層
12	須恵器 鉢	底径：13.0	内：口縁部ナデ。 外：体部平行叩きのち口縁部ナデか、下手持ちヘラケズリ、底部外周手持ちヘラケズリ、中央部無調整。三蓋産。	良好。灰色粒多量、白色細粒・黒色細粒少量。	良好	内外：明灰色	底部ほぼ完 存、体部下 位1/3	No.5・ 6・7・9 覆土・ 覆土下層



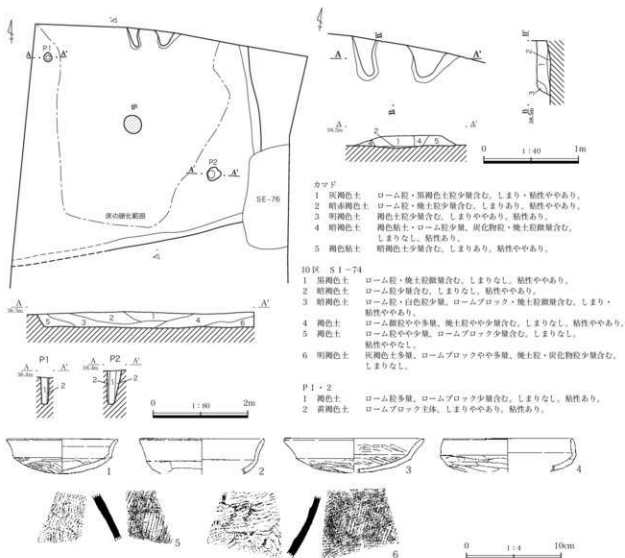
13	女瓦		両面：糸切り痕、布目。端部ヘラケズリ。凸面：格子印き・ナデ、側面ヘラケズリ。	良好。白色細粒多量、黒色細粒やや多量。	良好	内外：青灰色	側縁部一部	No. 4
14	肥面子	径：2.3 厚：0.9	型押。	良好。白色細粒微量。	良好	外：橙色	完存	

第11表 9区S1-70 出土遺物観察表

No.	器種	大きさ (cm・g)	技法等	胎土	焼成	色調	残存率	注記
1	土師器 甕		内：胴部・底部ナデ。 外：胴部下から斜上方向ヘケズリ、底部ナデ・無調整。黒班あり、丸底。	やや不良。黒色細粒・灰色細粒多量、白色粒・赤褐色粒少量。	良好	内：明褐色・暗褐色 外：明褐色・黒褐色	底部完存、胴部下位3/4 中位一部	No. 1

10区S1-74 (第29図、第12表、図版五・六・一九)

調査路北端に位置し、北側は電柱が立っていたため、安全上調査できなかった。西側は路線外であり、住居中央から南・東部を調査したことになる。井戸 (SE-76) と重なっており、本住居の方が古い。調査した部分では、東辺・南辺の壁は直線状であるが、南辺の西側1/3程は攪乱が及んでいる。床はハードロー



第29図 10区S1-74 実測図・出土遺物実測図

第12表 10区S1-74 出土遺物観察表

No.	器種	大きさ (cm・g)	技法等	胎土	焼成	色調	残存率	注記
1	土師器 坏	口径：(11.6) 器高：3.7	内：口縁部～底部外周ヨコナゲ、底部中央ヘラナゲ。粘土接合痕あり。 外：口縁部ヨコナゲ、底部中央ヘラケズリ、外周ケズリのちミガキ、底部全面黒斑。	良好、白色細粒多量、赤褐色粒・黒色細粒少量。	良好	内：明赤褐色 外：褐色・黒色	口縁部1/6 底部1/4	南東柱 穴
2	土師器 坏	口径：(13.0)	内：不明。 外：底部ヘラケズリ。	赤褐色粒多量、灰色粒・黒色細粒・白色細粒少量。	不良	内外：褐色	口縁部1/4	
3	土師器 坏	口径：(14.6) 器高：3.7	内：底部ナゲ、口縁部ヨコナゲ、粗いミガキか。 外：口縁部ヨコナゲ、口縁部下押圧痕・ミガキ、底部ケズリ、黒斑あり。 内外面磨仕上げか。	白色細粒多量、白色粒・赤褐色粒少量、灰色粗粒微量。	良好	内：暗褐色 外：黒褐色	口縁部1/4 底部1/2	
4	土師器 坏	口径：(13.4)	内：ヨコナゲ。 外：口縁部ヨコナゲ、口縁部直下押圧痕・粘土接合痕、底部ヘラケズリ。 内面～口縁部外面磨仕上げ。	良好、白色細粒・赤褐色粒・赤褐色粗粒少量。	良好	内外：明褐色・褐色	口縁部1/5	
5	須恵器 甕		内：胴部同心円当て具痕、当て具には切り込みあり。 外：平行叩きの回転カキ目。	良好、灰色粒・灰色細粒やや少量。	良好	内外：灰色	胴部一部	
6	須恵器 甕		内：胴部同心円当て具痕、当て具には切り込みあり。 外：胴部平行叩き。	良好、白色細粒やや少量、白色粒・白色粗粒少量。	良好	内：灰色 外：暗灰色	胴部一部	

ムを直接床にしている。住居中央部に径40cm程の範囲が焼けており、深さ3cm程の厚さで焼土と炭化物が少量確認された。カマドと別な地床炉であろう。カマド前から柱の内側では硬くしまった面があり、土間と考えられる。土間の中央に炉があった住居空間配置が復元できる。周溝は確認できなかったが、柱穴が2本発見された。床からの深さはP1が56cm、P2が72cmである。径13cm程の柱痕が確認され、柱の周囲にロームブロック主体の黄褐色土で充填・固定していた。住居の大きさに比較して柱が細い感がある。南西部の柱の位置は概算で、柱穴を確認できなかった。

カマドは北辺にあるが、袖の一部を調査したのみである。褐色粘土などから袖を出したが、全体が不明なため、袖も不確定である。調査所見では、1層は流入土、2層は火床、3層は燃焼部ブリッジ崩落土、4・5層は袖と判断した。

住居の覆土は、1～4層は自然堆積、6層は焼土や炭化物粒が含まれており、カマドから流れた土と考えた。

遺物は、覆土掘り下げ中に出土した破片を図化した。二次的に本遺構に流入したものと判断するべきであろう。土師器坏は1～3が口縁部外反する形態である。1と3は底部の外周を削らずに、無調整のままである。4は底部が浅くて平底に近く、口縁部が内傾する須恵器坏身模倣の形態である。平底に近い形態はこの地域の特徴であるが、1～3のような地域的な形態でないものと混在していたことがわかる。5は内面切り込みのある同心円当て具痕で、外面は回転カキ目を施す。6も内面に切り込みのある同心円当て具痕になっているが、切り込みの形態が5と異なっている。

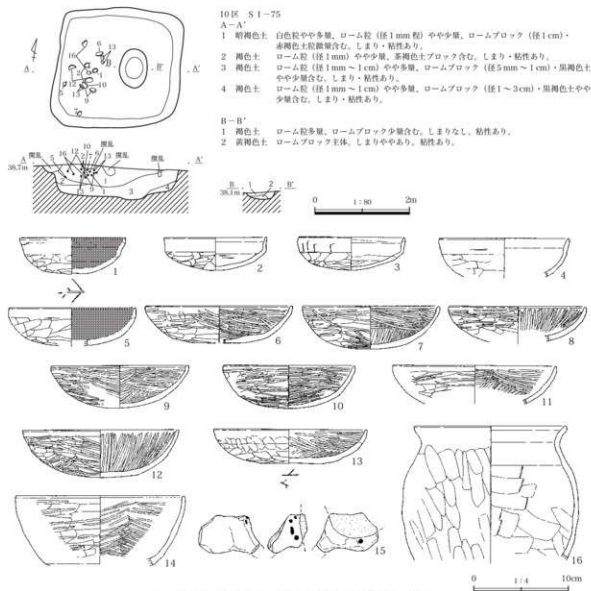
#### 10区S1-75 (第30図、第13表、図版六・一九・二〇)

他の遺構と重複しない、小型の遺構である。カマドがなく、住居跡であると判断できないが、竪穴建物として、ここで報告する。平面規模は南北2.4～2.5m、東西2.5～2.65mで、南西隅が突出気味であり、不整形に近い平面形となっている。遺構の深さは、確認面から0.8m程であり、周囲の遺構と比較すると、掘り込みが深い。壁はやや傾斜気味に立ち上がり、床面はハードルームに違い、比較的平坦である。床には南北80cm、東西56cmの平面楕円形、断面皿形を呈した掘り込みがあった。底面は焼けておらず、炉ではない。鍛冶遺構などの可能性を考慮して、鍛冶剥片などを探したが、確認できなかった。遺構の土層観察でも上面からの掘

り込みがみられなかったことから、この掘り込みは、本遺構に伴うものと判断した。

覆土は、1・2層はロームブロックなどを多くは含んでいないことから自然に堆積したと推測する。その下の3・4層はローム粒をやや多く含んでおり、人為的に埋め戻したと考えられる。

遺物は、大半が覆土の上層から出土した。自然堆積する過程で投棄したとみられるが、13の土師器環はほぼ完形品である。1~4は内彎口縁環である。3・4は口縁部上半の彎曲が少なく、形態に差異がみられるが、漆仕上げしており、在産とみるべきであろう。5~13は丸底の環で、5以外は内外面にヘラミガキを行う。5は内面黒色処理で、この地域において当該期では珍しい製作技法である。他地域からの搬入品の可能性も考慮すべきである。13は平底化した環で、型的には5~12の後発型式であるが、漆仕上げしており、技法と形態が混ざっている。16は土師器裏で小型球胴の形態である。15は羽口片で、淬化した表面に緑青粒が散在する。銅生産に関わるものであろう。このように、本遺構からは様々な形態・技法の土師器環が混在しており、8世紀における地域交流を考えるうえで重要である。また、銅粒の付く羽口は、銅生産を行っていたことを示し、外徑からみて、鑄造用の大口徑羽口であろう。



第30図 10区S1-75 実測図・出土遺物実測図

第13表 10区S1-75出土遺物観察表

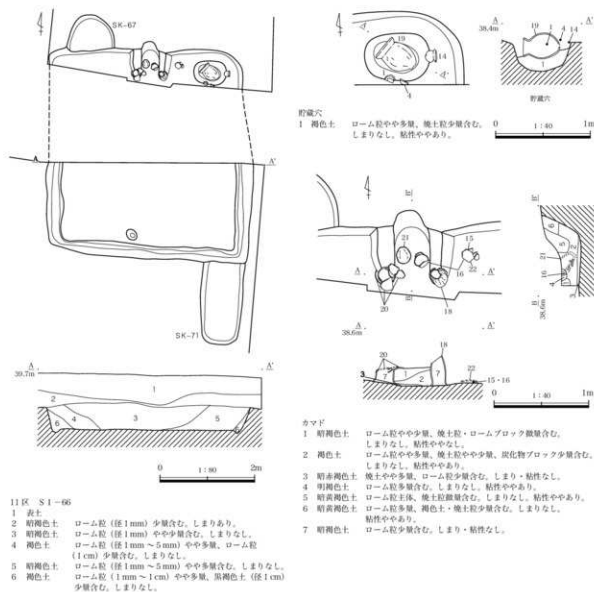
No.	器種	大きさ(cm <sup>2</sup> )	技法等	胎土	焼成	色調	残存率	注記
1	土師器 杯	口径:11.1 器高:3.8	内:ヨコナデ・ナデ上げあり、黒色処理。 外:口縁部ヨコナデ・粘土接合痕あり、底部外周無調整、押圧痕あり、右から左方向にヘラケズリ、中央に木葉痕あり。	粗い、赤褐色粒多量、黒色細粒・黒色粒やや多量、白色粒少量。	良好	内:黒色 外:乳褐色・褐色	完存	No.6
2	土師器 杯	口径:10.7 器高:3.5	内:口縁部ヨコナデ、底部ナデ・ヘラナデ。 外:口縁部ヨコナデ、底部ヘラケズリ。 内面〜口縁部外面磨仕上げ。	黒色細粒やや多量、赤褐色粒・白色粒少量。	良好	内外:明褐色一部暗褐色	口縁部〜底部1/2	No.5・12
3	土師器 杯	口径:11.0 器高:3.5	内:口縁部〜底部外周ヨコナデ、中央ナデ、粘土接合痕あり。 外:口縁部ヨコナデ・ヘラナデ、底部横ね右から左方向にヘラケズリ。 口縁部内外面磨仕上げ。	良好。黒色細粒やや多量、灰色粒・白色粒やや少量、透明粒・赤褐色粒少量。	良好	内:明褐色 外:明褐色一部灰色	口縁部〜底部3/5	
4	土師器 杯	口径:(13.4)	内:口縁部〜底部ヨコナデ。 外:口縁部ヨコナデ、底部右から左方向にヘラケズリ。 内面〜口縁部外面磨仕上げ。	赤褐色粒多量、白色細粒・黒色細粒・透明細粒やや少量。	良好	内:褐色一部赤褐色 外:赤褐色	口縁部〜底部上位1/6	
5	土師器 杯	口径:(13.2) 器高:4.0	内:ヨコナデ、黒色処理。 外:口縁部ヨコナデ、口縁部直下に粘土接合痕、底部横ね右から左方向にヘラケズリ。	やや粗い、砂粒多量、赤褐色粒・白色粒やや多量。	良好	内:黒色 外:明褐色	口縁部〜底部1/3	No.15
6	土師器 杯	口径:(15.4) 器高:4.0	内:体部左から右方向にヘラミガキ、底部一方方向ミガキ。 外:口縁部ヨコナデ、体部無調整・押圧痕・ミガキ、底部ケズリ。	良好。赤褐色粒多量、白色細粒やや多量、透明粒・白色粒少量。	良好	内外:赤褐色	口縁部〜底部1/2	
7	土師器 杯	口径:14.4 器高:4.0	内:底部中央〜ヘラミガキのち外周速弧状ミガキ。 外:口縁部ヨコナデ、底部右から左方向にヘラケズリのちミガキ。	良好。黒色細粒多量、白色細粒・赤褐色粒やや少量。	良好	内外:橙褐色	底部中央と口縁部一部欠きほぼ完存	No.16
8	土師器 杯	口径:(14.4)	内:ヨコナデのち放射状ミガキ。 外:口縁部ヨコナデ、底部右から左方向にヘラケズリ、全面粗いヘラミガキ。	良好。白色細粒やや少量、透明粒・黒色細粒少量、赤褐色粒微量。	良好	内外:褐色	口縁部〜底部外周1/4	
9	土師器 杯	口径:14.4 器高:4.5	内:底部一方方向ミガキのち口縁部周縁を右から左方向に速弧状ミガキ。 外:口縁部ヨコナデ、底部右から左方向にヘラケズリのち全面に密なミガキ、黒班あり。	良好。黒色細粒・白色細粒・赤褐色粒やや多量、透明細粒少量。	良好	内:橙褐色 外:橙褐色一部黒褐色	口縁部〜底部外周3/4 底部中央完存	No.11・12
10	土師器 杯	口径:(13.8) 器高:4.5	内:ヨコナデのち、底部中央一方方向ミガキのち外周横方向ミガキ。 外:口縁部ヨコナデ、底部外周右から左方向・中央一方方向ケズリのち全面ミガキ。	赤褐色粒・黒色細粒やや多量、白色細粒・灰色粒やや少量。	良好	内外:明褐色	口縁部2/5、 底部3/5	No.12
11	土師器 杯	口径:(17.0)	内:ヨコナデのち、底部一方方向ミガキのち外周左から右方向に速弧状ミガキ。 外:口縁部ヨコナデ、底部右から左方向にヘラケズリの粗いミガキ。	良好。赤褐色粒・黒色細粒やや多量、白色細粒・透明細粒少量。	良好	内外:明褐色	口縁部1/6	覆土中
12	土師器 杯	口径:16.4 器高:4.0	内:ヨコナデのち左から右方向に放射状ミガキ。 外:口縁部ヨコナデ、底部右から左方向・中央一方方向にヘラケズリ、横方向ミガキ。 内外面に小さな黒班あり。	良好。白色粒・灰色粒やや少量、赤褐色粒・黒褐色粒少量。	良好	内外:橙褐色・明褐色・一部暗褐色 灰色	口縁部1/5、 底部完存	No.8・14
13	土師器 杯	口径:16.2 器高:3.6	内:体部横方向・斜方向ミガキのち底部一方方向ミガキ。 外:口縁部ヨコナデ、口縁部直下押圧痕・粘土接合痕、底部ヘラケズリ、中央木葉痕。 内面〜口縁部外面磨仕上げ。	良好。黒色細粒やや多量、白色細粒・透明細粒少量。	良好	内:暗褐色・明褐色 外:明褐色・灰色	ほぼ完存	No.3・4・12・13
14	土師器 塊	口径:(17.6)	内:体部ヨコナデのち右から左方向に速弧状ミガキ。 外:口縁部ヨコナデ、体部横ね右から左方向にヘラケズリのち粗いミガキ。	良好。白色粒・赤褐色粒多量、黒色細粒微量。	良好	内:明褐色 外:赤褐色	口縁部1/6、 体部一部	
15	羽口	重さ:12.92	羽口胎土には白色粒を多く含み、滓は下方に垂下する。滓表面は滑らかで、1〜3mm程度の緑青が吹き出す副粒を含む。	白色粒多量		羽口は赤褐色、 滓は黒褐色。	羽口先端一部	
16	土師器 甕	口径:(15.8)	口縁部内外ヨコナデ。 内:胴部ナデ・ヘラナデ。 外:上半は下から上方ヘラケズリ。下半は下方ヘラケズリ、一部ナデのみで無調整部分あり。	良好。白色細粒・灰色粒多量、赤褐色粒少量。	良好	内外:橙褐色	口縁部一部、胴上位1/5	No.1・7

11区 S1-66 (第31・32・33図、第14表、図版六・七・一五・二〇・二一)

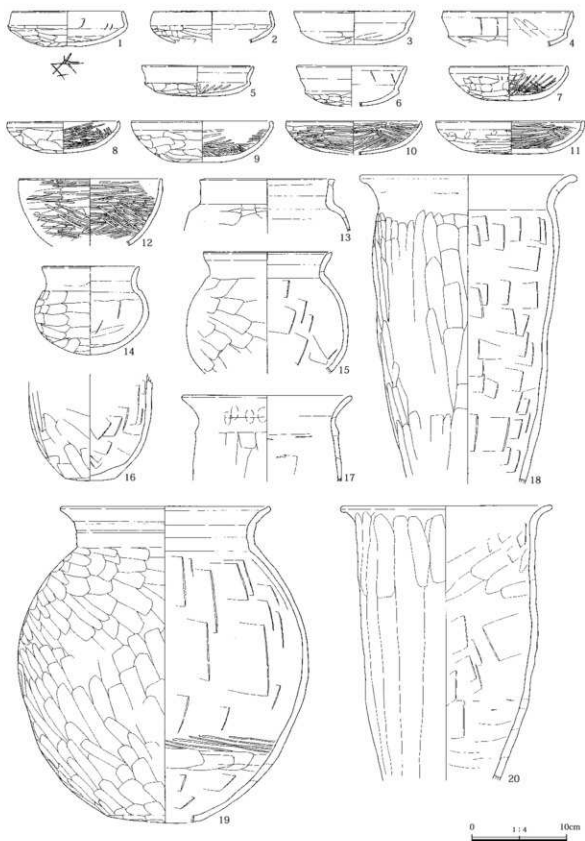
11区は民家の脇とその出入口にあたる。民家脇の竪穴住居跡北部を最初に調査し、調査終了・埋め戻した後に、住居南半分が出た調査区について、土を住居跡北部の位置に移動して南半分を調査した。中間はライフラインに係る埋設物があることから調査できなかった。本遺構については、このような複雑な経緯で調査を実施した。

平面形は概ね方形であり、規模は南北4.1～4.5m、東西4.1～4.5mである。南東隅が鋭角に曲がっており、不整になっている。住居跡の深さは現在の表土から1.2m程あるが、盛土を除くと0.7～0.75m程の深さである。重複する土坑との新旧関係は、SK-71の方が新しく、SK-67との新旧関係は明らかにできなかった。

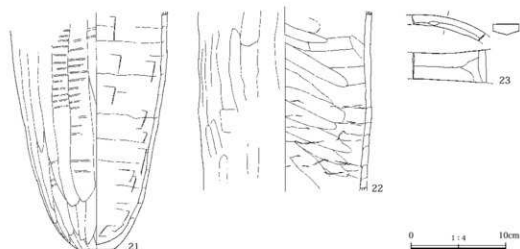
床面は平坦であるが、貼床の有無については、時間的な制約から確認できなかった。周溝も南側調査区では確認でき、幅20～30cm前後で、深さは4～5cm程である。主柱穴は発見できなかったが、南辺中央付近に小ピットがあり、床からの深さ11cmであった。入り口ピットの可能性がある。



第31図 11区 S1-66 実測図



第32圖 11区S1-66出土遺物実測圖(1)



第33図 11区S1-66出土遺物実測図(2)

第14表 11区S1-66出土遺物観察表

No.	器種	大きさ(cm <sup>2</sup> )	技法等	胎土	焼成	色調	残存率	注記
1	土師器 罎	口径: 11.8 器高: 3.7	内: 口縁部～底部外周ヨコナデ、一部ヘラナデ、中央部ナデ。 外: 口縁部ヨコナデ、底部右から左方向へヘラケズリ、中央部木葉痕2回分。 内面～口縁部外面磨仕上げ。	やや良好。赤褐色粒多量、白色粒やや多量、黒色細粒・灰色粒少量。	良好	内: 暗褐色・明褐色 外: 暗褐色・橙褐色	口縁部1/2 底部3/5	No. 14
2	土師器 罎	口径: (12.2)	内面～口縁部外面ヨコナデ。 内: 口縁部、底部境ヘラナデ。 外: 底部縦ね右から左方向にヘラケズリ、一部押圧痕あり、黒斑あり。	良好。白色細粒・透明細粒少量。	良好	内: 明褐色 外: 明褐色一部暗灰色	口縁部1/5、 底部外周1/4	No. 10 カマド 内
3	土師器 罎	口径: (12.6) 器高: 3.5	内: 口縁部ヨコナデ、底部ナデ。 外: 口縁部ヨコナデ、底部ヘラケズリ、黒斑あり。内面～口縁部外面磨仕上げ。	やや良好。黒色細粒・白色細粒やや多量、赤褐色粒やや少量。	やや不良	内: 明褐色 外: 明褐色・灰褐色	口縁部～底 部1/2	セク ション 土中 下半
4	土師器 罎	口径: (13.6)	内: 口縁部・底部ナデ・ナデ上げあり。 外: 口縁部ヨコナデ・ヘラナデ、底部ヘラケズリ。 内面～口縁部外面磨仕上げ。	やや良好。白色細粒・黒色細粒・赤褐色粒やや多量。	やや良好	内外: 暗褐色・暗褐色	口縁部1/6、 底部1/5	No. 13
5	土師器 罎	口径: (11.6) 器高: 3.2	内: ヨコナデのち底部に粗い放射状ミガキ。 外: 口縁部ヨコナデ、底部横して右から左方向にヘラケズリ。 内外面全面磨仕上げ。	良好。赤褐色細粒やや多量、赤褐色粗粒・白色細粒少量。	やや良好	内外: 暗褐色	口縁部1/3、 底部1/2	
6	土師器 罎	口径: 11.4	内: 口縁部ヨコナデ一部ヘラナデ、底部ヨコナデ。 外: 口縁部ヨコナデ、直下無調整。底部外周右から左方向へ、中央一方向にヘラケズリ。口縁部外面に段がある。	白色細粒多量、褐色粒やや多量、黒色細粒・透明粒少量。	良好	内外: 赤褐色	口縁部1/2、 底部外周1/3	No. 11
7	土師器 罎	口径: 12.2 器高: 3.7	内: ヨコナデ・ナデのち乱雑な放射状ミガキ。 外: 体部一部ヘラケズリ、押圧痕あり、一部無調整。底部ヘラケズリ。 内外面全面に磨仕上げ。	良好。白色細粒・赤褐色粒やや多量、透明細粒少量、白色粗粒微量。	良好	内外: 暗灰褐色	口縁部～底 部1/3	
8	土師器 罎	口径: 11.7 器高: 3.3	内: ヨコナデのち不定方向ヘラミガキ。 外: 口縁部ヨコナデ、直下に粘土接合痕と無調整部分あり。底部は多方向ヘラケズリ。 内面～口縁部外面磨仕上げ。	やや良好。白色細粒・赤褐色粒多量、灰色粒・透明粒少量。	良好	内: 暗褐色・橙褐色 外: 橙褐色一部暗褐色	口縁部1/3、 底部1/2	
9	土師器 罎	口径: 14.6 器高: 4.3	内: ヨコナデのち底部一方向ミガキ。体部連弧状ヘラミガキ。 外: 口縁部ヨコナデ、体部右から左方向へ、底部一方向ヘラケズリ。	やや良好。赤褐色粒多量、黒色細粒・白色粒、白色細粒やや多量、灰色粒少量。	良好	内外: 赤褐色。 口縁部暗褐色	口縁部1/2、 体部～底部 3/5	
10	土師器 罎	口径: (14.2) 器高: 3.5	内: 底部一方向ヘラミガキのち体部連弧状ミガキ。 外: 口縁部ヨコナデ、体部・底部ヘラケズリのちにやや粗いヘラミガキ。底部中央に黒斑あり。	良好。褐色粗粒多量、黒色細粒・白色粒・灰色粒少量。	良好	内: 橙色 外: 橙色一部黒色	口縁部～底 部1/4	

11	土師器 坏	口径：15.6 器高：3.4	内：底部一方へラミガキのち体部連弧状ミガキ。 外：口縁部ヨコナデ。直下押圧痕・無調整。体部右から左方向へラケズリ、底部一方へラケズリ。	やや粗い。白色細粒多量、赤褐色粒・黒色細粒・白色粒少量。	良好	内外：暗赤褐色	口縁部～体部2/3、底部完存		
12	土師器 埴	口径：(15.2)	内：口縁部～体部横方向・斜方向に密なヘラミガキ。 外：体部右から左方向へラケズリ、全面ヘラミガキ。	良好。赤褐色粒多量、黒色細粒・白色粒・灰色粒少量。	良好	内外：褐色	口縁部1/8、体部1/6		
13	土師器 甕	口径：(14.2)	内：口縁部ヨコナデ。胴部ナゲ、粘土接合痕あり。 外：口縁部ヨコナデ。胴部主に右から左方向へラケズリ。口縁部直下無調整。	良好。褐色粒・灰色粒やや少量、白色粒少量、黒色細粒微量。	良好	内外：明褐色	口縁部1/6、胴部上位一部		
14	土師器 小甕	口径：10.0 器高：9.3	内：口縁部ヨコナデ。体部ヘラナゲ・ナデ。 外：体部右から左方向へラケズリ、底部概ね一方ラケズリ。	やや良好。白色細粒・赤褐色粒やや少量、黒色細粒・赤褐色粒少量。	不良	内外：明褐色	完存	No. 12	
15	土師器 甕	口径：(13.4)	内：口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナゲ。 外：口縁部ヨコナデ。胴部斜上方へラケズリ、下位斜下方へラケズリ。	やや粗い。灰色粒・赤褐色粒・黒色細粒多量、灰色粗粒・赤褐色粗粒・白色粒少量。	良好	内外：灰褐色・明褐色	口縁部～胴部上位1/6	カマド No. 10	
16	土師器 甕	口径：5.2	内：胴部～底部ヘラナゲ。 外：胴部横方向の斜方向へラケズリ。黒班あり。底部ヘラケズリ。	白色粒・灰色粒少量、白色細粒・黒色細粒少量、白色粗粒・微塵量。	良好	内：乳褐色 外：暗褐色・黒褐色	底部～胴部下端完存。	カマド No. 2・ 10	
17	土師器 甕	口径：(17.6)	内：口縁部ヨコナデ。胴部内面ナゲ・ヘラナゲ。粘土接合痕あり。 外：口縁部粘土接合痕・押圧痕あり、ヨコナデ。胴部下方から上方へラケズリ。	やや粗い。灰色粒・白色粒多量、灰色粗粒やや少量、赤褐色粒少量。	やや 良好	内外：灰褐色 外：褐色・灰褐色	口縁部1/6、胴部上位一部	カマド	
18	土師器 甕	口径：22.4	内：胴部ヘラナゲ、口縁部ヨコナデ。 外：胴部上方から下方へラケズリ。黒班あり、煤付着。	やや粗い。白色粒・白色細粒多量、灰色粗粒やや多量、黒色細粒・赤褐色粒少量。	良好	内外：暗赤褐色・黒褐色 外：明褐色・黒褐色	口縁部～胴部上位完存	カマド No. 1	
19	土師器 甕	口径：21.8 器高：33.3	内：口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナゲ、下位粘土接合痕あり。この周辺を横方向へラケズリ。横位沈線あり。 外：口縁部ヨコナデ。比輪2条あり。胴部上位斜上方へラケズリのうち、下位斜下方へラケズリ。底部ヘラケズリ。黒班あり、煤付着。	やや良好。白色細粒・黒色細粒・灰色粗粒多量、透明粒少量、赤褐色粒微量。	良好	内外：褐色・褐色・黒褐色	口縁部完存。胴部ほぼ完存、底部一部	No. 11	
20	土師器 甕	口径：22.0	内：口縁部ヨコナデ。胴部上位ナゲ・ヘラナゲ、中位ヘラナゲ、下位ナゲ。 外：口縁部ヨコナデ。胴部下から上方へ縦方向へラケズリ、カマド粘土付着。	やや粗い。白色粗粒・白色細粒・灰色粗粒多量、赤褐色粒・黒色細粒少量。	良好	内：明褐色・明褐色 外：明褐色	口縁部～胴部上位完存。胴部下1/2	カマド No. 1・ 4・7	
21	土師器 甕	口径：3.8	内：胴部ヘラナゲ、粘土接合痕あり。 外：胴部下から上方へラケズリ、下端はナゲ。底部一方へラケズリ。	粗い。灰色粗粒・白色粗粒多量、白色細粒・灰色粗粒・黒色細粒やや多量、赤褐色粗粒・赤褐色粒少量。	良好	内：褐色・淡褐色 外：暗褐色・黒褐色	胴部中位3/4、胴部下位～底部完存	カマド No. 1	
22	土師器 甕		内：胴部粘土接合痕あり、斜方向・横方向ナゲ。 外：胴部中位下から上方へラケズリ、下位横・縦・斜方向ケズリ、カマド粘土付着。	やや粗い。灰色粗粒多量、赤褐色粒やや多量、黒色細粒・白色粒少量。	良好	内：乳褐色 外：明褐色	胴部中・下位1/3	カマド No. 10	
23	灰輪陶器 平瓶		把手内外・側面へラケズリ、灰輪施す。猫投産か。	良好。黒色細粒少量。	良好	内外：淡灰緑色	把手一部		

カマドは、北辺の中央に位置し、両袖の芯はロームの地山を掘り残している。その先端南側に土師器の長胴甕を伏せて立て置いている。燃焼部のブリッジはローム粒を多く含む明褐色土で作っている。土層の所見を記すと、1・2・6層は流入土、3層は火床、4層はブリッジ、5層は煙道天井となる。21の土師器長胴甕は下半部を残すのみであるが、掛けた甕が傾いた状態と判断され、カマドの中軸左側に掛けていたと考えられる。右側に本来掛け口があったと推測でき、このカマドは二連式とみられる。煙道は平面凸字形で、奥壁は急角度で立ち上がる。

カマドの東側に貯蔵穴がある。南北52cm、東西70cmの平面楕円形で、深さ32cmである。底面から14cm浮いた高さで、完形に近い土師器の球胴甕が横倒しの状態で出土した。更に、貯蔵穴の脇からも完形品の土師



器小甕が横位で出た。

土層図を見ると、壁際の6層やそれよりも住居内側の4・5層でローム粒がやや多く、人為的な埋め戻しの可能性がある。

主な遺物をみていくと、土師器環は口縁部が内傾する1・2、内彎口縁の3～5、椀形で内面にミガキを密に行う7～11に分類できる。図化した内彎口縁環は全て漆仕上げ、椀形も7・8が漆を塗る。6は有段口縁環であるが、胎土にはこの地域で一般的に含まれる黒色細粒があり、在地産の可能性がある。5は内彎口縁環であるが、底部が平底気味で、この地域の特徴的な形態となっている。18・20～22は長胴甕であり、胴部が最も細長くなっている。特に、21は胴部の径も細くて長胴化しており、埼玉県城などの形態に類似する。球胴甕(19)の口縁部には沈線が2条施されており、珍しい資料である。23の灰釉陶器の平瓶は、ほかの土器群と時期が異なり、混入品であろう。

#### 14区S I-79A (第34・35図、第15表、図版七・八・二〇・二一)

本住居跡は14区の調査区南側にある。14区は民家の出入口の関係で、南部を調査・埋め戻し後に、北部の表土を南部に移動して、調査した。最後に中央部を表土除去して、調査した。南北調査地の間は、下水道が埋設されており、調査できなかった。

本住居跡は、当初北部調査区で発見された住居と同じ遺構とみていたが、図を合成した結果、別遺構と判断した。南部調査区で確認したのは住居跡の南辺と南西隅付近のみである。土層図に示したように、遺構掘り込み面からの深さは0.5 mに及ぶ。周溝は、幅に広狭があり、深さは床面から10cm程である。床面はハードロームを掘り込んだ後に貼床を行っているが、貼床は剥がさなかった。

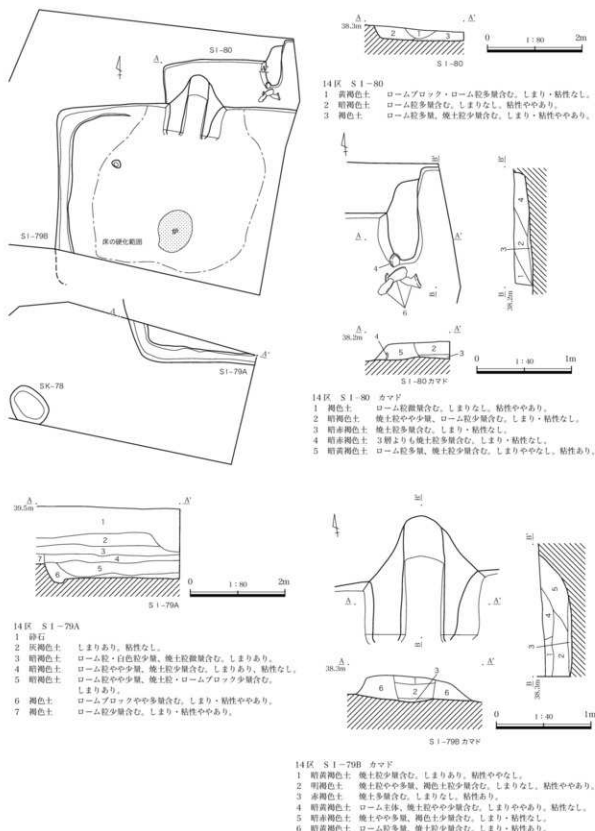
カマドは発見されなかったが、一つの可能性として北部調査区のS I-79Bの下層床面で、炭化物がままとまっている部分が発見され、カマドの燃焼部であったと考えることもできる。ただし、この場合には竅穴住居跡の南北長が3 m程になり、極めて小型に還元されることになる。

土層は、図中の3層が土師器の包含層で、住居は上中下3層に区分でき、下層の6層はロームブロックをやや多量含んでいることから人為的な埋め土と判断される。

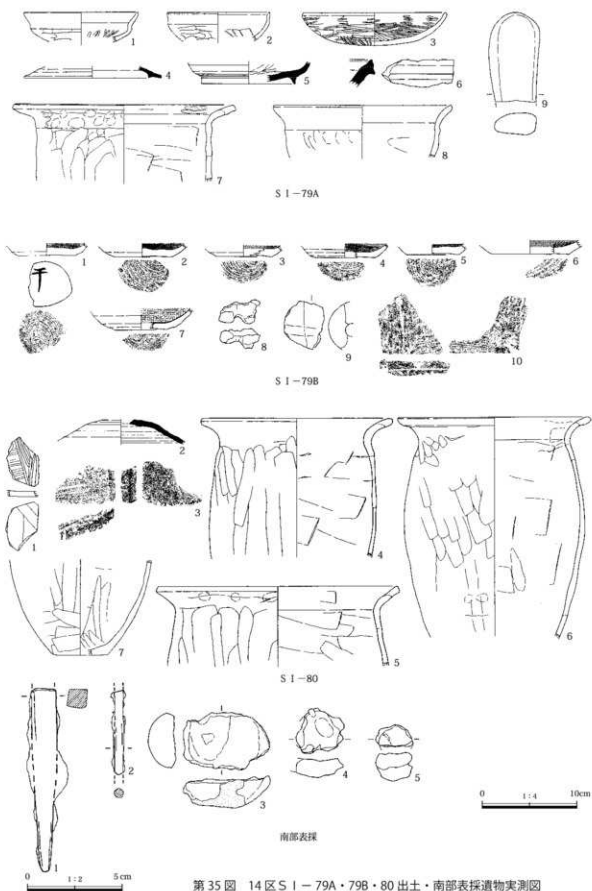
図化できた遺物は覆土掘り下げ中に出土したものである。1は内彎口縁環、2は口縁部内面に段があり、器厚が薄い。4・5は胎土の特徴から、三義窯産であろう。5の底部内面にはロクロナデの後に、ナデが施されており、かえり蓋と同じ時期に特徴的な技法である。7の土師器甕は長胴で、胴部が垂下する。口縁部には、貼り付けた粘土が内外面に観察され、補修痕とみることもできる。遺跡内か周囲で土器生産を行っていた可能性を示唆する。

#### 14区S I-79B (第34・35図、第16表、図版七・二一・二二)

14区北部調査区にあるが、東部と南部は調査できなかった。14区は3分割して調査を実施した。本住居跡も最初に北側のカマド付近までを調査して、埋め戻してから住居中央部を掘り下げ調査した。遺構の規模は南北4.0 m以上、東西5.0 m以上である。南北長は南辺が南部調査区まで達しないことから、4 m余りであろう。周溝は西辺と北辺の一部で確認することができ、幅は20～30cm前後であった。床面は2枚あり、上層の床は厚さ2 cm程で、この床を剥がすと下層の床に炭化物が確認できた。床面中央には、径70×90cm程の平面楕円形の範囲に炭化物がままとっていた。これは下層の床面で発見され、出土土器によってS I-79Bよりも南側のS I-79Aの方が古いことから、古い住居に伴う可能性もある。床面は住居の壁寄りを除



第34図 14区S1-79A・79B・80実測図



第15表 14区S1-79A 出土遺物観察表

No.	器種	大きさ(cm×g)	技法等	胎土	焼成	色調	残存率	注記
1	土師器 杯	口径：(12.0)	内：口縁部・底部ヨコナデのち。底部放射状ヘラミガキ。 外：口縁部ヨコナデ。口縁部直下押圧痕・底部右から左方向ヘラケズリ。	やや良好。赤褐色粒やや多量、透明細粒・黒色細粒・白色細粒少量。	良好	内外：明褐色	口縁部～底部1/6	
2	土師器 杯	口径：(10.8)	内：口縁部ヨコナデ。底部ヘラナデ。 外：口縁部ヨコナデ。底部ヘラケズリ。	やや良好。黒色細粒・赤褐色粒少量、白色細粒微量。	良好	内外：褐色	口縁部1/8、 底部1/6	
3	土師器 杯	口径：(15.0) 器高：3.5	内：底部一方ヘラミガキのち体部連弧状ヘラミガキ。 外：口縁部ヨコナデ。体部右から左方向、底部一方ヘラケズリのちやや粗くヘラミガキ。	良好。黒色細粒・白色細粒やや多量、赤褐色粒・透明細粒少量。	良好	内：淡褐色 外：暗灰褐色	口縁部一 部。体部～ 底部1/4	
4	須恵器 蓋	口径：(14.4)	内外面ロクロナデ。三義産。	やや粗い。黒色細粒・白色細粒少量。	良好	内：灰色・暗灰色 外：灰色	口縁部1/6	
5	須恵器 高台付杯	高台径：(9.8)	内：ロクロナデ。底部ナデ。 外：体高ロクロナデ。底部回転ヘラケズリのち三角高台付き。ロクロナデ。二次底部面に沈線あり。三義産。	良好。白色細粒少量、黒色細粒微量。	良好	内外：灰色	底部1/3。体 部下位一部	
6	須恵器 甕		内外面ロクロナデ。	良好。白色細粒多量、黒色細粒やや少量、灰色粗粒微量。	良好	内：灰色 外：灰赤褐色	口縁部一部	
7	土師器 甕	口径：(23.2)	内：口縁部ヨコナデ・接合粘土あり。胴部ヘラナデ・ナデ。粘土接合痕あり。 外：口縁部粘土接合痕・押圧痕・接合粘土あり。ヨコナデ。胴部上から下方ヘラケズリ。	やや良好。灰色粗粒・白色粗粒やや少量、白色細粒・赤褐色粒少量。	良好	内外：明褐色・ 暗褐色	口縁部～胴 部上位1/6	
8	土師器 鉢	口径：(18.6)	内：口縁部ヨコナデ。体部一部ナデ。 外：口縁部ヨコナデ。体部押圧痕。	良好。黒色細粒やや多量、白色細粒少量。	良好	内外：明褐色	口縁部～体 部下位1/6	
9	編物石か	厚さ：2.3	扁平な楕円で表面滑らか。砂岩。長軸一方端欠く。				襷一部	

第16表 14区S1-79B 出土遺物観察表

No.	器種	大きさ(cm×g)	技法等	胎土	焼成	色調	残存率	注記
1	土師器 杯	底径：(6.4)	内：ロクロナデのち黒色処理。ヘラミガキ。 外：体部ロクロナデ。底部回転糸切り。底部に墨書「千」。	良好。白色細粒・黒色細粒・赤褐色粒少量、透明細粒微量。	良好	内：黒色 外：明褐色・赤褐色	底部1/2	
2	土師器 杯	底径：(6.0)	内：ロクロナデのち黒色処理。ヘラミガキ。 外：体部ロクロナデ。底部回転糸切り。	やや良好。黒色細粒・灰色細粒やや多量、白色細粒・赤褐色粒微量。	不良	内：黒色 外：乳褐色	底部1/3	
3	土師器 杯	底径：(6.0)	内：ロクロナデのち黒色処理。ヘラミガキ。 外：体部ロクロナデ。底部回転糸切り。黒線あり。	良好。白色細粒・透明細粒・黒色細粒少量、赤褐色粒微量。	良好	内：黒色 外：明灰褐色・ 暗灰色	底部1/2	
4	土師器 杯	底径：(6.4)	内：ロクロナデのち黒色処理。ヘラミガキ。 外：体部ロクロナデ。底部回転糸切り。	良好。灰色粒多量。黒色細粒・赤褐色粒少量、灰色粗粒微量。	不良	内：黒色 外：乳褐色	底部1/3	
5	土師器 杯	底径：5.6	内：ロクロナデのち黒色処理。ミガキ。 外：体部ロクロナデ。底部回転糸切り。	良好。白色細粒・灰色細粒・透明細粒・赤褐色細粒少量、灰色粗粒微量。	やや 良好	内：淡褐色 外：乳褐色	底部1/2	
6	土師器 杯	底径：(8.2)	内：ロクロナデのち黒色処理。ヘラミガキ。 外：体部ロクロナデ。底部回転糸切り。黒線あり。	やや粗い。灰色細粒・黒色細粒多量、白色細粒やや少量。	良好	内：黒色 外：明褐色・黒色	底部1/4	
7	土師器 杯	底径：(5.7)	内：ロクロナデのち黒色処理。ヘラミガキ。 外：体部ロクロナデ。底部回転糸切り。	やや良好。黒色細粒・白色細粒・赤褐色細粒少量、白色粗粒微量。	良好	内：黒色 外：明褐色	底部～体部 下半1/3	
8	鉄塊系 遺物	長さ：4.1 幅：2.6 厚さ：2.1 重さ：16.11	上面が平坦で、下面に凹凸のあるC字状に生成したもの。箇中左端上面と右端下面は付着物の二片を含む。放射割れが走り、精錬鉄塊か。				完存	S1-79A ・B

第3章 発見された遺構と遺物

9	羽口		外面ナデ、國中右半分赤褐色の酸化色。顔 治用羽口。	良好。白色細粒多 量、黒色細粒・赤 褐色粒やや少量。 赤褐色粗粒少量。	良好	外：淡褐色・赤 褐色	一部	14区一 括
10	平瓦		凹面：赤切り痕、布目痕、一部ナデ。 凸面：赤切り痕、砂目、調印き。 端面ヘラケズリ。	良好。黒色細粒多 量、白色細粒・灰 色細粒・透明細粒 やや多量。	良好	凹凸面：乳褐色	端部一部	

第17表 14区S1-80出土遺物観察表

No.	器種	大きさ(cm・g)	技法等	胎土	焼成	色調	残存率	注記
1	土師器 杯		内：底部内面ヘラミガキ。 外：ヘラケズリ。	良好。赤褐色細 粒・白色細粒・黒 色細粒少量。	良好	内外：赤褐色	底部一部	
2	須恵器 蓋		内：天井口コロナデ。 外：天井口コロナデ、2回転ヘラケズリ。 つまみ挿入(剥落)。	良好。白色細粒。 黒色細粒少量。	良好	内外：明灰色	天井中央部 1/4	
3	平瓦		凹面：赤切り痕、布目痕、一枚作り、側縁 ヘラケズリ。 凸面：ナデ、側縁ヘラケズリ。 端面：側面ヘラケズリ。	良好。白色粒多 量。	良好	凹凸面：灰色	平瓦隅一部	
4	土師器 壺	口径：19.8	内外口縁部コロナデ。外面粘土接合痕あり。 内：胴部ヘラナデ・ナデ。粘土接合痕あり。 外：胴部下から上方ヘラケズリ、中位に 黒斑あり。	やや良好。白色細 粒・灰色粒・赤褐 色細粒・黒色細粒 多量。灰色粗粒少 量。	良好	内：乳褐色・赤 褐色 外：乳褐色・黒 褐色	口縁部2/3、 胴部上位 4/5・中位一 部	カマド
5	土師器 壺	口径：(25.0)	内：口縁部コロナデ・ヘラナデ。胴部ヘラ ナデ。 外：口縁部粘土接合痕・押圧痕あり、コ ロナデ。胴部上から下方ヘラケズリ。	良好。白色細粒や やや少量、黒色細 粒少量、白色粗粒 微量。	良好	内外：明橙褐色	口縁部1/5、 胴部上位1/4	
6	土師器 壺	口径：(20.0)	内：口縁部コロナデ、一部ヘラナデ。胴部 コロナデ・ヘラナデ。粘土接合痕あり。 外：口縁部コロナデ、粘土接合痕あり。胴 部下から斜上方ヘラケズリ、一部押圧痕 あり、無調整、粘土接合痕あり。	良好。白色細粒・ 灰色粒多量、黒色 細粒やや少量、白 色粒・赤褐色粒少 量。	良好	内：明灰褐色 外：明褐色	口縁部1/3、 胴部1/6	カマド
7	土師器 壺	底径：(6.0)	内：胴部・底部ナデ。 外：胴部縦方向ケズリのち横方向ケズリ。 底部不明。	良好。白色細粒・ 黒色細粒多量、赤 褐色粒・白色粒や やや少量。	良好	内：乳褐色・赤 褐色 外：明褐色・暗 灰色	底部1/5、胴 部下位一部	

第18表 14区南部表採遺物観察表

No.	器種	大きさ(cm・g)	技法等	胎土	焼成	色調	残存率	注記
1	鉄製品 釘	長さ：9.7 幅：1.3 厚さ：1.1 重さ：35.08	短軸断面方形で、國中下方が細くなる。頭 部は欠損か。				一部	
2	鉄製品 紡錘車	長さ：4.4 径：0.4 重さ：2.70	短軸断面円形をした紡錘車の軸棒と考えら れる。表面に土砂付着。				一部	
3	陶形 鍛冶滓	長さ：9.1 幅：6.1 厚さ：3.2 重さ：205.23	上面は平坦で、長軸一端は滓が反り上が る。下面は輪形で、半分の範囲に青灰色の 伊灰粘土が付く。滓は重量感があり緻密。 大きな破面はない。				完存	
4	陶形 鍛冶滓	長さ：4.8 幅：5.0 厚さ：2.0 重さ：55.98	側面に破面が1ヶ所ある鍛冶滓。上面で、 國中下端には白色溶解物があり、剥離面と なっている。羽口の位置か。 上面は滑らかで黒褐色、下面は中心に灰色 伊灰粘土が付く。				側縁1ヶ所 と上面1ヶ 所欠	
5	陶形 鍛冶滓	長さ：4.0 幅：2.4 厚さ：3.0 重さ：39.36	2段の小型陶形滓を半分に割った残片。上 段の滓の上面は平坦で、破面には白色溶解 物があり、滓は厚さ1.5cm程。下段の滓の 下面には伊灰粘土がわずかに付着する。滓 は緻密で重量感がある。				一部	

いた部分が硬くなっており、土間であろう。

柱穴は北西隅に確認でき、径18cm、深さ35cmであった。

カマドは北辺にあり、1回目の調査で袖先端までを調査した。土層の調査所見によれば、1・2・5層は流入土、3層は火床、4層は煙道天井部、6層は袖と判断した。土層図からみる裏掛け口の位置は、北辺壁

よりも住居の内側になる。煙道は舟底形である。

図化した遺物は、覆土掘り下げ中に出土した破片である。坏は全て土師器で、ロクロナデで、内面黒色処理し、底部は回転糸切りである。1は底部外面に「千」の墨書がある。底径は5.6cmから8.2cmに及ぶが、6cm前後に復元されたものが多い。規格ある一群の坏と言えるであろう。8は当初S1-79出土としていたが、羽口とともに、本遺構に属するものとして報告する。9は羽口の中位片であろうか、孔径から鍛冶用羽口とみられる。10の平瓦は一枚作りで、凸面に砂目・縄叩きになっており、9世紀後半の所産である。この年代観は土師器坏と同じであり、保有期間が少なく、窯場に近い遺跡の特徴を反映している。胎土に黒色細粒や白色細粒が多くて、三義窯産と判断することができる。

なお、併せて提示した釘や紡錘車・鉄滓は14区南部で出土したものであり、本住居に伴う可能性もある。表土除去の際に出土したもののみられ、包含層にあった遺物と考えられる。これらは、14区で鍛冶操作をしていた事実を示す資料となる。特に、第35図の1の鉄釘は太くて、集落で一般に使用するものではない。故鉄が交易品か判別できないが、後者であれば交易先は官衙や寺院であろう。

#### 14区S1-80(第34・35図、第17表、図版七・二一)

14区北端にあり、S1-79Bと重複するが、本住居の覆土中にS1-79Bのカマドが構築されていることから、本住居の方が古い。遺構で遺存するのは、住居北部の一部である。北壁は直線状に掘られて、北西隅も端正に曲がっている。確認面から床面までの深さは約20cmである。覆土は3層に区分でき、ロームブロックやローム粒を多く含んでいることから人為的に埋め戻されたと考えられる。

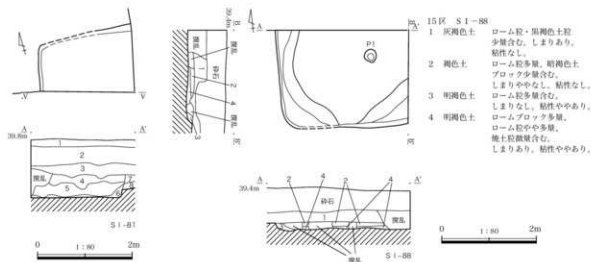
カマドは、北辺に設けられ、袖の基底部分が良く残っていた。1層はカマド廃棄後の流入土で、3層は火床である。袖は5層で、暗黄褐色土を用いて構築し、先端には4の土師器裏を逆さにして立て掛けて芯としていた。

遺物は、6の土師器裏がカマドの西袖前で床面近くにあった。4は本来この住居が使用されていた時期の所産であり、この住居の時期を反映する。このほかの土器は、覆土を掘り下げ中に出土したものである。1は内面ヘラミガキを施す赤褐色の土師器坏で、8世紀前半に多い。2の須恵器蓋はつまみが剥離しているが、8世紀前半から中頃までは天井中心部に窪みを作り、この中にソケット状にしてつまみの基部を挿入する。蓋の製作技法から時期を知ることのできる資料である。4～7の土師器裏は口縁部が大きく反し、胴部にやや張りがある特徴的な形態といえる。4と6の口縁部は丸味をもっているが、5は平坦面があり、形態差が看取される。一方、胴部の削り方向は、6が斜め上方に削り、5は下方に垂下して削るため、明らかに製作技法が異なっている。これは、7区S1-65ではさらに差異が明瞭である。7は武蔵型・上武系裏、4・6は在地における鶴田中原タイプの系譜と考えておくべきであろう。

#### 15区S1-81(第36図、第19表、図版八・二二)

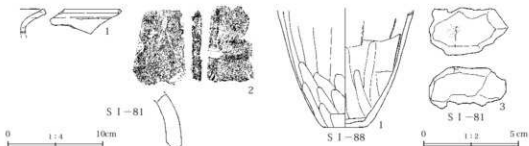
15区は、南半分と北半分に分けて調査した。14区との間はライフラインの埋設物が道路工事にあわせて新たに複数本埋められており、安全上のため調査できなかった。本住居跡は調査区の南東隅にあり、遺構の北西隅を調査したのにとどまる。壁は北壁から西壁に直角に曲がっているが、調査した北壁も多くが攪乱で壊されていた。周溝などは発見できなかった。図示しなかったが、床はロームブロックと暗褐色土の貼床で、やや軟質であった。図示した土層は2層が盛り土、3層は盛り土前の表土、7・8層は地山である。住居跡の覆土は4～6層で、5・6層で焼土やロームを多く含んでいることから、人為的に埋め戻されたと考えら

第3章 発見された遺構と遺物



15区 S1-81

- 1 砂利 ローム粒多量含む。しまり・粘性あり。
- 2 灰褐色土 しまりややあり。粘性ややなし。表土。
- 3 灰褐色土 焼土粒・ローム粒少量含む。しまりあり。粘性なし。
- 4 褐色土 焼土粒・ローム粒やや多量。炭化粒・ロームブロック微量含む。しまりあり。粘性なし。
- 5 褐色土 焼土粒・ローム粒やや多量。炭化粒・ロームブロック微量含む。しまりあり。粘性なし。
- 6 明褐色土 ローム粒・ロームブロックやや多量含む。しまりあり。粘性ややあり。
- 7 褐色土 しまりなし。粘性ややあり。地山崩移積。
- 8 黄褐色土 ソフトローム。



第36図 15区S1-81・88実測図・出土遺物実測図

第19表 15区S1-81出土遺物観察表

No.	器種	大きさ (cm・g)	技法等	胎土	焼成	色調	残存率	注記
1	土師器 甕		内外：口縁部コロナダ、粘土接合痕あり。	良好。白色細粒・黒色細粒やや少量、赤褐色細粒・透明細粒少量。	良好	内外：明褐色	口縁部一部	
2	丸瓦		凹面：横方向ナダ、側縁ヘラケズリ。 凸面：ナダ、側面ヘラケズリ。	白色細粒・黒色細粒・灰色細粒多量、赤褐色粒少量。	やや不良	凹凸面：乳白色	側縁一部	
3	鉄塊系 遺物	長さ：4.1 幅：2.5 厚さ：2.2 重さ：25.91	上面滑らかで、下面に凹凸がある。表面に厚く土砂付くが、黒錆と割れが上面にみられる。				完存	

第20表 15区S1-88出土遺物観察表

No.	器種	大きさ (cm・g)	技法等	胎土	焼成	色調	残存率	注記
1	土師器 甕	底径：4.6	内：胴部斜方向ナダ、横方向ヘラナダ、底部ナダ。 外：胴部上から下方へ、下端は斜方向にヘラケズリ、底部不明、黒斑あり。	やや良好。白色細粒やや多量、白色粒・黒色細粒・赤褐色粒・灰色粗粒少量。	やや不良	内：乳褐色・灰褐色 外：橙褐色・黒褐色	底部4/5、胴下位3/4	

れる。遺構確認面は8層下面であるが、掘り込み面からの住居の深さは50cm程である。

図化した遺物は、覆土掘り下げ中に出土したものである。1の土師器甕は口縁部端が平坦で、頸部がくの字形に曲がっている。2の丸(男)瓦は凹面に糸切り痕や布目痕がなくて、拓影のように横方向にナデを施している。模骨を用いずに、粘土紐を巻き上げて瓦を製作する「泥糸盤築技法」と呼ばれるもので、三義窯では9世紀中葉に確認できる。鉄塊系遺物は長さ4cmに及ぶ大きさで、上面は滑らかである。隣接する14区で鍛冶に関連する遺物が発見されており、15区南部も操業範囲に近いことが示唆される。時期的にも、瓦の年代が9世紀中葉となることから、本住居の上限が明らかである。S1-79Bに近い時期であることも、このことを証左する。

#### 15区S1-88(第36図、第20表、図版八・二二)

15区の北東隅に位置する。北側はガスや上下水道が道路改良に伴って新たに埋設されたことから安全のため、調査しなかった。このため、遺構は住居跡の南西部を調査したのにとどまる。壁は南辺・西辺ともに直線状になっているが、南西隅は丸味をもっている。図示した遺構図は、貼床を剥がした状態のものである。南西隅では床面から7~8cmの深さになっており、ここから西辺の壁際などが少し深く掘られている。この掘り方は竪穴住居の一般的な工法である。ピットが1箇所発見され、深さ23cmあるが、明らかに柱穴であるか断定できない。

覆土は調査区の北面と東面を図化した。碎石の下に畑の表土があり(1層)、2層が住居跡の覆土で、ローム粒が多いことから埋め戻した土と考えられる。3層は壁際の崩落土、4層はしまりがあり、貼床とみられる。住居覆土に攪乱が及んでいる部分が多い。

図化できた遺物は1点のみである。胴部外面を縦方向、下端は斜め下方向に削る長胴甕である。

#### 16区S1-92(第37・38・39図、第21表、図版八・九・一〇・一一・二二)

本住居跡は16区の南西隅にある。3軒の住居跡が重複しており、本遺構が最も新しく、土坑群よりも古い。規模は南北3.24m、東西3.5mで、東西にやや長くなっている。各辺は直線状で、隅も端正に折れる。調査区際の上層(S1-96の図で掲載)でみると、盛り土と判断されたⅢ層下面から掘り込み、深さは0.8mになる。

柱穴は、北西を除く位置で確認できたが、深さが不定になっている。その覆土はロームブロックを含んでおり、埋め戻した土と考えられる。

床は黄褐色土で、厚さ5~10cm程の貼床を行っており、掘り方図に示したように、四隅と南壁際が深い掘り方で、北西隅・南東隅ではほかの部分より20cm程、南壁際中央では15cm、北東隅では5cmの深さである。

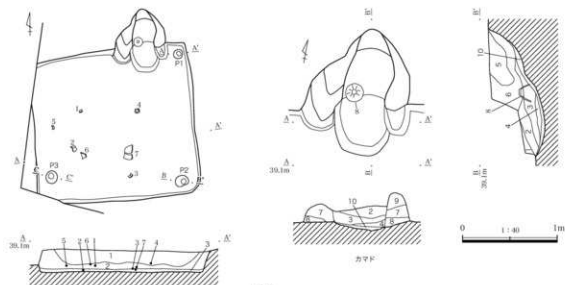
カマドは北東寄りに作り、住居北辺よりも外側に土師器甕下半を伏せた支脚が置かれていた。その位置はカマドの主軸よりも西側に寄っており、東側に長胴甕、西側に小甕を掛ける二連式カマドであることがわかる。土層の所見では、1~3・6層は流入土、5層は煙道天井部、7~9層は袖、10層は火床と判断した。煙道は舟首形で底面は緩やかに立ち上がる。

覆土は、住居中央部の東西土層観察では1・2層が自然堆積で、3層は貼床であろう。

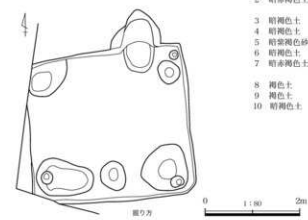
遺物は、2・7が床面近いレベルから出土した。カマド支脚の8が本住居の居営時期を示す。遺物の時期でみると、1のみが古いもので混入品の可能性がある。2~4は底径7cm余りで、三義光沢2号窯の9世紀第2四半期の所産とみられる。5の土師器甕は口縁部外面にW形のヘラ描き文と粘土がある。9は、砥石と類似した石材で、側面を丁寧削り、長軸端面と側面からL字形に穿孔する榫衡であろう。10は砥石とし



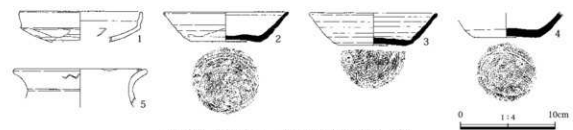
て使った石を、割れた面に挟り削って弧状に作っている。剥片鑑定の結果、9と10は変質流紋岩で、産地の特定は難しいが、群馬県桐生市から旧大間々周辺が可能性として指摘された。重さを量る道具が集落で作られていることや既使用品について再利用の実態を示す資料といえるであろう。



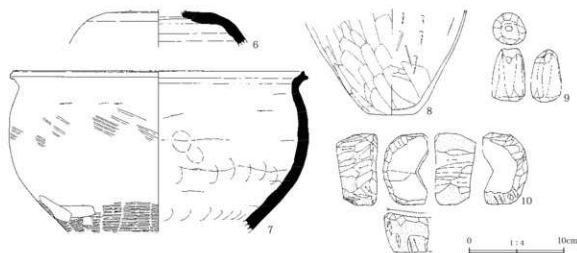
- 16区  
S1-92
- 1 褐色土
  - 2 褐色土
  - 3 黄褐色土
- P1・P2・P3
- 1 ローム土
  - 2 黒褐色土
- カマド
- 1 褐色土
  - 2 暗赤褐色土
  - 3 暗褐色土
  - 4 暗褐色土
  - 5 暗赤褐色砂質土
  - 6 暗褐色土
  - 7 暗赤褐色土
  - 8 褐色土
  - 9 褐色土
  - 10 暗褐色土
- ローム粒や中少量、白色粒少量含む、ややしまりあり。粘性なし。  
ローム粒や中少量、1層よりもローム粒や中多量、ロームブロック・白色粒微量含む。しまり・粘性なし。  
褐色土粒少量含む。しまりあり。粘性なし。
- ロームブロック(径5mm)少量含む。しまり・粘性なし。  
ロームブロック(径2~3cm)少量含む。しまり・粘性なし。
- ローム粒・焼土粒少量、炭化物微量含む。しまりなし。粘性ややあり。  
焼土粒やや多量、ローム粒少量、炭化物粒微量含む。しまりあり。粘性ややあり。
- 焼土粒多量、炭化物粒微量含む。しまりややなし。粘性ややあり。  
ローム粒少量含む。しまりなし。粘性ややあり。  
焼土粒少量、ローム粒微量含む。しまりあり。粘性ややあり。  
ローム粒少量、炭化物粒微量含む。しまりあり。粘性なし。  
褐色土主体、焼土粒やや多量、ローム粒・白色粒微量含む。しまりあり。粘性なし。
- ローム粒・褐色土主体。しまりあり。粘性なし。  
ローム粒少量、白色粒微量含む。しまりあり。粘性なし。  
焼土粒やや多量、ローム粒少量含む。しまりなし。粘性ややあり。



第37図 16区S1-92実測図



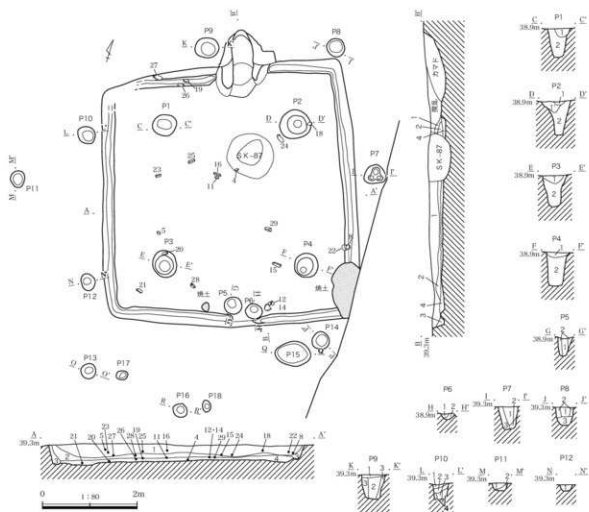
第38図 16区S1-92出土遺物実測図(1)



第39図 16区S1-92出土遺物実測図(2)

第21表 16区S1-92出土遺物観察表

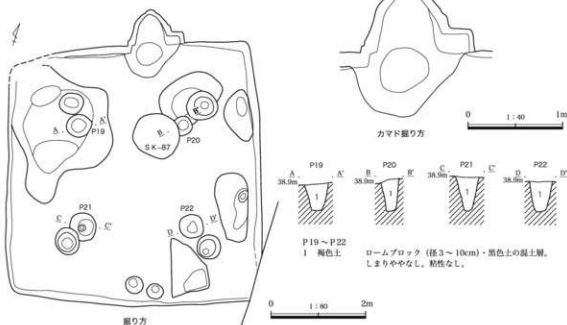
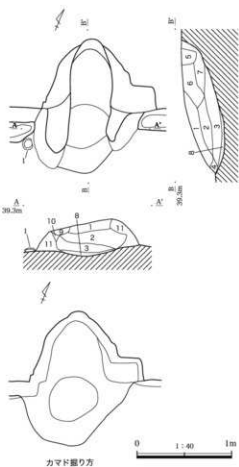
No.	器種	大きさ (cm/g)	技法等	胎土	焼成	色調	残存率	注記
1	土師器 坏	口径: (12.8)	内: 口縁部~底部外周ヨコナデ、底部中央ナデ・ヘラナデ。 外: 口縁部ヨコナデ、底部ヘラケズリ。 内面~口縁部外面漆仕上げ。	やや良好、赤褐色粒多量、白色細粒・黒色細粒少量。	良好	内: 褐色・暗褐色 外: 黒褐色・褐色	口縁部1/4、 底部1/2	No. 17
2	須恵器 坏	口径: (13.0) 底径: 7.4 器高: 3.1	内面~体部外面ロクロナデ・粘土接合痕あり、底部回転糸切り。三義産。	やや粗い、白色細粒・灰色粒、灰色細粒やや多量、黒色細粒やや少量、灰色粗粒少量。	良好	内外: 明灰色	底部完存、 口縁部~体部1/4	No. 15
3	須恵器 坏	口径: (13.2) 底径: 7.2 器高: 3.5	内面~体部外面ロクロナデ、底部外面回転糸切り。三義産。	良好、灰色粒・灰色細粒多量、黒色細粒・白色細粒少量。	良好	内外: 明灰色	底部~口縁部1/2	No. 8
4	須恵器 坏	底径: 7.0	内面~体部外面ロクロナデ。 外面: 底部回転糸切り、全面に煤付着。 三義産。	やや良好、灰色粒多量、黒色細粒・白色細粒少量。	良好	内: 明灰色 外: 褐色・明灰色	底部~体部 下位完存	No. 10
5	土師器 甕	口径: (14.0)	口縁部ヨコナデ。 外: 頸部に沈線と波状の焼成前ヘラ描き文。	やや不良、赤褐色細粒・灰色細粒やや多量、赤褐色粗粒・灰色粗粒やや少量、黒色細粒少量。	良好	内: 明褐色・灰色 外: 明褐色	口縁部1/6	No. 16
6	須恵器 壺		内: 体部ロクロナデ 外: 体部ロクロナデのち自然軸か、頸部接合は二枚構造か、体部と頸部の中心位置がずれている。	やや粗い、白色細粒・黒色細粒少量。	良好	内: 青灰色 外: 暗緑色	肩部1/4	No. 14
7	須恵器 鉢	口径: (30.6)	内: 体部無文当て具成・粘土接合痕あり、口縁部までロクロナデ。 外: 口縁部ロクロナデ、体部平行叩き、上・中位ナデ、下位一部ケズリ。	やや良好、白色粒・白色細粒多量、灰色細粒・黒色細粒やや多量、白色粗粒やや少量。	良好	内外: 灰色	口縁部~体部2/5	No. 9
8	土師器 甕	底径: 4.5	内: 胴部ヘラナデ、下位~底部ナデ。 外: 胴部上方から斜下方向へヘラケズリ、底部二方向へヘラケズリ、黒斑あり。胴部下端に煤付着。	やや良好、白色細粒多量、灰色細粒やや多量、黒色細粒・赤褐色粒少量、白色粗粒微量。	良好	内: 橙色・明褐色 外: 灰色・明褐色	胴部下位~ 底部ほぼ完存	No. 1
9	石製品 横衝	長さ: 5.6 幅: 3.5 厚さ: 3.2 重さ: 71.75	砥石と同じ石材を側面削りしている。短軸断面球形、側面は下方が少し膨らむ。下面も削り、上端で二方向からL字形に穿孔する。			乳白色	完存	
10	砥石	長さ: 7.4 幅: 4.7 厚さ: 4.2 重さ: 203.3	砥面は上下2面で、両中上面は弧状になっている。使用時長軸で折れて破断面となっている。ここにV字形に削りを加えて再加工する。遺存する本来の側面に削り加工痕あり。仕上げ紙か。			乳白色・褐色	一部	No. 1



- A-A'・B-B'
- 1 褐色土  
ローム粒少量、焼土粒・白色粒微量、炭化物粒極微量含む。しまりあり、粘性なし。
  - 2 明褐色土  
ローム粒中～多量、ロームブロック・白色粒微量含む。しまりややあり、粘性なし。
  - 3 暗黄褐色土  
ローム粒多量、白色粒微量含む。しまりややなし。粘性なし。
  - 4 黒褐色土  
ローム土・ロームブロック多量、黒色土少量含む。固くしまる。粘性ややあり。
- P 1
- 1 明褐色土  
ローム粒微量含む。しまりなし。粘性ややあり。
  - 2 暗黄褐色土  
ローム粒・ロームブロック主体、褐色土粒少量含む。しまりなし。粘性ややあり。
- P 2
- 1 明褐色土  
ローム粒微量含む。しまりなし。粘性ややあり。
  - 1' 明褐色土  
ローム粒少量含む。しまりなし。粘性ややあり。
  - 2 暗黄褐色土  
ローム粒・ロームブロック主体、褐色土粒少量含む。しまりなし。粘性ややあり。
- P 3
- 1 明褐色土  
ローム粒微量含む。しまりなし。粘性ややあり。
  - 2 暗黄褐色土  
ローム粒・ロームブロック主体、褐色土粒少量含む。しまりなし。粘性ややあり。
- P 4
- 1 褐色土  
焼土粒中～多量、ローム粒少量含む。しまりややあり。粘性なし。
  - 2 暗黄褐色土  
ローム粒・ロームブロック主体、褐色土粒少量含む。しまりなし。粘性ややあり。
- P 5・6
- 1 灰褐色土  
ローム粒中～少量含む。しまりなし。粘性ややあり。
  - 2 明褐色土  
ローム粒多量含む。しまりなし。粘性ややあり。
- P 7
- 1 暗褐色土  
ローム粒少量含む。しまり・粘性なし。
  - 2 暗黄褐色土  
ロームブロック・ローム粒主体。しまり・粘性なし。
  - 3 褐色土  
ローム粒中～少量含む。しまりややなし。粘性なし。
- P 8
- 1 暗褐色土  
ローム粒少量含む。しまりややあり。粘性ややなし。
  - 2 明褐色土  
ローム粒少量含む。しまりややあり。粘性ややなし。
  - 3 暗黄褐色土  
ロームブロック・ローム粒多量含む。しまりややなし。粘性なし。
- P 9
- 1 灰褐色土  
白色粒・ローム粒微量含む。しまりあり。粘性なし。
  - 2 暗褐色土  
ローム粒微量含む。しまりややあり。粘性なし。
  - 3 暗黄褐色土  
ローム粒多量含む。しまりややあり。粘性ややあり。
- P 10
- 1 暗褐色土  
ローム粒少量含む。しまりややあり。粘性なし。
  - 2 明褐色土  
ロームブロック・ローム粒多量含む。しまり・粘性なし。
  - 3 褐色土  
ローム粒中～少量含む。しまりややなし。粘性なし。
  - 4 暗黄褐色土  
ロームブロック多量含む。しまり・粘性なし。
- P 11
- 1 褐色土  
ローム粒少量含む。しまりあり。粘性なし。
  - 2 暗黄褐色土  
ロームブロック多量含む。しまり・粘性なし。
- P 12
- 1 明褐色土  
ローム粒・ロームブロック多量含む。しまりあり。粘性ややあり。
- P 13
- 1 暗褐色土  
ローム粒微量含む。しまりあり。粘性なし。
  - 2 褐色土  
ローム粒中～少量含む。しまりややあり。粘性なし。
- P 14
- 1 暗褐色土  
ローム粒少量含む。しまりなし。粘性ややなし。
  - 2 暗黄褐色土  
ローム粒多量含む。しまりあり。粘性ややあり。

第40図 16区S1-93実測図(1)

- P15  
 1 暗褐色土 ローム粒少量含む。しまりあり。粘性なし。  
 2 暗黄褐色土 ロームブロック主体。褐色土少量含む。しまりややなし。  
     粘性ややあり。
- P16  
 1 暗灰褐色土 ローム粒少量含む。しまりあり。粘性なし。  
 2 暗黄褐色土 ローム粒・ロームブロック主体。しまりあり。粘性ややあり。  
 3 褐色土 ローム粒少量含む。しまりややなし。粘性ややなし。  
 4 暗黄褐色土 ロームブロック多量。ローム粒やや多量含む。しまりややあり。  
     粘性ややなし。
- S1-93  
 カマド  
 1 褐色土 ローム粒やや少量。焼土粒少量含む。しまりややあり。粘性あり。  
 2 明褐色粘質土 焼土粒やや少量。ロームブロック微量含む。しまりややあり。粘性あり。  
 3 暗赤褐色土 粗い焼土粒主体。褐色土粒少量含む。しまり・粘性なし。  
 4 明褐色粘質土 焼土粒少量含む。しまりややあり。粘性あり。  
 5 黒褐色土 ローム粒微量含む。しまり・粘性なし。  
 6 明褐色粘質土 焼土粒少量含む。しまりあり。粘性なし。  
 7 明赤褐色土 焼土・ローム粒やや多量含む。しまり・粘性なし。  
 8 赤褐色土 ロームの焼けた土。しまりややあり。粘性なし。  
 9 灰褐色土 白色粒やや少量。焼土粒微量含む。しまりあり。粘性なし。  
 10 暗赤褐色土 焼土やや多量。白色粒少量含む。しまりあり。粘性なし。  
 11 褐色粘質土 白色粒・ローム粒・焼土粒少量含む。しまりあり。粘性ややあり。

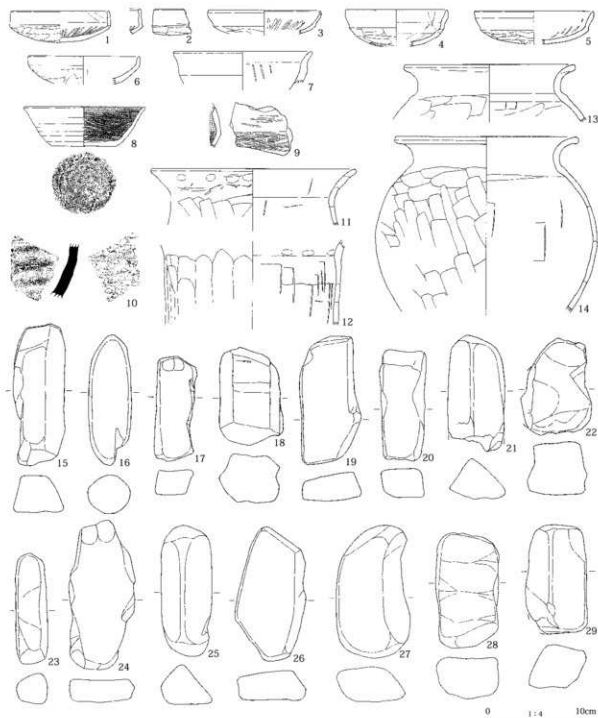


第41図 16区S1-93実測図(2)

## 16区S1-93(第40・41・42図、第22表、図版九・一〇・二二・二三・二四)

16区の南部に位置する。ほかの住居跡との重複もないことから竪穴周囲にロームの確認面が広がり、ピットの有無を確認した。土坑1基と重なっており、本住居の方が古い。竪穴部分は、南北5.6m、東西5.5mの規模で、概ね方形を呈する。北西隅付近は攪乱が及んでおり、壁・床も遺存していない。床面はハードロームを掘り込み、多量のロームと少量の黒色土で貼床していた。貼床を剥がした粗掘りは比較的浅くて、北西部粗掘りで7cm、カマド前で4cm、東壁中央南も粗掘りで7cm、南壁中央東寄りで14cmの深さである。

柱は、4本柱の方形で、2本単位になっていた。床面の精査で外側のP1~4が発見できたことから、これが新しい柱、P19~22は内側にある古い柱と判断した。このため、本住居は4本柱を外側に拡張して、位置替えたことが明らかになった。P1~4は、深さ60~70cmで、柱根がなくて、ロームブロック・ロー



第42図 16区S I-93出土遺物実測図

ム粒を多く含んでいることから、柱抜き取り後に埋め戻したと考えられる。古い柱穴のP 19～22も粗掘り底面から深さ60～70cmで、柱痕がなくて、ロームブロックと黒色土の混合土であった。このため、上屋を造り替える際に柱を抜いて、古い柱穴は埋め戻したと考えられる。柱の深さも近似することから、造り替え後も柱を再利用したことも推測することができる。P 5・6は位置から判断して、入り口施設の柱穴とみられる。P 5では径12cmの柱痕が直立しており、梯子の支柱であろうか。

竪穴の外側でも小さな穴が多数発見された。規則的に並んではいないが、竪穴外の柱穴の可能性もあるも

第22表 16区S1-93 出土遺物観察表

No.	器種	大きさ(mm)	技法等	胎土	焼成	色調	残存率	注記
1	土師器 杯	口径: 10.3 器高: 3.3	内: 口縁部ヨコナデ・ナデ上げ。底部ナデのち右から左方向へ放射状ヘラミガキ。 外: 口縁部ヨコナデ。底部ヘラケズリ。口縁部直下粘土接合痕・押し痕あり。	やや粗い。黒色細粒・白色細粒やや多量。赤褐色粒少量。	良好	内外: 橙褐色一部褐色	口縁部～底部5/6	No. 27
2	土師器 杯		内: 口縁部ヨコナデ。底部放射状ヘラミガキ。 外: 口縁部ヨコナデ。底部横方向ヘラケズリ。	やや良好。白色細粒・黒色細粒やや多量。赤褐色粒少量。	良好	内: 褐色 外: 暗褐色	口縁部～底部一部	
3	土師器 杯	口径: (11.8)	内: ヨコナデのち放射状ヘラミガキ。 外: 口縁部ヨコナデ。直下無調整・押し痕。底部ヘラケズリ。内外面磨き上げ。	良好。白色細粒・黒色細粒・赤褐色粒少量。	良好	内外: 暗褐色	口縁部～底部1/6	
4	土師器 杯	口径: (10.6)	内: 底部外周へ口縁部ヨコナデ。一部ヘラナデ・ナデ上げ。底部中央ナデ。 外: 口縁部ヨコナデ。口縁部直下ナデ・粘土接合痕あり。底部ヘラケズリ。口縁部内外面磨き上げ。	良好。白色細粒やや少量。赤褐色粒少量。	良好	内外: 橙色・暗褐色	口縁部～底部2/5	No. 24
5	土師器 杯	口径: 12.4 器高: 3.5	内: 器壁剥離著しい。ヨコナデ・放射状ヘラミガキ。 外: 口縁部ヨコナデ・磨き上げか。口縁部直下無調整。押し痕あり。底部ヘラケズリ。	やや良好。褐色粒・白色細粒多量。赤褐色粒やや少量。黒色細粒少量。	良好	内: 赤褐色 外: 褐色・明褐色	口縁部～底部1/4	No. 21
6	土師器 杯	口径: (11.6)	内: ヨコナデ一部ヘラナデ。 外: 口縁部ヨコナデ。直下無調整。底部主に右から左方向へヘラケズリ。	良好。白色細粒多量。黒色細粒少量。赤褐色細粒微量。	良好	内外: 赤褐色・暗褐色	口縁部1/4、 底部1/2	
7	土師器 杯	口径: (14.4)	内面へ口縁部外面ヨコナデ。 外: 底部ヘラナデ。 外: 底部ヘラケズリか。	粗い。灰色粒多量。赤褐色粒やや少量。黒色細粒微量。	良好	内外: 褐色	口縁部1/6	カマド
8	土師器 杯	口径: (12.6) 底径: 6.7 器高: 4.2	内外面ロクロナデ。 内: 黒色処理。ヘラミガキ。 外: 底部回転糸切り。体部に煤付着。	良好。白色細粒・黒色細粒少量。	良好	内: 黒色・灰褐色 外: 明褐色・暗褐色	体部下～ 底部完存。 口縁部1/4	No. 17
9	土師器 鉢		内: 黒色処理。放射状ヘラミガキ。 外: 口縁部ヨコナデ。体部横方向ヘラケズリのち全面ヘラミガキ。	良好。白色細粒・黒色細粒少量。赤褐色細粒微量。	良好	内: 黒色 外: 明褐色	口縁部～体部一部	
10	須恵器 壺		内: 体部当り具痕あり。ロクロナデ。 外: 体部回転糸目。	良好。黒色細粒多量。白色細粒少量。	やや不良	内外: 灰色	体部一部	
11	土師器 甕	口径: (21.2)	内: 口縁部ヨコナデ・ヘラナデ。胴部ヘラナデ・粘土接合痕あり。 外: 口縁部粘土接合痕・押し痕あり。ヨコナデ・ヘラナデ。胴部斜方向ヘラケズリ。	やや粗い。白色細粒・黒色細粒多量。白色粗粒・灰色粗粒少量。赤褐色粒微量。	不良	内: 明褐色 外: 明橙褐色	口縁部1/6	No. 22
12	土師器 甕		口縁部ヨコナデ。 内: 胴部ヘラナデ。粘土接合痕あり。 外: 下から上方へヘラケズリ。	やや良好。灰色粗粒・白色粒多量。白色粗粒少量。	良好	内: 明褐色 外: 明橙褐色	胴部上位2/5	No. 19
13	土師器 甕	口径: (17.6)	内: 口縁部ヨコナデ。胴部ナデ・ヘラナデ。 外: 口縁部ヨコナデ・粘土接合痕あり。胴部右から左方向へヘラケズリ。	やや粗い。白色粒・灰色粗粒やや多量。赤褐色粒・灰色粗粒・赤褐色粗粒少量。	良好	内: 明褐色 外: 灰褐色・明褐色	口縁部～胴部上端1/6	南東カマド
14	土師器 甕	口径: (19.0)	口縁部内外ヨコナデ。 内: 胴部ヘラナデ。 外: 胴部上位左から右方向へヘラケズリのち斜下方向へヘラケズリ。全面に煤付着。	やや粗い。白色粗粒・灰色粗粒多量。白色細粒・黒色細粒・赤褐色細粒少量。	良好	内: 灰褐色・褐色 外: 暗褐色・明褐色	口縁部～胴部上位1/4、 胴部中位一部	No. 19
15	編物石	長さ: 14.9 幅: 5.5 厚さ: 3.9 重さ: 555.28	短軸断面台形をした棒状の石。因中左側面は突出・凹れ部があり。縄掛け部と考えられる。				完存	No. 15
16	編物石	長さ: 13.7 幅: 4.5 厚さ: 4.1 重さ: 330.3	短軸断面円形をした棒状の石。表面は平滑。因中下端は自然に欠けたもの。				完存	No. 3
17	編物石	長さ: 11.1 幅: 4.4 厚さ: 2.6 重さ: 228.91	短軸断面が台形をした棒状の石。因中右側面が折れる。				完存	
18	編物石	長さ: 10.4 幅: 6.7 厚さ: 5.2 重さ: 492.33	短軸断面不整な台形をした石。因の面では上半分が下半よりも低くなっている。				完存	No. 1

第3章 発見された遺構と遺物

19	編物石	長さ：13.5 幅：6.5 厚さ：3.0 重さ：423.43	短軸断面台形を呈した扁平な石。図中右側面には段があり、縄掛け部の可能性がある。				完存	No. 6
20	編物石	長さ：11.8 幅：4.9 厚さ：3.0 重さ：302.83	短軸断面台形状をした棒状の石。裏面と図中右側面の長軸中央がわずかに窪む。縄掛け部であろう。				完存	No. 11
21	編物石	長さ：12.3 幅：6.0 厚さ：4.2 重さ：368.26	短軸断面三角形を呈した棒状の石。図中裏面では長軸中央付近が少し窪む。				長軸一方端欠	No. 13
22	編物石	長さ：10.1 幅：7.4 厚さ：5.6 重さ：643.07	短軸断面長方形で、図中左側面が破面。右側面には自然によるくの字形の窪みがあり、縄を掛けた可能性がある。				側面一部欠	No. 16
23	編物石	長さ：11.7 幅：3.5 厚さ：3.2 重さ：206.63	短軸断面台形を呈した細長い棒状の石。図の面の中央付近がわずかに窪み、縄掛け部が。				完存	No. 5
24	編物石	長さ：15.8 幅：7.0 厚さ：2.4 重さ：494.5	短軸断面長方形で、扁平な石。側縁の割れによる抉れがある。				完存	No. 2
25	編物石	長さ：13.8 幅：5.3 厚さ：4.2 重さ：439.58	短軸断面三角形をした棒状の石。表面平滑。				完存	No. 4
26	編物石	長さ：14.1 幅：7.4 厚さ：3.1 重さ：507.11	やや扁平な石で、図中右側面にわずかな窪みがあり、縄掛け部の可能性がある。				完存	No. 8
27	編物石	長さ：14.0 幅：7.8 厚さ：3.6 重さ：588.78	短軸断面台形で、やや扁平な石。表面は平滑で、図中右側面が弧状に抉れている。縄掛け部の可能性がある。				完存	No. 9
28	編物石	長さ：12.1 幅：6.6 厚さ：4.3 重さ：619.08	短軸断面台形で、鋭化した面は波状の凹凸があり、ここに縄を掛けたか。				完存	No. 12
29	編物石	長さ：11.5 幅：6.5 厚さ：4.6 重さ：526.64	短軸断面菱形をした石。表面滑らかで、長軸一方端欠く。				一部欠	No. 14

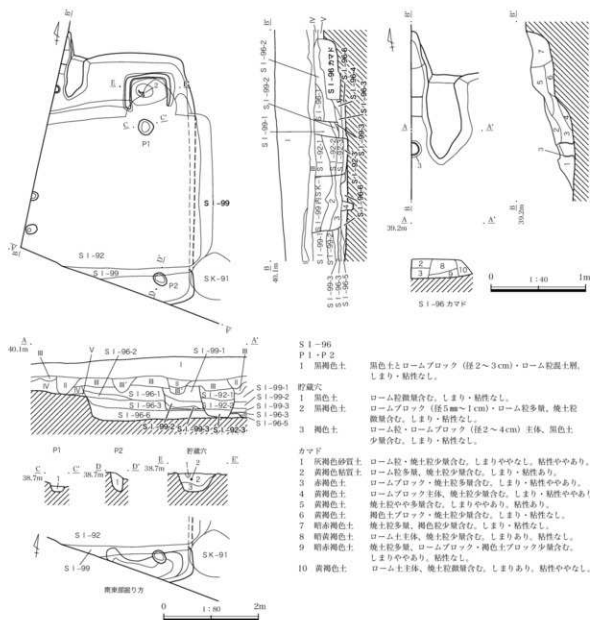
のとして提示した。確認面からの深さも多様であるが、P 9・13・14では径14～16cm程の柱痕が確認できた。平面円形の掘り方であり、竪穴壁外柱穴の可能性が高い。図中のP 10以北とP 9以西にピットがないのは、攪乱が及んでいるためである。

周溝は入り口ピット付近を除いて掘られており、深さは3～8cm程であった。住居の南東隅に焼土が床面から厚く確認された。調査区外にある遺構のカマドの可能性もあるが、焼土として提示しておく。

カマドは北辺中央部にあり、灰褐色土や明褐色粘質土・褐色粘質土などを用いて構築していた。土層観察の所見では、1・3・7層は流入土、2層はカマド構築材が流れた層、4層は焚口のブリッジ、5層は攪乱、8層は火床、9～11層は袖と判断した。煙道の掘り方は、東西が凸字形に類するが、ほかの部分では舟底形を呈しており、折衷的な形態である。

覆土は、ロームを含み、人為的に埋め戻した土とみられる。遺物の出土状況では、1の環がカマド抽籠の床面に伏せてあったことから、遺棄品とみられる。図示した土器片や編物石とみられる細長い石は覆土の下層や中層から出土し、埋め戻す際に投棄したものであろう。

遺物では、1・2は平底に近くて、口縁部が長くのびるこの地域に特徴的な坏である。3・4・5は内彎口縁坏、6は椀形に内彎する坏、7は器厚が厚くて粗製で、口縁部が外反する。13・14はやや小型の球胴甕で、14には外面全面にスガが付着することから、煮炊きに使用されたことがわかる。支脚の上に置いて煮炊きしたことが推測される。



## S1-92・96・99

- I 灰褐色土 上位3cmはコンクリート、下位は砂礫層。  
 II 褐色土 ローム土からなる。  
 III 黒褐色土 炭化物微塵を含む。  
 III' 黒褐色土 ローム粒微塵を含む。  
 IV 黒褐色土 ローム土・黒色の凝土層。  
 V 褐色土
- S1-92  
 1 黒褐色土 ローム粒少量含む。しまりあり。粘性なし。  
 2 褐色土 ローム粒やや少量。白色粒少量含む。ややしまりあり。粘性なし。  
 3 褐色土 ローム粒やや少量。1層より多量ローム粒やや多量。ロームブロック・白色粒微塵を含む。しまり・粘性なし。  
 3' 黒褐色土 3層にロームブロック(径2~3cm)多量含む。しまりあり。粘性なし。

## S1-96

- 1 黒褐色土 ローム粒(径5mm)少量。炭化物微塵を含む。しまりあり。粘性なし。  
 2 褐色土 ローム粒多量。焼土粒・炭化物粒微塵を含む。しまりあり。粘性なし。  
 3 黒褐色土 ローム粒・焼土粒・炭化物粒多量含む。しまりあり。粘性なし。  
 4 赤褐色土 黒色土と灰泥じり粘土・焼土の凝土層。しまり・粘性あり。  
 5 黒褐色土 黒色土とロームブロックの凝土層。しまりあり。粘性なし。  
 6 黄褐色土 ローム主体。褐色土少量含む。しまりあり。粘性なし。
- S1-99  
 1 黒褐色土 ローム粒微塵を含む。しまりあり。粘性なし。  
 2 褐色土 ローム粒・ロームブロック(径1cm)少量含む。しまりあり。粘性なし。  
 3 黒色土 ロームブロック(径2~3cm)多量。ローム粒少量含む。しまりあり。粘性なし。
- S1-99内SK  
 1 黒褐色土 ローム粒微塵を含む。しまりあり。粘性なし。  
 2 黒褐色土 ローム粒少量含む。しまりあり。粘性なし。  
 3 黒色土 ローム粒(径5mm)少量含む。しまりあり。粘性なし。  
 4 褐色土 ローム粒多量含む。しまりあり。粘性なし。

第43図 16区S1-96実測図



16区S1-96 (第43・44図、第23表、図版一〇・一一・二三)

本住居跡は、S1-92・99よりも古い。調査区際にあるため、西部と南西部は調査していない。規模は南北5.36mで、調査区際の土層観察では深さ0.8m以上になる。床面はローム主体の上で10cm余りの貼床を行っている。住居南東部はほかの住居との重複もなく、床が遺存していた。貼床を剥がした後の粗掘りの状況を図示した。

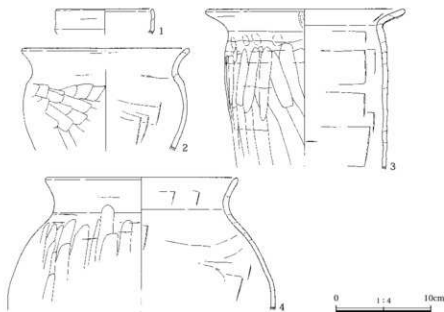
柱穴は北東隅(P1)と南東隅(P2)に確認できたが、柱痕はなくて、覆土は埋め戻したとみられる。

カマドは北辺にあり、暗黄褐色土などで構築してあるために、袖が良く確認できた。西半分は調査区外であるが、北壁ラインよりも内側に土師器糞半分を倒立したものがあり、支脚と判断される。その位置が、カマドの主軸上に位置し、北壁よりも1.4m程内側であることから、縦二連式の可能性もある。土層の所見は、3層は煙道天井内面から流れた焼土などで、5層が煙道天井部、7層は流入土、8～10層は袖である。煙道の底面は平坦にのびて、急傾斜で先端が立ち上がる。

貯蔵穴が北東隅にある。穴の周囲には高さ3cm程、幅10cm程の土手状の高まりが作られる。高まりの外側で東西1.06mを測るが、南側の高まりは新しい住居に壊されたためか遺存しない。穴の部分は平面隅丸長方形、深さ40cmで、断面は逆台形状になっている。覆土にロームを多く含むことから、貯蔵穴廃棄の時に埋め戻したと考えられる。

住居の土層では、3層(SI-96-3)はカマド前で焼土や炭化物を多く含むが、ローム粒も多いことから、埋め戻した可能性もある。

遺物の出土状況では2の甕の破片が貯蔵穴中位から出土し、3がカマド支脚で、本遺構に伴う。1は口縁部が長くのびることから、扁平気味の底部になるであろう。3の長胴甕は、胴部が筒状に垂下しており、張りがない。胴部外面は縦方向にヘラケズリを行う。口縁部に粘土貼り付け部分があり、補修したものと考えられる。



第44図 16区S1-96出土遺物実測図

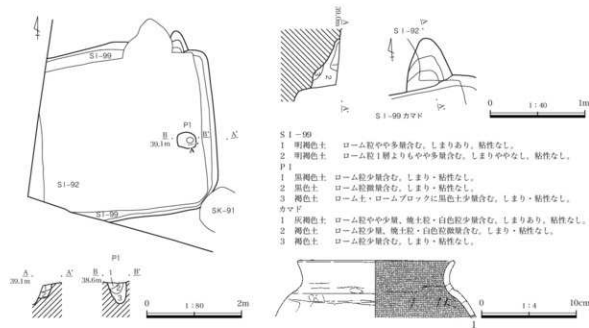
第23表 16区S1-96出土遺物観察表

No.	器種	大きさ (cm)	技法等	胎土	焼成	色調	残存率	注記
1	土師器 杯	口径: (10.2)	内面→口縁部外面ヨコナデ、漆仕上げ。 外: 底部ヘラケズリ。	良好。白色細粒・ 黒色細粒・赤褐色 細粒少量。	良好	内外: 赤褐色・ 暗褐色	口縁部1/5	
2	土師器 甕	口径: (17.4)	内: 口縁部ヨコナデ・粘土接合痕あり。胴 部ナデ・ヘラナデ。 外: 口縁部ヨコナデ・粘土接合痕あり。胴 部上右から左方向、中位斜上方ヘラケ ズリ。	やや粗い。灰色 粒・灰色粗粒・赤 褐色粒・赤褐色粗 粒・黒色細粒多 量。白色粒やや少 量。	良好	内: 明褐色・黒 褐色 外: 淡褐色	口縁部→胴 部上位1/6	No. 1
3	土師器 甕	口径: 20.7	内: 口縁部ヨコナデ、一部ヘラナデ、胴部 ヘラナデ・粘土接合痕あり。 外: 口縁部ヨコナデ・粘土貼り付け接合痕 あり。胴部上端押圧痕。上・中位下から上 方ヘラケズリ、全面に粘土接合痕あり。 煤付着。	やや粗い。白色粗 粒・灰色粗粒・褐 色粗粒・灰色細 粒・黒色細粒多 量。赤褐色粒少 量。	良好	内: 乳褐色・明 褐色 外: 淡褐色・褐 色	口縁部→胴 部上位3/4	No. 3
4	土師器 甕	口径: (20.2)	内: 口縁部ヨコナデ・ヘラナデ、胴部ナ デ・ヘラナデ。 外: 口縁部ヨコナデ、口縁部・胴部に粘土 接合痕あり、胴部上から下方ヘラケズ リ。	やや粗い。灰色 粒・灰色粗粒多 量。白色粒・黒色 細粒やや多量。赤 褐色粒やや少量。	良好	内: 明褐色 外: 明褐色・黒 色	口縁部2/3、 胴部上位1/4	No. 3

## 16区S1-99 (第45図、第24表、図版八・一〇・一一)

S1-92と重複する部分が多くて、壁際とカマドの一部を残すのみである。規模は南北3.76m、東西4.2m以上である。床の掘り込みはS1-92よりも浅い。柱穴は、明確なものは発見できなかったが、東壁際に1箇所確認した。柱痕はないが、柱穴とすれば、その位置から切妻造の屋根となるであろうか。カマドは北壁の北東隅近くに設けられている。新しい住居に、袖や燃焼部は壊されており、煙道の一部が遺存するのみである。煙道は平面舟底形で、底面は傾斜をもって立ち上がる。ロームや白色粒を含む褐色土・灰褐色土で作っていたとみられる。

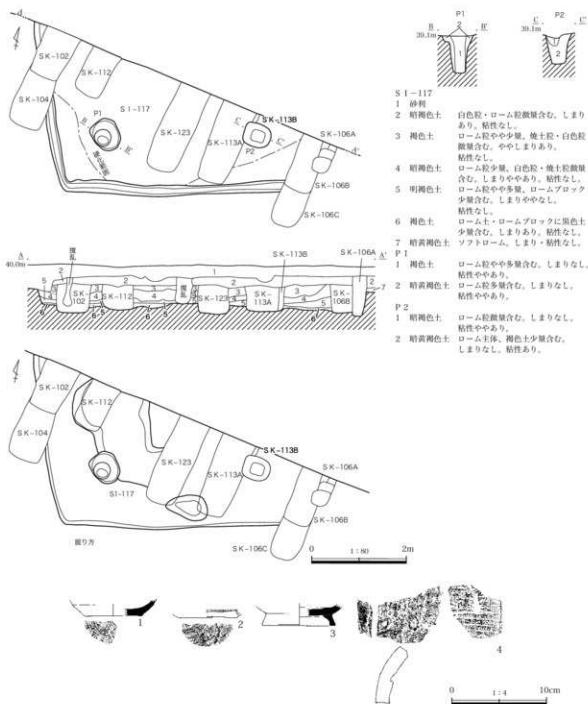
遺物は、床面から出土した土師器甕を図化した。頸部の括れ方からも小型の球胴化とみられ、胴部内面を黒色処理している珍しい技法の土器である。この点から小型球胴甕が貯蔵機能を果たした土器とみるべきであろうか。胎土に黒色細粒などを含んでいることから在地産の土器と判断することができる。



第45図 16区S1-99実測図・出土遺物実測図

第24表 16区S1-99出土遺物観察表

No.	器種	大きさ (cm・g)	技法等	胎土	焼成	色調	残存率	注記
1	土師器 甕	口径：(16.4)	内：口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ・ナデ、黒色処理。 外：口縁部ヨコナデ・粘土接合痕あり、胴部上端無調整、押圧痕・粘土接合痕あり、横方向ヘラケズリ。	やや粗い、灰色粒・黒色細粒多量、白色細粒・白色細粒やや少量、褐色粗粒・灰色粗粒少量。	不良	内：黒褐色 外：明褐色	口縁部一部、胴部上端1/5	床面



- S1-117  
 1 砂利  
 2 暗褐色土 白色粒・ローム粒混入。しまりあり。粘性なし。  
 3 褐色土 ローム粒やや少量。地土・白色粒混入。中やしまりあり。粘性なし。  
 4 暗褐色土 ローム粒少量。白色粒・地土粒混入。しまりややあり。粘性なし。  
 5 明褐色土 ローム粒やや多量。ロームブロック少量含む。しまりややなし。粘性なし。  
 6 褐色土 ローム土・ロームブロックに黒土少量含む。しまりあり。粘性なし。  
 7 暗褐色土 ソフトローム。しまり・粘性なし。  
 P1  
 1 褐色土 ローム粒やや多量含む。しまりなし。粘性ややあり。  
 2 暗褐色土 ローム粒多量含む。しまりなし。粘性ややあり。  
 P2  
 1 暗褐色土 ローム粒混入。しまりなし。粘性ややあり。  
 2 暗褐色土 ローム主体。褐色土少量含む。しまりなし。粘性あり。

第46図 16区S1-117実測図・出土遺物実測図

第25表 16区S1-117 出土遺物観察表

No.	器種	大きさ (cm・g)	技法等	胎土	焼成	色調	残存率	注記
1	須恵器 坏	底径：(6.2)	内面～体部外面ロクロナデ。 底部外面回転糸切り。三義産。	灰色細粒・黒色細粒やや多量、灰色粒・白色細粒少量。	良好	内外：乳褐色	底部1/4	
2	土師器 坏	底径：(6.0)	内：底部ロクロナデ。黒色処理。ヘラミガキ。 外：底部回転糸切り。	やや良好。白色細粒・透明細粒・黒色細粒少量。	良好	内：黒色 外：明褐色	底部1/2	
3	須恵器 高台付坏	高台径：(7.6)	内面～体部外面ロクロナデ。 外：底部回転糸切りの高台貼り付け、ロクロナデ。三義産。	良好。白色細粒・黒色細粒少量、白色粗粒微量。	良好	内外：青灰色	高台1/6、底部3/4	
4	丸瓦		凸面：ナデ 側面：ヘラケズリ 凹面：糸切り、布目。	良好。白色細粒やや多量、赤褐色粒・黒色細粒少量。	良好	凹凸面：明褐色	中位一部	

## 16区S1-117 (第46図、第25表、図版一一・二三)

調査区の北端に位置し、住居跡の南部を調査したのにとどまる。多くの長方形土坑と重複し、本住居跡の方が古い。調査した範囲では、南辺と西辺は端正に掘られており、規模は東西で約6mになるが、東辺は土坑で壊されている。土層観察で確認できる住居の掘り込みは、図の3層から下の層であり、深さ50cm程になる。床面は南西隅と南東隅付近を除き、硬くしまっており、土間として使用していたと推測される。貼床は4～15cm程、ロームと黒色土を含む褐色土で行っている。粗掘りは西側柱穴付近が10cm程、南壁中央付近で平面楕円形の範囲が5cm程、ほかの部分よりも深く掘っていた。

柱穴は2本発見され、4本柱であったと推測できる。P1で径20cm程の柱痕があり、その周りに暗黄褐色土を充填して、柱を固定していた。柱底面の高さはほぼ同じであった。

住居の覆土は3層に区分できた。このうち、3・4層は含有物などから自然堆積したと判断した。図示した遺物は、覆土掘り下げ中に出土したものである。

遺物は、底径6cm程のロクロ使用土師器坏や須恵器坏・高台付坏を図化した。須恵器坏は底径から判断して三義窯大芝原B地点段階のものであろう。3の高台付坏も三義産である。丸瓦は、内面に糸切り痕と布目痕が観察される。

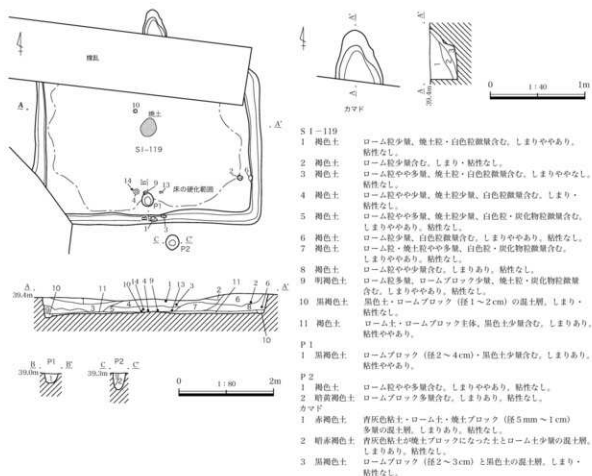
## 16区S1-119 (第47・48・49図、第26表、図版一一・一二・二三・二四)

本住居跡は調査区の北部にあり、遺構の北部に製材所の作業場としてコンクリート枠が作られ、壊されている。規模は東西4.8mで、南北は北東隅がわずかに残っており、3.35m以上になる。住居の各辺は直線状で、隅も直角に曲がっており、端正な作りである。確認面からの深さは0.37mになる。床面は壁際を除いて硬く締まっており、土間として使用していたと推測される。住居の中央床面には、径30～40cm程で平面楕円形の範囲が少し焼けており、炉として利用していたようである。周溝は幅20cm程で、調査した範囲では全周していた。深さは5～10cm程である。南壁際中央付近の穴は深さ34cmで、柱痕は不明確であったが、入り口に関連する穴と推測される。さらに、壁穴の外側にも同形の穴が発見され、同様の性格であろうか。

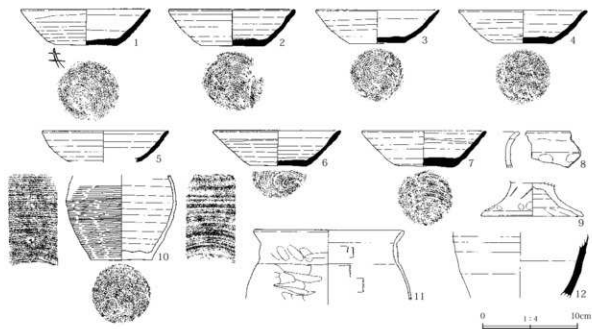
粗掘りに厚さ5cm前後の貼床を行っている。周溝部分に貼床をしないことによって周溝を作っていた。貼床を剥がした結果、住居の西壁際がほかの部分よりも深く掘っており、南西隅で13cmの深さであった。また、東壁際には南北40cm、東西50cm、深さ15cm程の掘り込みが確認された。

カマドは北辺の中央に築かれている。煙道のみを残し、舟底形であるが、底面に段があった。青灰色粘土やロームで煙道の天井部を作ったとみられる。

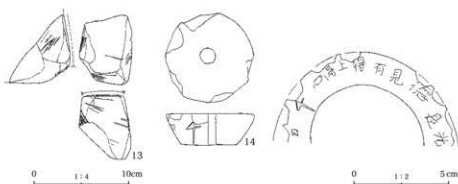
覆土は、下層でロームが多く、埋め戻した土の可能性がある。7層は焼土や炭化物を含み、カマドからの



第47図 16区S1-119実測図



第48図 16区S1-119出土遺物実測図(1)



第49図 16区S1-119出土遺物実測図(2)

第26表 16区S1-119出土遺物観察表

No.	器種	大きさ (cm)	技法等	胎土	焼成	色調	残存率	注記
1	須恵器 坏	口径: 13.6 底径: 6.6 器高: 3.9	内面～体部外面口ロナデ。 外: 底部回転糸切り。体部に粘土接合痕あり。底部・体部境に焼成前に「キ」記入か。三義産。	良好。褐色織・黒色細粒・灰色粒・褐色粒少量。	良好	内: 明褐色・褐色 外: 明褐色	完存	No. 1
2	須恵器 坏	口径: (13.2) 底径: 6.5 器高: 3.9	内面～体部外面口ロナデ。 底部外面回転糸切り。三義産。	やや良好。黒色細粒やや多量。白色細粒・灰色粗粒少量。	不良	内: 明灰色 外: 明灰色一部暗灰色	底部ほぼ完存。体部1/4。口縁部1/6	No. 9
3	須恵器 坏	口径: 12.8 底径: 6.3 器高: 3.6	内面～体部外面口ロナデ。 底部外面回転糸切り。三義産。 体部内外面全面に煤付着。	やや良好。灰色粒・黒色細粒・白色細粒やや多量。灰色織微量。	やや不良	内: 淡褐色・褐色 外: 褐色・黒褐色	完存	No. 2
4	須恵器 坏	口径: 13.3 底径: 6.3 器高: 3.5	内面～体部外面口ロナデ。 底部外面回転糸切り。三義産。 内外面全面に煤付着。	良好。白色粒・黒色粒・褐色粒少量。	やや良好	内外: 褐色・黒褐色	完存	No. 5
5	須恵器 坏	口径: (12.8) 底径: (8.0)	体部内外面口ロナデ。 底部外面糸切り。三義産。	良好。灰色細粒多量。黒色細粒・白色細粒少量。	良好	内外: 明灰色	口縁部1/6。体部一部	
6	須恵器 坏	口径: 13.2 底径: 5.9 器高: 3.8	内面～体部外面口ロナデ。 内: 体部粘土接合痕あり。底部回転糸切り。口縁部～体部に煤付着。三義産。	やや良好。白色細粒多量。白色粒・黒色細粒少量。白色織微量。	良好	内: 灰色 外: 灰色一部褐色	口縁部～底部1/2	No. 8
7	須恵器 坏	口径: 13.0 底径: 5.1 器高: 3.8	内面～体部外面口ロナデ。 内: 体部に鋭い工具による焼成前沈線あり。 外: 底部回転糸切り。三義産。	やや相い。白色粒・灰色粒やや多量。黒色細粒・赤褐色粒少量。	不良	内外: 乳褐色	口縁部～体部3/4。底部完存	
8	土師器 甕		内: 口縁部ヨコナデ。 外: 粘土接合痕・押圧痕あり。ヨコナデ。	良好。白色細粒多量。灰色細粒・黒色細粒・金色雲母やや多量。	良好	内外: 赤褐色	口縁部一部	
9	土師器 台付甕	台径: 10.6	内: 台部ヨコナデ・ナデ上げ。底部ナデ。 外: ヘラナデ。押圧痕あり。端部ヨコナデ。	やや良好。白色細粒多量。黒色細粒・赤褐色粒少量。	良好	内外: 褐色	裾5/6	No. 4
10	土師器 甕	底径: 6.4	内: 胴～底部口ロナデ。口口ロ挽きか。外: 胴部回転力キ目。底部回転糸切り。内外面に煤・ヨコナデ付着。	やや相い。白色細粒多量。黒色細粒・赤褐色粒少量。灰色粗粒少量。	良好	内外: 褐色・暗褐色	胴部下半～底部完存	No. 7
11	土師器 甕	口径: (15.8)	内: 口縁部ヨコナデ一部ヘラナデ。胴部ヘラナデ。 外: 口縁部押圧痕あり。ヨコナデ。胴部右から左方向へヘラケズリのち下方ヘケズリ。煤付着。	良好。白色細粒・黒色細粒・赤褐色細粒少量。	良好	内: 暗赤褐色 外: 暗褐色	口縁部～胴部上端1/6	
12	須恵器 甕		体部内外面口ロナデ。	やや相い。白色細粒・黒色細粒・灰色細粒多量。褐色粒微量。	良好	内外: 明灰褐色	体部中位1/6	
13	砥石	長さ: 7.3 幅: 5.6 厚さ: 6.4 重さ: 153.15	砥面は1面で、破面が下面に1面ある。溝状の研ぎ痕が砥面と3側面にある。石材から仕上げ砥か。	良好。白色細粒微量。	良好	外: 黒色	端部一部	No. 3
14	土製 紡錘車	外径: 4.6 孔径: 0.8 厚さ: 1.7 重さ: 40.75	表面は全面黒色処理。ヘラミガキ。焼成後側面に刻書。	良好。白色細粒微量。	良好	外: 黒色	ほぼ完存	No. 6

流出土と判断した。

遺物の出土状況では、1・3が完形の坏であるが、壁際の覆土上層から斜めになって出土した。10の土師器小甕は床面に立った状態になっていた。

図化できた遺物では、須臾器坏は全て三義窯産で、底径6～7cm程にまとまっており、大芝原B地点段階の所産である。3・4・6は器面にススが付着しており、10も内外面にススや焦げが観察された。10の小甕は内面ロクロナデ、胴部外面は回転カキ目で、底部に回転糸切り痕がある。内面のロクロ目のシャープさと粘土接合痕がないことからみて、ロクロ挽きの可能性がある。この甕をカマドに掛けるには小型であり、住居中央部にがが確認できたことから、がに置いて煮炊きしたと想定できる。13の砥石は、平坦な砥面が1面で、刃物などによる傷が砥面と3側面に観察され、再利用品であろう。14の紡錘車は表面を黒色処理してミガキを行い、その後側面に右から左方向に読み「光是徳見有得上得正千目」と線刻する。

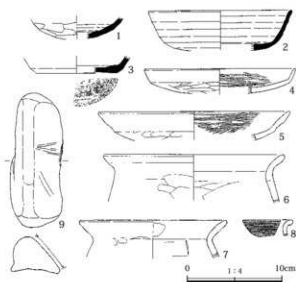
#### 16区S1-120 (第50・51図、第27表、図版一二)

調査区の東端に位置し、住居跡の西部を調査したのにとどまる。規模は南北5.2m程で、西壁は直線状に掘られている。SE-121と重複しており、本住居跡の方が古い。土層観察の結果、住居は床面まで深さ0.7mに達し、ハードルームを掘り込んでいる。西壁北半分と北壁下に周溝が確認できた。周溝は幅20～30cmで、床面からの深さは10cm前後である。床面は平坦で、壁際を除いて硬く締まっていた。厚さ20cm前後の貼床を行っており、ロームブロックやローム粒主体で、ほぼ同じ厚さであり、深い部分はなかった。

竪穴の周囲には、ビットが4箇所発見され、P3・4では径12cm程の柱痕が確認できた。P4では掘り込み面からの深さが75cmに及び、ほかのビットよりも深くになっていた。竪穴の壁から柱穴までの距離は20～60cmあって、この間が屋根椋間の空間と推測される。



第50図 16区S1-120実測図



第51図 16区S1-120出土遺物実測図

覆土では、5層はローム粒がやや多く含まれ、人為的に埋め戻した土と推測されるが、これよりも上の層は自然堆積の可能性がある。

遺物は、覆土掘り下げ中に出土したものであり、二次的に遺構内に入ったと考えられる。1の須恵器環は丸底で、底部外面を手持ちヘラケズリを行うもので、7世紀代の所産であろう。2・3は胎土の特徴などから三畿産とみられ、3は底部外面にヘラ切り痕があることから奈良時代のものと思われる。4・5は土師器の皿で、口縁部の形態に差異があり、5は内嚢口縁になっている。内面はいずれも丁寧にミガキを行う。6・7の土師器甕は口縁部と頸部の折れ方が特徴で、栃木県域に多い在り地である。

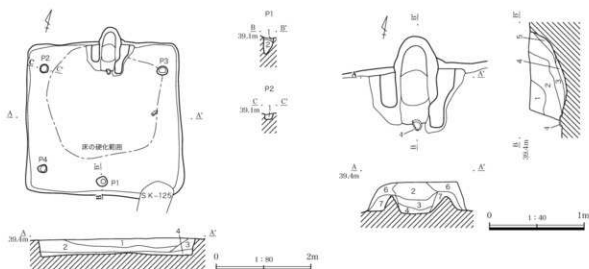
第27表 16区S1-120出土遺物観察表

No.	器種	大きさ (cm・g)	技法等	胎土	焼成	色調	残存率	注記
1	須恵器 環		内：底部ロクロナデ。 外：上端ロクロナデ。底部右から左方向に手持ちヘラケズリ。	やや粗い、白色細粒多量。	良好	内外：灰色	底部1/4	貼り床内
2	須恵器 環	口径：(15.0) 底径：(10.0)	内面～体部外面ロクロナデ。 外：底部3回転ヘラケズリ。 三畿産。	良好。灰色細粒・黒色細粒やや多量、灰色粒少量、白色粒微量。	良好	内外：明灰色	底部～体部下位1/3、口縁部一部	No.2
3	須恵器 環	底径：(8.4)	内面～体部外面ロクロナデ。 外：底部ヘラ切りの外周回転ヘラケズリ。 三畿産。	良好。白色細粒やや少量、黒色細粒微量。	良好	内外：灰色	底部1/4	
4	土師器 皿	口径：(15.8)	内：ヨコナデ、底部のち口縁部ヘラミガキ。 外：口縁部ヨコナデ、底部右から左方向ヘラケズリ。	良好。白色細粒・黒色細粒やや少量、赤褐色粒微量。	良好	内：赤褐色 外：明褐色	口縁部～底部1/6	
5	土師器 皿	口径：(20.0)	内：底部一方、口縁部右から左方向ヘラミガキ。 外：口縁部ヨコナデ、底部左から右方向ヘラケズリ。	良好。赤褐色細粒・白色細粒多量、赤褐色粒・黒色細粒少量。	良好	内外：褐色	口縁部1/6、底部一部	
6	土師器 甕	口径：(18.8)	内：口縁部ヨコナデ、胴部上端ナデ。 外：口縁部ヨコナデ、粘土接合痕あり。胴部上端から右方向ヘラケズリ。	やや粗い、黒色細粒多量、白色粒・赤褐色粒少量。	良好	内：明褐色 外：黒褐色	胴部上端1/6	
7	土師器 甕	口径：(15.4)	口縁部ヨコナデ。 内：胴部上端ヘラナデ。 外：胴部上端ヘラケズリ、押圧痕あり。	やや良好。白色細粒・黒色細粒少量、灰色・白色粒・黒色粒微量。	良好	内：明褐色 外：暗褐色	口縁部1/6	
8	土師器 鉢か		内：黒色処理、ヘラミガキ。 外：ロクロナデかヨコナデ。	良好。黒色細粒・白色細粒少量、赤褐色粒微量。	良好	内：黒色 外：褐色・明褐色	口縁部一部	
9	編物石	長さ：14.1 幅：5.5 厚さ：3.8 重さ：432.28	面の裏面は破面で、右側面は横・斜方向にキズがあり、平滑な砥面とみられる。右側縁中位は小さな割離があり、砥石が割れた後に縄掛けの袈裟を割離で作ったと考えられる。				完存か	No4

16区S1-122 (第52図、第28表、図版一・二・三・二・三)

本住居跡は16区中央部に位置し、遺構全体を調査することができた。SK-125と重複し、本住居跡の方が古い。規模は南北3.2m、東西3.2～3.35mである。南東隅は鋭角になっており、形が歪んでいるが、概ね方形を呈する。確認面から床面までの深さは25～30cm程である。柱穴は南東部以外で見えてきた。径





S1-122

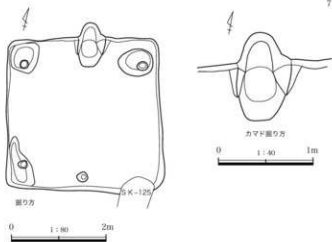
- 1 褐色土 ローム粒少量、白色粘微層含む。しまりややあり、粘性なし。
- 2 明褐色土 ローム粒多量、ロームブロック少量含む。しまりややなし、粘性なし。
- 3 明褐色土 ローム粒やや多量、白色粘微層含む。しまりややあり、粘性なし。
- 4 明黄褐色土 ロームブロック主体、褐色土ブロック少量含む。しまりあり、粘性ややあり。

P1

- 1 褐色土 ローム粒やや多量含む。しまりややなし、粘性なし。
- 2 明褐色土 ロームブロック・ローム粒多量含む。しまり・粘性なし。

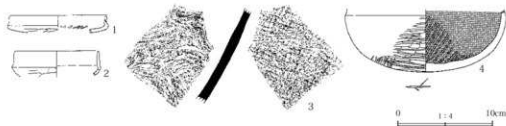
P2

- 1 明黄褐色土 ロームブロック主体、褐色土少量含む。しまりなし、粘性ややあり。



カマド

- 1 褐色土 白色粒・ローム粒少量含む。しまりややあり、粘性なし。
- 2 褐色土 ローム粒・ロームブロック少量、白色粘微層含む。しまり・粘性なし。
- 3 明赤褐色土 焼土粒やや多量、炭化物粘微層含む。しまり・粘性なし。
- 4 明赤褐色土 焼土粒やや少量含む。しまり・粘性なし。
- 5 褐色土 ローム粒少量、白色粘微層含む。しまりややあり、粘性なし。
- 6 褐色土 ローム粒やや少量、白色粒・焼土粒少量含む。しまりあり、粘性なし。
- 7 褐色土 ローム粒・焼土粒やや多量、ロームブロック少量含む。しまりややなし、粘性なし。



第52図 16区S1-122実測図・出土遺物実測図

第28表 16区S1-122出土遺物観察表

No.	器種	大きさ(cm-g)	技法等	胎土	焼成	色調	残存率	注記
1	土師器 坏		内:ヨコナダの底部放射状ヘラミガキ、 外:口縁部ヨコナダの直下を除きヘラケズリ、底部に黒斑あり。	良好。黒色細粒やや少量、白色細粒・透明粒微量。	良好	内:灰褐色 外:黒褐色	底部外周1/6	
2	土師器 坏	口径:(8.8)	内面へ口縁部外面ヨコナダ。 外:口縁部直下に粘土接合痕・押圧痕あり、無調整。底部ヘラケズリ。 内外面全面漆仕上げ。	やや良好。白色細粒少量。	良好	内:褐色 外:暗褐色	口縁部1/6	
3	須恵器 甕		内:胴部同心円当て具痕。 外:格子叩きのち回転カキ目施す。	やや良好。白色細粒多量。白色粒やや少量。	良好	内外:暗灰色	胴部一部	カマド
4	土師器 埴		内:ヨコナダの放射状ヘラミガキ、黒色処理。 外:口縁部ヨコナダ、底部右から左方向へヘラケズリのちミガキ。	良好。赤褐色粒・黒色細粒やや多量、白色細粒やや少量。	良好	内:黒色・明褐色 外:明褐色	底部中央完存、外周・口縁部一部	カマド・No.2

20cm前後の小型の穴で、柱痕は確認できなかった。北東部のP3は床から深さ24cm、P4は深さ14cmであった。南東部は貼床を剥がして調査も行ったが、発見できなかった。

床面はカマド脇・前から壁際を除いた範囲が硬くなっており、土間であったと考えられる。貼床されており、粗掘りは住居中央付近が浅く、壁際が深くなっていた。粗掘り図に示した北東部は周囲よりも10cm程深く、北西部で5cm、南西部で10cm程の深さであった。

カマドは、北壁中央に作られ、袖が遺存していた。土層の所見は、6・7層が袖、2層が天井部の崩落土と判断した。燃焼部の底面には完形品ではないが、伏せた状態で土師器埴が出土した。袖の粘土を除去したところ、断面三角形をしたハードローム掘り残し部分があり、芯としていた。住居掘り方の段階で、カマドの位置を決めて、袖を掘り残していたと考えられる。煙道は舟底形をした一般的なものであった。

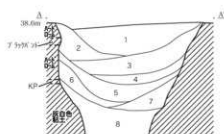
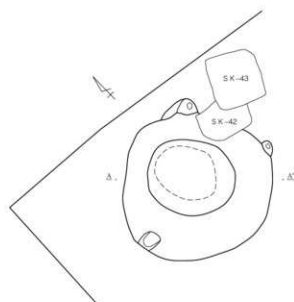
図化できた遺物では、1・2の土師器坏は、平底気味の形態で、2は口縁部が長くのびる点の特徴である。2点ともに地域性のある坏といえる。3の甕は胴部外面に格子叩きと回転カキ目が観察される。本遺跡でも格子叩きは少ない。4の土師器埴は、内面の放射状ミガキは一般にみられるが、黒色処理を施しており、数少ない事例となっている。

## (2) 井戸跡

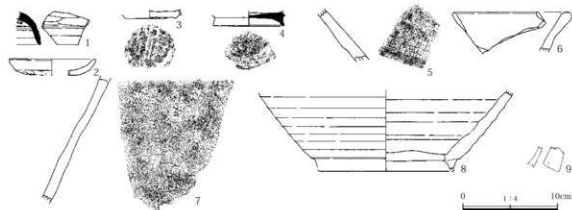
### 8区SE-54 (第53図、第29表、図版一三・二四)

8区の北部に位置する。土坑と重複するが、本井戸の方が古い。平面形は不整な円形で、確認面での規模は南北3.2m、東西3.4mになる。掘り方の線上で、北東部のピットは径30～40cm、深さ40cm、南東部のピットは径20～30cm、深さ30cm、西側のピットは径30～40cm、深さ18cmであった。井戸の外側の施設と推定される。井戸の断面形は確認面から2m程まで、少し緩やかな傾斜で、それより下は急傾斜で立ち上がる。確認面から2.4m掘り下げ、ピンボールド深さを確認すると、さらに1m以上深いことがわかった。

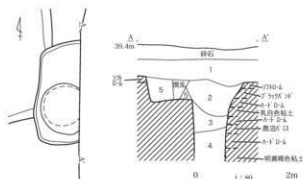
覆土ではロームブロックを主体とする層やローム粒の多い層もあって、人為的に埋め戻した可能性がある。図化した遺物は、覆土掘り下げ中に出土した。井戸を埋める時に投棄したものであろう。1は、古墳時代後期の須恵器蓋で、天井部外面を手持ちヘラケズリする。口縁部と天井部の境に比線を引き、古代の遺物では4が須恵器の高台付坏で、高台の断面形が三角形に近く、類似するものは足利市岡窯跡で出土している。これらは、中世の遺物が一定数確認できたことから、混入品とすべきであろう。中世の遺物では、2は非ロクロのかわらけで、胎土は精良である。3はロクロ使用のかわらけで、底部に回転系切り痕と板状圧痕がみられる。本井戸の下限を示唆する遺物であろう。他地域からの搬入品では常滑産が目立ち、6と8は捏ね鉢、7は大甕になる。これらが、本井戸の時期を示す遺物であろう。



- 8区 SE-54
- 1 暗褐色土 ローム殻 (径1mm~1cm) 中や少量、下層に粘土含む。しまりあり、粘性なし。
  - 2 暗褐色土 ローム殻 (径1~5mm) 少量含む。しまりあり。
  - 3 褐色土 ローム殻 (径1mm) 中や少量含む。しまりあり。
  - 4 茶褐色土 ロームブロック主体。しまりあり。
  - 5 茶褐色土 ロームブロック (径5mm~1cm・5cm) 多量含む。しまりあり。
  - 6 暗褐色土 ロームブロック (径1cm・5cm) 微量含む。しまり・粘性あり。
  - 7 暗褐色土 ローム殻 (径1mm~1cm) 中や多量含む。しまりあり。
  - 8 暗褐色土 ローム殻 (径5mm~1cm) 多量含む。しまり・粘性なし。



第53図 8区SE-54実測図・出土物実測図



- 10区 SE-76
- 1 暗褐色土 石少量、ローム殻微量含む。しまりあり、粘性なし。
  - 2 暗褐色土 ローム殻や多量含む。しまりややあり、粘性なし。
  - 3 暗灰褐色土 ローム殻や少量含む。しまりなし、粘性ややあり。
  - 4 褐色土 ロームブロック多量、ローム殻少量含む。しまりなし、粘性あり。
  - 5 褐色土 ロームブロック・ローム殻多量含む。しまり・粘性あり。

第54図 10区SE-76実測図

第29表 8区SE-54 出土遺物観察表

No.	器種	大きさ(cm <sup>2</sup> )	技法等	胎土	焼成	色調	残存率	注記
1	須恵器 蓋		内：ロクロナデ、天井へラ状工具でナデ、沈殿あり。 外：口縁部ロクロナデ、天井手持ちヘラケズリ、沈殿あり。	白色細粒や多量。	良好	内：にぶい褐色 外：灰色	口縁部～天井外周一部	
2	かわらけ	口径：(9.0)	内：ロクロナデ。 外：口縁部ヨコナデ、底部ナデ、丸底。	精良。灰色細粒少量。	良好	内：乳褐色 外：赤褐色	口縁部1/6、 底部1/3	
3	かわらけ	底径：5.4	内：ロクロナデ。 外：体部ロクロナデ、底部回転糸切り・板状圧痕。	白色粒・赤褐色粒・黒色細粒少量。	良好	内外：褐色	底部3/4	
4	須恵器 高台付杯	高台径：(7.4)	内：ロクロナデ。 外：体部ロクロナデ、底部回転糸切りのち高台貼り付け・ロクロナデ。	良好。白色粒少量、赤褐色粒微量。	良好	内外：明灰色	底部1/3	
5	常滑か 甕		内：ナデ。 外：格子叩き、自然軸付く。	やや粗い、白色粒多量。	良好	内：灰色 外：明灰緑色	胴部一部	
6	常滑 捏ね鉢		内外：ロクロナデ。	粗い、白色礫・白色粗粒多量、灰色粗粒少量。	良好	内外：明灰色	口縁部一部	
7	常滑 甕		内：ナデ一部叩き。 外：ナデ・ヘラナデ。	粗い、白色粗粒多量、白色礫少量。	良好	内：明赤褐色 外：赤褐色	胴部一部	
8	常滑 捏ね鉢	高台径：(14.2)	内：体部ロクロナデ、下部～底部外周回転ヘラケズリ、中央部押圧痕か、ナデ。 外：体部ロクロナデ、下部回転ヘラケズリ、底部外周手持ちヘラケズリのち高台貼り付け・ロクロナデ。	やや粗い、白色粒多量。	良好	内外：明灰色	底部1/4、 下部2位1/6	
9	青磁碗		内：ロクロナデ・施釉。 外：蓮弁文・施釉。	良好。	良好	内外：暗灰緑色	体部一部	

## 10区SE-76 (第54図、図版一三)

10区の北東部にあり、遺構の東部分は調査区外になっている。住居跡と重複しているが、遺構確認時の所見では本井戸の方が新しい。方形の上位掘り方の中心やや南寄りに井戸本体がある二段掘りとなっている。方形掘り方の規模は南北で2.1m、平面円形の井戸本体は径1.1mである。東側土層により上位平坦部までの深さは50cm程、土層図の5層は、ロームブロックやローム粒が多く、本体の南側と対照すると、井戸の裏込めの可能性も残る。ここから井戸本体を約160cm掘り下げたが、さらに1m以上深い。井戸本体の周壁は垂直気味に立ち上がっている。

覆土は、2層や4層でロームが多く含まれており、埋め戻した可能性もある。

## 16区SE-114 (第55図、第30表、図版一三・二四)

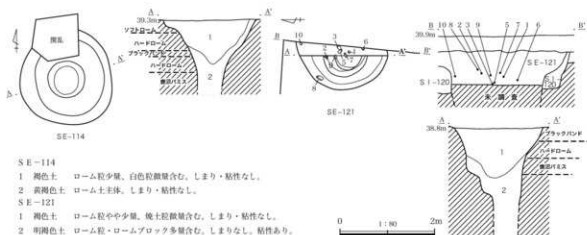
16区の中部にあり、北側がコンクリートによって壊されているが、ほかは良く残っている。径1.95～2.05mの規模で、平面形はわずかに歪んだ円形である。確認面から1m程までは漏斗状に緩やかな傾斜になっており、そこから下は径0.8m程で細くなって急傾斜で筒状になっている。

覆土は、図中2層がローム主体の土であり、埋め戻した土の可能性が高い。

図化した遺物は、覆土掘り下げ中に出土した。2点ともに胎土などの特徴から三義窯産とみられるが、底部技法が明らかに異なっている。1は底部全面回転ヘラケズリ、2は回転糸切り未調整であるが、口径・底径・器高に大きな違いはない。

## 16区SE-121 (第55図、第31表、図版一三・一四・二四)

調査区の北東部に位置する。住居跡と重複し、本井戸の方が新しい。調査区際にあるために、井戸の西半分程を調査したのにとどまる。東壁の土層観察では井戸本体よりも上位掘り方が広がっており、S1-120の土層図A・A'の井戸立ち上がり位置をみると、住居の床面での井戸上場よりも120cm程外側になっている。

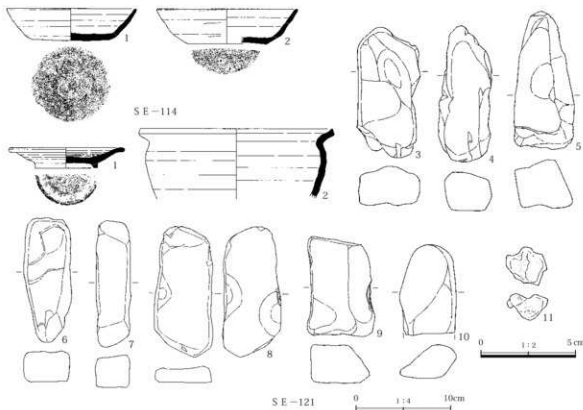


SE-114

- 1 褐色土 ローム粒少量、白色粒微量含む。しまり・粘性なし。  
2 黄褐色土 ローム土主体。しまり・粘性なし。

SE-121

- 1 褐色土 ローム粒やや少量、焼土粒微量含む。しまり・粘性なし。  
2 明褐色土 ローム粒・ロームブロック多量含む。しまりなし。粘性あり。



第55図 16区SE-114・121実測図・出土物実測図

土層図ではこの部分が平たいことから、井戸本体の周囲に平坦部があったことになる。しかし、南部の平坦部幅は0.3m程であり、井戸の正面線などが関係するのであろうか。井戸本体は、住居床面で径2m程であるが、ここから1.4m程下がると径0.6m程になって細くなる。この細さに至る部分にも小さな平坦部がある。深さは、掘り込み上面から3m程まで確認したが、これ以上になる。

遺物は、住居跡の床面より上の高さから多くの遺物が出土し、編物石とみられる棒状の石が多かった。このうち、8は側縁長軸中位に小さな剥離を加えている。9は8よりも幅が広い範囲に側縁剥離を施し、縄掛けの括れ部を作っている。その他の加工痕のない石は編物石であるか不確定ではあるが、提示しておいた。土器では1の須恵器高台付皿は三森窯産で、底部に糸切り痕がある。2の須恵器鉢も三森窯産で、表面を口

クロナデする。11の鉄塊系遺物は、小粒で精錬鍛冶工程のものであろうか。47 m程南側の14区ではほぼ同じ時期の鍛冶関連遺物が出土しており、道路部分の調査のため鍛冶遺構は判然としないが、周囲に鍛冶遺構の存在する可能性が高い。

第30表 16区SE-114出土遺物観察表

No.	器種	大きさ(cm-g)	技法等	胎土	焼成	色調	残存率	注記
1	須恵器 坏	口径:(13.6) 底径:8.4 器高:3.4	内面～体部外面口クロナデ。 底部外面全面回転ヘラケズリ。 三禮座か。	やや粗い、白色細粒多量、白色粗粒やや多量、黒色細粒少量。	良好	内外:灰色	底部完存、 体部1/8	
2	須恵器 坏	口径:(14.6) 底径:(8.4) 器高:3.7	内面～体部外面口クロナデ。 外:底部回転糸切り、体部に粘土接合痕あり。 三禮座。	良好。白色細粒多量、黒色細粒少量、白色粗粒少量。	良好	内:青灰色 外:青灰色・紫褐色	底部～体部 下半2/5、口縁部一部	

第31表 16区SE-121出土遺物観察表

No.	器種	大きさ(cm-g)	技法等	胎土	焼成	色調	残存率	注記
1	須恵器 高台付皿	口径:(12.0) 高台径:(6.6) 高さ:3.1	内面～体部外面口クロナデ。 外:底部回転糸切りの高台貼り付け、口クロナデ。 三禮座。	良好。白色細粒多量、黒色細粒・赤褐色粒少量。	良好	内外:灰色・褐色	底部1/2、 体部1/6、口縁部一部	No.11
2	須恵器 鉢	口径:(20.2)	内外:口縁部～体部口クロナデ。 三禮座。	やや粗い、褐色粒・灰色細粒・黒色細粒多量、白色細粒少量。	良好	内外:灰色	口縁部～体部 上部1/6	No.6
3	編物石	長さ:13.8 幅:6.6 厚さ:4.1 重さ:564.27	短軸断面不整長方形を呈した棒状の石。図中右側面には括弧があり、縄掛け部と考えられる。				完存	No.8
4	編物石	長さ:14.4 幅:5.6 厚さ:4.0 重さ:501.53	短軸断面やや不整な方形で、両側縁に自然による狭れがある。ここに縄を掛けたと考えられる。表面は滑らか。				完存	
5	編物石	長さ:14.6 幅:6.3 厚さ:5.1 重さ:610.87	図中上方が細く、下方が太い。短軸断面菱形・台形を呈した石。図化した上面は中央付近が少し高く、下面は全体に凹凸あり。				ほぼ完存	No.9
6	編物石	長さ:13.1 幅:5.0 厚さ:3.2 重さ:334.65	短軸断面長方形で、図化した面には自然剥離による凹凸がある。表面も長軸下半が剥離しており、段あり。				ほぼ完存	No.15
7	編物石	長さ:13.3 幅:3.7 厚さ:3.4 重さ:313.19	短軸断面方形に近く、棒状の石。図中左側縁がわずかに窪み、図中下部に段がある。窪みに縄を掛けた可能性がある。				完存	No.10
8	編物石	長さ:13.7 幅:6.2 厚さ:1.7 重さ:246.18	板状にチャートが割れたもの。図中左側縁に低い高まりがあり、この裏面には小さな剥離が行われている。				完存	No.4
9	編物石	長さ:10.5 幅:7.2 厚さ:4.0 重さ:535.55	短軸断面台形の石。図中右側縁は裏面から剥離を行っている。縄掛け部であろう。各面は平滑。				完存	No.7
10	編物石か	長さ:9.5 幅:5.9 厚さ:3.5 重さ:254.71	棒状の石が長軸方向で割れている。表面はわずかに褐色になっており、被覆したか。棒状であることから編物石の可能性が残る。				一部	No.1
11	鉄塊系 遺物	長さ:2.0 幅:2.1 厚さ:1.4 重さ:5.87	横断面V字形を呈し、表面滑らかな鉄塊系遺物。土砂が付くが、メタルは放射割れと思われる。				完存	

## (3) 土坑

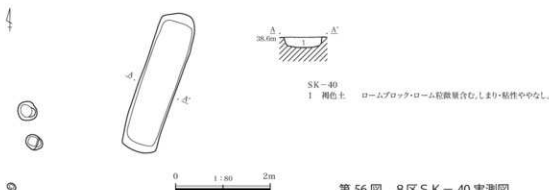
## 8区の土坑(第56・57・59図、第32・33・34表、図版一四・一五・一八)

8区の北部では方形・長方形・円形・楕円形の土坑が多数発見された。大きくグループ分けすると、SK-50から北側とSK-55から南側の一群になるであろう。SK-40のみは、先述の2群と離れた位置で、形態も細長い長方形であって、北部の土坑群と異なっている。

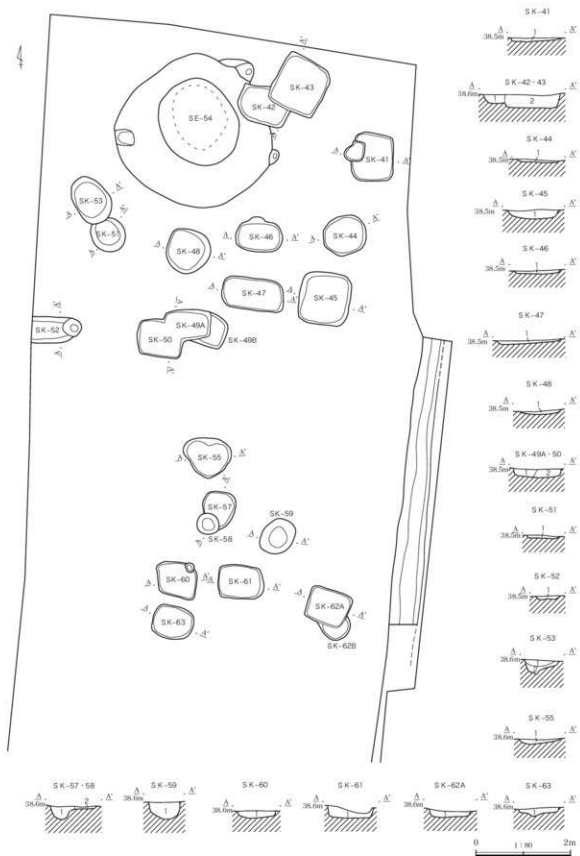
北部の方形土坑は概ね南北・東西方向を向いているが、SK-43・62Aなどはグリッド北から振れた向きに掘られている。土坑からは時期を知る明確な遺物が少ないため、時期を限定することはできないが、中

- 8区
- SK-41  
1 褐色土 ローム粒(径5mm~1cm)多量、黒褐色土粒(径5mm)やや多量含む。しまり・粘性なし。
- SK-42・43  
1 黒褐色土 ローム粒(径1mm以下)微量含む。しまり・粘性あり。
- 2 暗褐色土 ローム粒(径1~5mm)やや少量、ロームブロック(径1cm)少量含む。しまり・粘性あり。
- SK-44  
1 褐色土 ローム粒(径1~5mm)やや少量含む。しまりあり。粘性なし。
- SK-45  
1 暗褐色土 ローム粒(径1~5mm)少量含む。しまり・粘性なし。
- SK-46  
1 暗褐色土 ローム粒(径1~5mm)少量含む。しまり・粘性なし。
- SK-47  
1 暗褐色土 ローム粒(径1mm以下)多量、ローム粒(径5mm~1cm)やや少量含む。しまり・粘性なし。
- SK-48  
1 暗褐色土 ローム粒(径1mm~1cm)やや多量含む。しまり・粘性なし。
- SK-49A・50  
1 褐色土 ローム粒(径1mm~1cm)多量、ロームブロック(径3~5cm)少量含む。しまり・粘性なし。SK-49A  
2 暗褐色土 ローム粒(径1~5mm)やや多量、ロームブロック(径3cm)少量含む。しまりあり。粘性なし。SK-50
- SK-51  
1 暗褐色土 ローム粒やや少量含む。
- SK-52  
1 暗褐色土 ローム粒(径1~5mm)含む。しまり・粘性なし。
- SK-53  
1 褐色土 ローム粒微量含む。しまりなし。粘性ややあり。  
2 暗褐色土 ローム粒やや多量、ローム粒少量含む。しまりなし。粘性ややあり。
- SK-55  
1 暗褐色土 ローム粒(径1mm~1cm)少量含む。しまりあり。粘性なし。
- SK-57・58  
1 暗褐色土 ローム粒(径1mm)やや多量含む。しまりなし。粘性あり。  
2 暗褐色土
- SK-59  
1 黒褐色土 ローム粒(径1~5mm)少量含む。しまりなし。
- SK-60  
1 暗褐色土 ローム粒(径1~5mm)多量含む。しまり・粘性あり。
- SK-61  
1 暗褐色土 ローム粒(径1mm~1cm)多量含む。しまり・粘性あり。
- SK-62A  
1 褐色土 ローム粒(径1mm~1cm)・黒褐色土粒(径5mm~1cm)少量含む。しまりなし。粘性あり。
- SK-63  
1 暗褐色土 ローム粒(径1mm~1cm)やや少量含む。しまり・粘性あり。

## 8区SK-41・42・43・44・45・46・47・48・49A・50・51・52・53・55・57・58・59・60・61・62A・63土層説明



第56図 8区SK-40実測図



第57図 8区SK-41・42・43・44・45・46・47・48・49A・49B・50・51・52・53・55・57・58・59・60・61・62A・62B・63実測図



世の井戸 S E - 54 よりも長方形土坑の方が新しく、土坑群の上限がわかる。

土坑の覆土は S K - 41・47・48・49・50・60・61 などでもロームが多く含まれている。土坑の形態では、方形・長方形などで、これらの土坑は人為的に埋め戻したと判断することができる。S K - 55 からは、ロクロ使用のかわらけが出土しており、中世の所産とする根拠になる。

#### 9～16 区の土坑 (第 58-62 図、第 35・36・37 表、図版八・一五・一六)

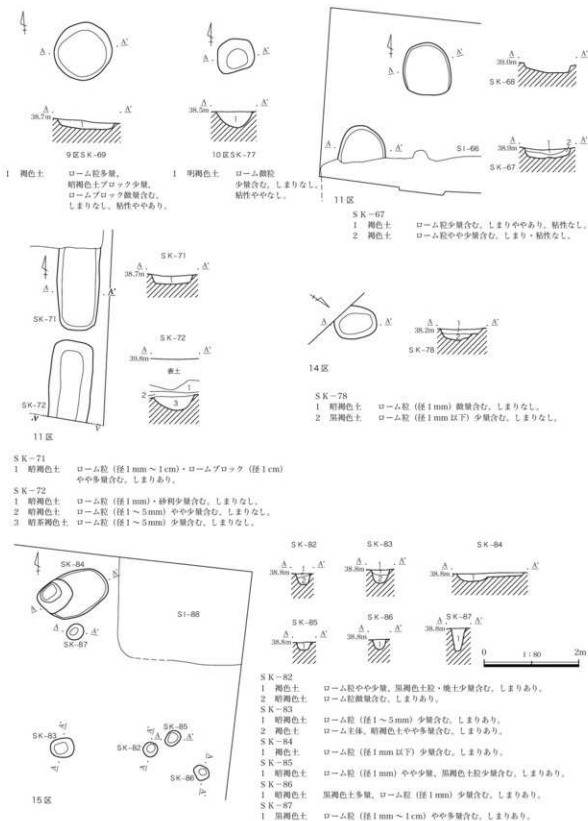
9 区で単独で発見された円形土坑 S K - 69 は人為埋土と判断した。10 区 S K - 77 は単独で発見された土坑で、覆土は自然堆積とみられる。

11 区の北側にある 2 基の円形土坑は、径 1 m 程で、深さも類似する。一方、11 区南側の土坑は平面長方形で、調査区際に並んでいる。両方ともに幅 0.9 m 程で、性格は類似するであろう。S K - 71 の覆土にはローム粒やロームブロックがやや多くて、埋め戻した土と判断される。底面から 5 cm 程浮いたレベルで、椀形鍛冶滓が出土した。本土坑は竪穴住居跡 S I - 66 よりも新しい。

14 区 S K - 78 は南側調査区の南端に位置し、平面楕円形、底部は丸くて、鍋底状の土坑であるが、性格は明らかでない。

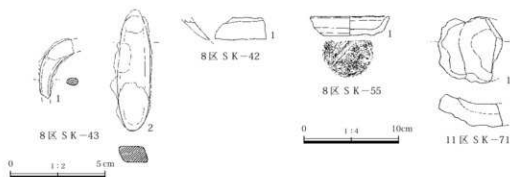
15 区北側でもピット群や平面楕円形の土坑が発見された。楕円形の S K - 84 は 1.4 m × 0.95 m 程の大きさで、北西部が深くになっていた。その他の径 30～50 cm 程のピットは、土層観察でも柱痕が確認できなかった。S K - 87 ではローム粒をやや多く含んでいたことから、埋め戻した土の可能性もあり、柱穴ではないと考えられる。

16 区では平面円形や楕円形・方形・長方形・不整形の土坑が多数発見された。南西部の土坑群は S I - 92 などと重なり、住居跡群よりも土坑の方が新しい。形態では長方形の S K - 89・90、円形の S K - 91・94・95 に分類できるが、覆土の状況では S K - 91 が人為埋土で、その他は自然堆積した土と判断した。S K - 97 は調査区南部にあり、土層観察と平面形でみると、2 基の土坑が重複した可能性もある。S K - 103・124 は調査区北西部にあって、表土・盛土下から掘り込み、不整形の土坑である。S K - 105 は平面円形の土坑で、中に小さなピットがある。覆土は人為的な埋め戻し土と判断した。S K - 108 は調査区北東部に位置し、土層でみると、2 基が重複した可能性がある。3～5 層は埋め戻し土とみられる。S K - 109・110 は近くに位置する平面円形に近い形を呈した土坑である。S K - 109 は埋め戻し土と考えられる。S K - 111 と 125 は調査区北東部にあり、南北方向に長に長方形土坑で、一列に並んでいる。S K - 111 は加工した長方形の石が完全形で出土した。覆土はロームブロックを多く含む褐色土で、埋め戻した土である。現代の土坑とみられる。S K - 125 は覆土にロームブロックやローム粒を多く含み、埋め戻した現代の土坑である。S K - 118 は表土下から掘り込むが、柱痕は不明である。S K - 100・101A・101B・102・104・112・123・113A・106B・106C・107 は調査区北端にある長方形土坑である。長軸の向きも北北東-南南西方向であり、概ね同じ目的で掘られた土坑と考えられる。これらの土坑の覆土はいずれも埋め戻した土と判断される。図化しなかった S K - 101B の覆土は黒褐色土が多くロームブロック(径 2 cm 程)が少量含まれる。遺構確認面での観察では、S K - 101A よりも S K - 101B の方が新しいと判明した。さらに、S K - 106B は S K - 106C よりも新しいことを遺構確認の時に把握したが、S K - 102 と 104 の新旧関係は当初 1 基の土坑とみて掘り下げたために、明らかにできなかった。



第58図 9~15区土坑実測図

第3章 発見された遺構と遺物



第59図 8区SK-42・43・55・11区SK-71出土遺物実測図

第32表 8区SK-42出土遺物観察表

No.	器種	大きさ (cm・g)	技法等	胎土	焼成	色調	残存率	注記
1	瓦質土		内：割離 外：口タロナデ	灰色砂粒少量。	良好	外：外色	体部一部	

第33表 8区SK-43出土遺物観察表

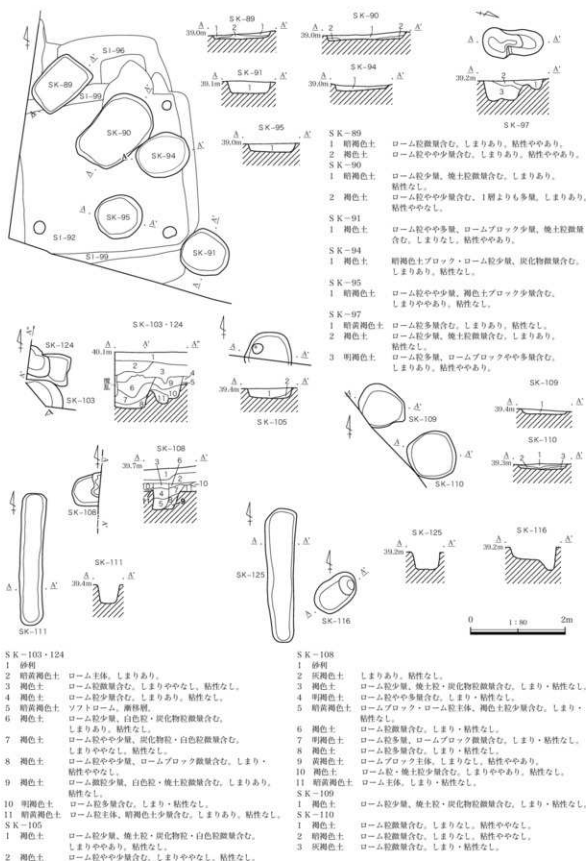
No.	器種	大きさ (cm・g)	技法等	胎土	焼成	色調	残存率	注記
1	不明鉄製品	長さ：3.3 幅：0.5～0.8 厚さ：0.7～0.3 重さ：3.36	短軸断面楕円形で腹中上方が幅広く、下方が細くなり、全体に弧状を呈する。				上下両端欠損	
2	不明鉄製品	長さ：6.0 幅：1.7 厚さ：6.9 重さ：25.41	棒状で長軸両端が丸みを持つ。短軸断面は菱形か台形を呈する。土砂が厚く付く。				完存か	

第34表 8区SK-55出土遺物観察表

No.	器種	大きさ (cm・g)	技法等	胎土	焼成	色調	残存率	注記
1	かわらけ	口径：8.2 底径：5.5 器高：2.0	内面～体部外面口タロナデ。 内：口縁部内面に灯明芯痕あり。 外：底部回転糸切りのち板状圧痕。	黒色細粒・赤褐色粒少量。	良好	内外：明褐色	底部3/5、 口縁部1/2	

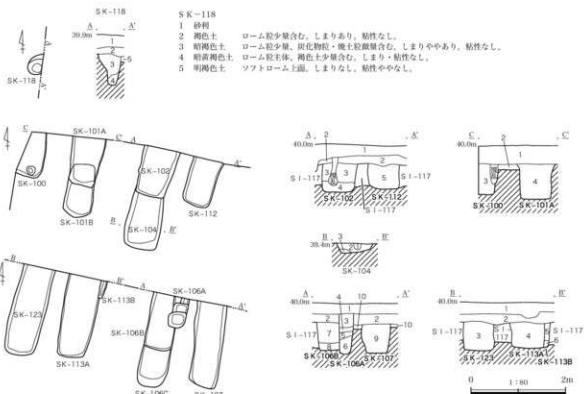
第35表 11区SK-71出土遺物観察表

No.	器種	大きさ (cm・g)	技法等	胎土	焼成	色調	残存率	注記
1	椀形鍛冶滓	長さ：6.0 幅：6.6以上 厚さ：2.8 重さ：214.0	2枚重ねの椀形滓。側面は破面で、気孔あり。上面滑らかで、下面は木炭痕顕著。緻密で重量感がある。			地色は黒褐色。 表面は褐色	一部	



第60図 16区SK-89・90・91・94・95・97・103・105・108・109・110・111・116・124・125実測図

第3章 発見された遺構と遺物



S K - 100・101A

- 1 砂利
- 2 暗褐色土 ソフトローム、しまり・粘性なし。
- 3 明褐色土 ローム粒多量、ロームブロック少量含む。しまりなし、粘性ややあり。
- 4 褐色土 ロームブロック・ローム粒多量含む。しまりややなし、粘性なし。

S K - 102・112

- 1 砂利
- 2 暗褐色土 白色粒・ローム粒微量含む。しまりあり、粘性なし。
- 3 明褐色土 ローム粒少量、ロームブロック微量含む。しまりあり、粘性なし。
- 4 明褐色土 ロームブロック・ローム粒やや多量含む。しまり・粘性ややなし。
- 5 褐色土 ローム粒やや少量、ロームブロック少量含む。しまりややなし、粘性なし。

S K - 104

- 1 褐色土 ローム粒微量含む。しまり・粘性なし。
- 2 褐色土 ローム粒少量含む。しまりなし、粘性ややあり。
- 3 暗褐色土 ローム粒多量含む。しまり・粘性なし。

S K - 118

- 1 砂利
- 2 褐色土 ローム粒少量含む。しまりあり、粘性なし。
- 3 暗褐色土 ローム粒少量、炭化物粒・焼土粒微量含む。しまりややあり、粘性なし。
- 4 暗褐色土 ローム粒主体、褐色土少量含む。しまり・粘性なし。
- 5 明褐色土 ソフトローム上面。しまりなし、粘性ややなし。

S K - 106A・106B・107

- 1 砂利
  - 2 明褐色土 白色粒・ローム粒微量含む。しまりあり、粘性なし。
  - 3 褐色土 ロームブロック・ローム粒多量含む。しまりややあり、粘性なし。
  - 4 暗褐色土 ローム粒少量含む。しまり・粘性なし。
  - 5 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒主体。しまりあり、粘性なし。
  - 6 明褐色土 ロームブロック多量含む。しまり・粘性なし。
  - 7 褐色土 ローム粒やや少量、ロームブロック少量含む。しまりあり、粘性なし。
  - 8 褐色土 ロームブロック・ローム粒多量含む。しまりややあり、粘性なし。
  - 9 褐色土 ローム粒少量、ロームブロック微量含む。しまりなし、粘性ややあり。
  - 10 明褐色土 ソフトローム、
- S K - 123・113A・113B
- 1 砂利
  - 2 暗褐色土 白色粒・ローム粒微量含む。しまりあり、粘性なし。
  - 3 褐色土 ローム粒やや多量、ロームブロック少量含む。しまりなし、粘性ややなし。
  - 4 暗褐色土 ローム粒やや多量、ロームブロック少量含む。しまりあり、粘性なし。
  - 5 暗褐色土 ローム粒多量含む。しまりあり、粘性ややなし。
  - 6 褐色土 ローム粒やや少量含む。しまり・粘性なし。

第61図 16区S K - 100・101A・101B・102・104・106A・106B・106C・107・112・113A・113B・118・123実測図



第62図 16区S K - 105・118出土遺物実測図

第36表 16区SK-105 出土遺物観察表

No.	器種	大きさ (cm-g)	技法等	胎土	焼成	色調	残存率	注記
1	土師器 杯	口径: 6.5	内: ロクロナデ、黒色処理、底部二方向ヘ タミガキのち体部にヘタミガキ。 外: 体部ロクロナデ、底部回転糸切り。	良好、白色細粒少 量。	良好	内: 黒色 外: 灰褐色	底部2/3	

第37表 16区SK-118 出土遺物観察表

No.	器種	大きさ (cm-g)	技法等	胎土	焼成	色調	残存率	注記
1	須恵器 杯	口径: (12.4) 底径: (6.2) 器高: 3.4	内面へ体部外面ロクロナデ。 底部外面回転糸切り。 三稜座。	黒色細粒・白色細 粒少量。	良好	内外: 灰色	体部下半 1/6、体部上 半一部、底 部1/3	
2	須恵器 杯	底径: (6.4)	内面へ体部外面ロクロナデ。 底部外面回転糸切り。 三稜座。	良好、灰色細粒多 量、黒色細粒・白 色細粒少量。	良好	内外: 明灰色	底部1/4	

## (4) 道路側溝 (第63図、第38表、図版一六・一七)

8区から10区において、現在の道路に平行してのびる溝が発見された。8区では東西方向に佐野市道堀米67号線、南北方向には県道151号堀米停車場線か、市道・県道となる前の在来道の側溝と判断された。8区の南東隅でL字形に曲がっており、現道と同じ形状であることから、同時に併存していたと考えたい。

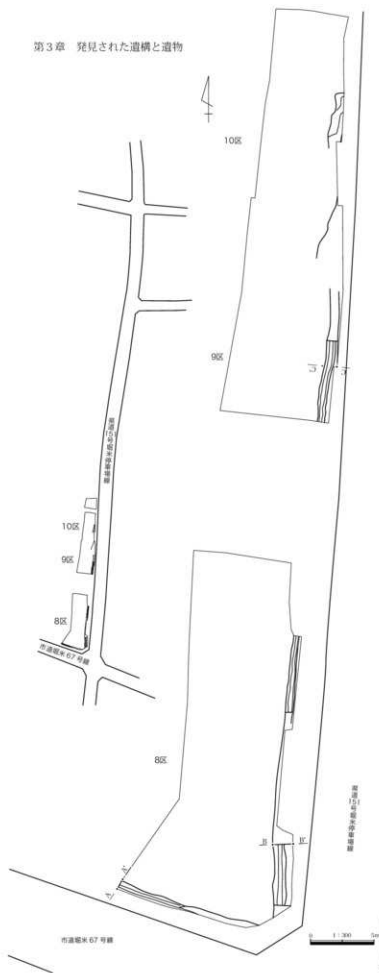
8区の東西側溝は、溝の北縁を調査したのにとどまり、幅70cm以上になる。断面観察した結果、西半分では4回の掘り込みがあり、東半分では1回のみであった。土層図A-A'に示したように、1回目はロームを掘り込み、5層が堆積する。2回目は4層外縁まで掘り込み、3回目は3層外縁まで掘り込む。このため、徐々に道路側に側溝が寄っていったことがわかる。4回目は2層外縁・底面まで旧側溝に溜まった土を浅く掘り込む。側溝機能停止後に表土1層が堆積する。側溝の覆土は3～5層で砂質土であったことから、水が流れていた可能性もある。側溝の底面は西側に向かって低くなっており、水流方向が推定できる。

南北側溝は、8区から10区では現県道よりも1m近く西側にあり、道路も少し西側に走っていた可能性がある。現在県道は少し蛇行してのびているが、以前はもう少し蛇行していたと考えられる。8・9区において、確認面での側溝幅は50～70cm程であり、9区の北部から10区では側溝が蛇行気味であるが、視乱が及んでいることにもよる。土層図B-B'では側溝幅95cmに達し、底面にも段があり、2層に区分できることから、最低2回は溝を掘っていることがわかる。さらに、図中3層は小砂利を含む灰褐色土で、しまりが無い土層であるが、道路造成時の最下層土の可能性もある。水路と判断できる砂粒などの堆積層は確認できなかった。空の側溝であったと想定できる。

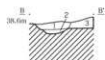
10区の北部より北側では、調査範囲に側溝が確認できなかったことから、現県道とほぼ同じ位置に道が敷設されていたと思われる。

第38表 8区南北道路側溝 出土遺物観察表

No.	器種	大きさ (cm-g)	技法等	胎土	焼成	色調	残存率	注記
1	火鉢		内: 赤褐色の釉薬す。 外: 体部ロクロナデ、底部脚すり付け。煤 附着。	やや良好、白色細 粒・透明細粒・黒 色細粒少量。	良好	内: 明赤褐色 外: 明褐色・黒 褐色	体へ底部一 部	



8区 東西道路側溝



8区 南北道路側溝



9区 南北道路側溝



8区

東西道路側溝

- |          |                            |
|----------|----------------------------|
| 1 褐色土    | 表土                         |
| 2 灰褐色土   | 砂質、小石含む。しまり・粘性なし。          |
| 3 灰褐色砂質土 | しまり・粘性なし。                  |
| 4 灰褐色砂質土 | ローム粒少量含む。しまり・粘性なし。         |
| 5 灰褐色砂質土 | ローム粒少量。4層よりも多く含む。しまり・粘性なし。 |

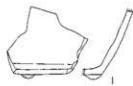
南北道路側溝

- |        |                           |
|--------|---------------------------|
| 1 灰褐色土 | ローム粒微層含む。しまりあり。粘性なし。      |
| 2 灰褐色土 | 1層よりもローム粒多量含む。硬くしまる。粘性なし。 |
| 3 灰褐色土 | ローム粒・小砂粒少量含む。しまりなし。       |

9区

南北道路側溝

- |         |                           |
|---------|---------------------------|
| 1 暗灰褐色土 | しまりややなし。粘性ややあり。           |
| 2 暗灰褐色土 | ローム粒微量含む。しまりややなし。粘性なし。    |
| 3 暗灰褐色土 | ローム粒・炭化物粒微量含む。しまり・粘性ややあり。 |



8区 南北道路側溝



第63図 8・9・10区道路側溝実測図・出土遺物実測図

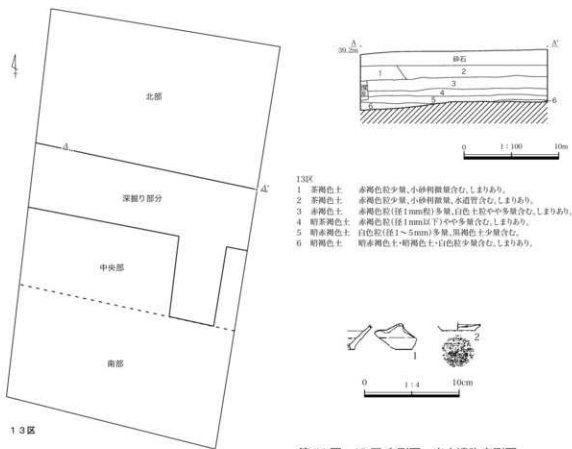
## (5) その他の遺構・遺物 (第64～66図、第39表、図版一七)

13区では、3回に分けて調査を実施した。1回目は調査区北側1/3を掘り下げ、土層2層下面で遺構確認を行った。2回目は南北中央の1/3、3回目は南側1/3で、2層下面で遺構確認を行った。

その結果、1回目の調査地で遺構確認面としていたローム層が表土除去後もみられなかったので、2回目は深掘りを行った。土層は、表土の下に茶褐色土や赤褐色土が堆積しており、その下に暗茶褐色土・暗赤褐色土・暗褐色土が堆積していた。この部分では竪穴住居などの遺構は見えず、図示したようなかわらけの破片が得られたのみである。5層でみられた白色粒子は火山灰F Aの可能性もある。表土から1.4m程掘り下げたが、他の調査区で遺構確認面としていたソフトローム層は確認できず、本調査区の部分が東西に低くなっていたことが判明した。地元の方の話では、この部分は以前水田であったといい、この西側は現在も周囲よりも低くなっている。遺跡ののる台地は南北にのびるが、台地の中に東西にのびる小支谷があり、現在は埋没谷となっていたことが明らかになった。

図化した遺物は、出土した層位が明らかではないが、掘り下げ中に出土した中世のかわらけである。2点ともにロクロを使用し、2の底部には回転系切り痕と板状圧痕が観察される。

16区ではS I - 119で黒曜石の剥片が出土したので、その周囲について、ロームを掘り下げて旧石器時代の調査を行った。グリッドは、現在の渠道の南北方向の幅杭に平行にして、南北軸を設定した。2m方眼のグリッドとしたが、古代の竪穴住居跡が密集し、ロームを掘り下げたのはS I - 119の東側と南側である。また、地域住民への見学対応などのために、住居跡の壁などを残しておくことが要請されたので、掘り下げた範囲は様々な制約を受けることになった。



第64図 13区実測図・出土遺物実測図

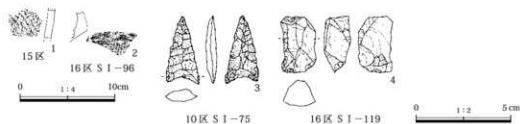


第39表 13区出土遺物観察表

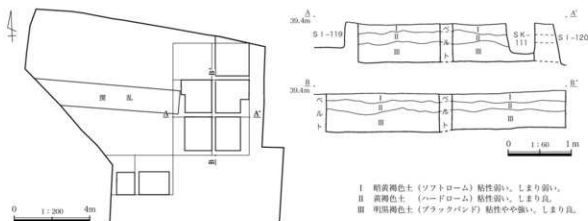
No.	器種	大きさ (cm・g)	技法等	胎土	焼成	色調	残存率	注記
1	かわらけ		内面～体部外面クロナダ。 底部外面不明。	良好。赤褐色細粒微量。	不良	内外：乳白色	底部～体部一部	
2	かわらけ	底径：3.6cm	内：ナダ、底部・体部境沈線あり。 外：体部クロナダ、底部回転糸切りのち板状圧痕。	良好。黒色細粒少量、白色細粒・赤褐色細粒微量。	良好	内外：乳褐色	底部完全	

掘り下げは、ブラックバンドの堆積層まで行ったが、旧石器時代の遺物などはこの範囲から出土しなかった。他の地点が調査区外に存在する可能性も残るであろう。

縄文時代の遺物が少数であるが、調査区から出土した。1は出土遺構不明であるが、胴部に単節縄文RLを横方向に施文する。2は16区S I-96から出土した破片で、外面には単節縄文RLを縦方向に施文し、中期後半から後期前半頃の所産とみられる。3は10区S I-75から出土した石鏃である。両面ともに押圧剥離を丁寧に行い、基部は抉れている。チャート製で、重量2.7gである。4は16区S I-119で出土した黒曜石で、剥離痕が長軸側面全面にみられる。縄文時代の本遺跡は、居住空間としての集落ではなかったが、石鏃が単体で出土するように狩り場のような生活・生業に係わる場であったと考えられる。



第65図 縄文時代の遺物実測図



第66図 旧石器調査位置と土層

## 第4章 総括

### 第1節 堀米遺跡の古墳時代後期から平安時代の土器変遷 (第67・68図)

ここでは、今回の調査で出土した土器について、その変遷をみていきたい。本来これまでの本遺跡で出土した全体的な変遷も含めてみるべきであるが、今回調査分のみを扱い、時期ごとに説明していく。佐野市内の遺跡(小島 2002)や栃木県域で当該期の編年も行われており(津野 1995・1996、山口 1999)、年代観については、これらに従っておきたい。

#### 1期

S1-66の土器群が代表的な資料である。土師器環は、口縁部が外傾するもの(1)と内傾するもの(2)、内彎するもの(4)などが主体となっており、有段口縁の環(3)は出土数が少なくて、客体的な存在である。内傾する環の口縁部は、比較的長くなっている点の特徴である。3の胎土は他の土器群と類似しており、他の地域からの搬入品ではなくて、この周辺で製作されたものと推定することができる。環の口径は12～13cm前後であり、共通しているが、変遷図の4のように口径がやや大きなものも存在する。底部の形態では、2や3のように丸味の強いものと1のように平底気味のものがある。平底気味で口縁部が長く伸びる形態は、佐野・足利地域に多くみられるものである。なお、内彎環(4)のみ内面にミガキが行われていた。球胴甕(9)は頸部の窄まりが少ないが、胴部・頸部の境が明瞭に認められる。頸部に沈線が2条巡っており、中村岳彦氏による有段口縁甕に相当する(中村 2016)。長胴甕は胴部が弓状に張りのある形態(10)と器厚が薄くて、張りがなくて細長い円錐状に窄まっていく形態(11・14)がある。胎土はいずれも黒色細粒を含むなど類似している。一般に埼玉県北部などでは胴部が細い長胴甕が卓越するが、胎土が類似している事実から、この地域で製作された他地域系の長胴甕とみておくべきであろう。この時期の甕類の器種としては、小型甕(6・7)、球胴甕(9)、長胴甕(10・11・13・14)などからなる。甕(12)は孔径の小さな小型品である。当該期には器高30cmにも及ぶ大型甕が一般的であるが、逆円錐形の小型甕は少ない資料である。須恵器甕(8)は、内面に同心円の当て具痕を残す胴部片を提示した。同心円にスリットの入るものである。

時期は土師器の環・甕の形態から津野編年のV期(7世紀前葉)や小島編年7世紀前葉の土器に類似しており、この時期に比定できるであろう。

#### 2期

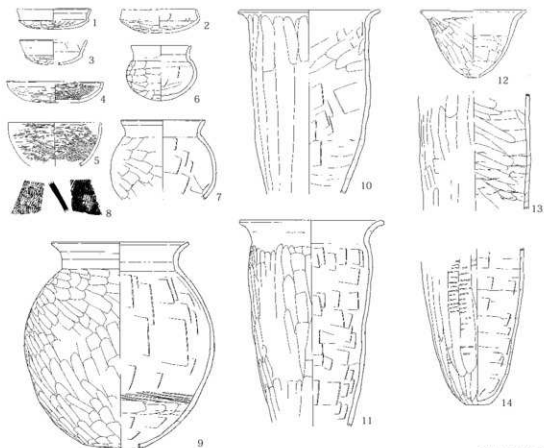
この時期の資料はS1-93・96・122を代表事例として挙げておく。土師器環は、口径が10cm前後のものが多くみられる(15～17)。口縁部の形態で、15～17は直立、18は外反する。内傾する資料は今回の調査や近年の佐野市教育委員会による本遺跡の調査では確認できないが、昭和51年刊行の『堀米遺跡』掲載の6号住居跡において、当該期に位置付けられる口縁部内傾の環が確認できる。直立口縁の環は、口縁部が長く伸びる形態で、16のように底部が扁平気味になっている。典型的な事例は昭和51年報告の11号住居跡出土環(報告の第18図112)を挙げることができるであろう。

土師器甕のうち、球胴甕(22)は口縁部から頸部の屈曲が緩やかになり、内面の稜もなだらかに変化する。23は1期の7の器種を引き継ぐもので、頸部の窄まりが少なくなっていることがわかる。長胴甕(21)は口縁部が長く伸びて頸部の括れが明瞭である。口唇部は窪まないが平坦気味になっている。前掲の中村氏がこの時期の長胴甕について、「有段口縁甕」・「口端部が凹字状の長胴甕」・「粗雑な作りの長胴甕」に分類・系列化している。この分類によれば21の甕は口端部が凹字状の長胴甕に近い形態になるであろう。この系列の長胴甕は、当該期には胴部が張らずに、直線状になることから、位置付ける根拠となる。類品は昭和51

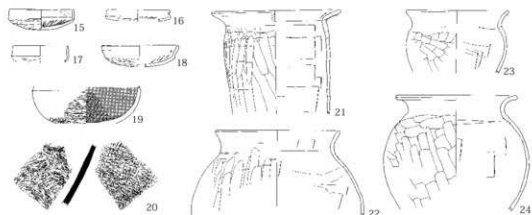
年報告の10号住居跡出土土甕(報告の第19図105)がある。長胴甕の口縁部には粘土が貼り付けられており、補修品で、この近傍で製作した可能性がある。

鉢(19)は内面黒色処理して、内外面にミガキを加える。7世紀中葉における黒色処理はこの地域において数少ない。須恵器甕(20)は、胴部外面に格子叩きの後に回転カキ目を施す。

時期は、土師器環の口径が小さくなって、10cm前後が主体になっていることから、津野編年のVI期、小島編年の7世紀中葉の土器類に類似しており、本期は7世紀中葉としておきたい。



1期(7世紀前葉)

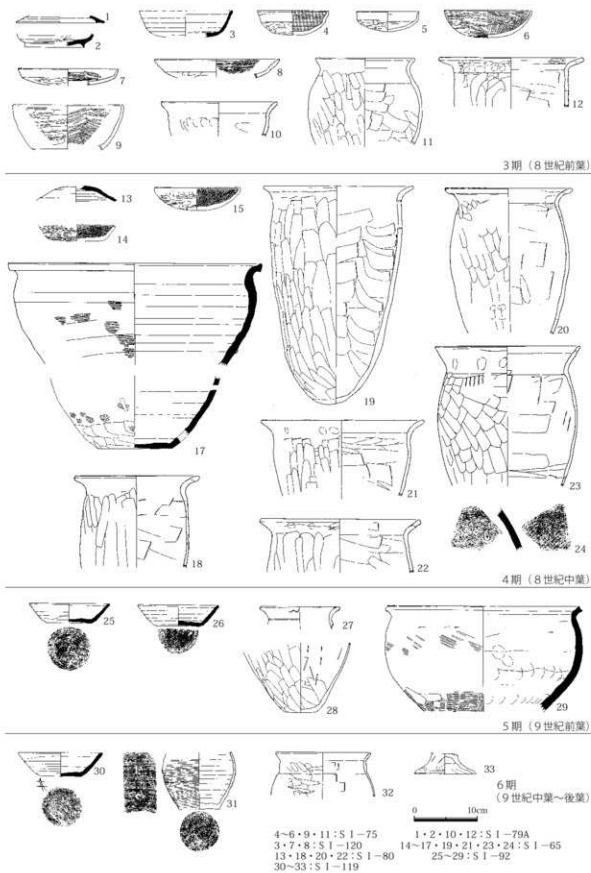


2期(7世紀中葉)

1~7・9~11・13・14:S1-66  
 15・18・24:S1-93  
 8:S1-74  
 16・17・19・20:S1-122  
 12:S1-64  
 21~23:S1-96

0 10cm

第67図 堀米遺跡土器変遷図(1)



第68図 堀米遺跡土器変遷図(2)

## 3期

本期の特徴は、食器類に須恵器の坏・高台付坏・蓋が一定数出現することである。S I - 75・79A・120を代表的な資料として挙げておきたい。1の蓋は内面にかえりがあり、2の高台付坏の高台は断面三角形で長く発達しない。底部内面はロクロナデとともに指ナデを施している。このような特徴の須恵器は三義山麓窯跡群の北山窯や八幡窯にみられ、時期的にも限定されたものとなっている。

土師器坏は、S I - 75で良好な資料が得られた。口縁部は内彎口縁であるが、直立気味のものも存在する。この遺構から出土した内彎口縁坏はいずれも内面にミガキを施さない。この点で6などのミガキを施す土器群と対照的である。これらは漆仕上げを行うことも特徴となっている。丸底の坏(6)は内面を連弧状にミガキを行うが、S I - 75では放射状にミガキを加えるものも確認できた。これらの椀形の丸底坏は色調が赤褐色や橙色・明褐色を呈しており、内彎口縁坏と対照的である。栃木県の県東部において、比較的多く確認できる坏であり、本遺跡は分布の周縁部にあたるであろう。

土師器皿は口径16～20cm前後で、口縁部が外傾する(7・8)。これらは内面に丁寧にミガキを加えるもので、色調も椀形でミガキを施す坏と類似している。9の椀も明褐色を呈しており、ミガキを施す。小型の球胴甕(11)は、緩やかに頭部が折れており、前の時期と同じ形態である。長胴甕(12)は、前の時期と同じく頭部がくの字形に折れて、口縁部は直線状にのびて、口唇部は平坦になっている。中村氏による4段階の口端部が凹字状の長胴甕になるであろう。この長胴甕も口縁部外面に接合用の粘土が付いている。前の時期の21のように製作修理痕であり、この周辺で製作されたものであろうか。

時期は、北山・八幡窯に類似する資料があることから、7世紀末から8世紀初めを含む。S I - 120では丸底で、底部手持ち鬚削りの小型の坏が出土しており、三義窯では古江浄琳寺裏山窯跡で近似する時期に生産が行われている。このため、一部7世紀後葉を含むが、8世紀前葉として幅をもたせておきたい。

## 4期

S I - 65・80出土品を代表的な事例とする。須恵器蓋(13)はつまみの接着方法が、天井の中心部を窪ませて別につまみ下の突出粘土を挿入している。この方法は和田窯などでみられる。土師器はロクロ非使用の丸底の形態とロクロ使用の平底のものが存在する。前者は口縁部が内彎する椀形で、内面黒色処理する珍しい技法である。黒色処理は、一般にロクロ土師器坏にみられることから、ロクロ新技法の製作集団の中で、旧来の非ロクロの坏に新技法が導入されたと評価できようか。技法変換期の新旧技法の混濁といえるであろう。

土師器甕は前代のように分類できる。口端部が凹字状の長胴甕は22であり、粗雑な作りの長胴甕は18～21、武蔵型もしくは上武系甕(池田2009)が23である。図化できた資料の数からみると、粗雑な作りの長胴甕が多くて、口端部が凹字状の長胴甕や武蔵型・上武系甕は少数であった。この点は本期よりも少し古い時期であるが、前掲中村氏が安蘇郡域でも中・北部で粗雑な作りの長胴甕が多くて、市城の南東部において口端部が凹字状の長胴甕が多いという傾向に一致する。本遺跡に比較的近い人丸神社裏遺跡でも粗雑な作りの長胴甕が多い。地域的な傾向が8世紀中葉でも継承されていることを反映するのであろうか。なお、粗雑な作りの長胴甕は池田敏宏氏が注目した鶴田中原タイプ甕(池田2000)の遡源的なものとも考えられる。津野はこの類の甕の遡源を追求したが(津野2007)、安足地域については検討しなかった。県内では遡源的な形態が、河内・芳賀・那須地域において8世紀前葉から外反口縁やくの字状口縁のものが9世紀以降にまで続いている。この系列の時間的な組列、及び空間的な分布の確認は今後の栃木県域の古代における在産土師器をみていく上で課題となる。

時期は、非ロクロの土師器丸底環とロクロ環が共存しており、武蔵型・上武系甕の頸部が内面に稜をもって、くの字に折れている点が多功南原遺跡の4期（山口1999）、金山遺跡Ⅸ期（津野1996）などの様相に類似していることから、8世紀中葉頃とみておきたい。

#### 5期

S I-92を代表的な事例とする。須恵器環(25・26)は三義窯産で、底径7～8cm、底部回転系切り未調整である。窯資料では、寂光沢3号窯で底径6～9cm、外周手持ち脆削りが主体で、系切り未調整も少数ある。寂光沢2号窯では底径7～8cm、系切り未調整が増加する。器高さでは3号窯で3.3～4.2cmが主体であり、S I-92の環は、3号窯の環と比較すると器高の低い部類になる。これらの点から本期は寂光沢3号窯（8世紀第4四半期後半から9世紀第1四半期）と2号窯（9世紀第2四半期、津野2011）の両者の傾向を合わせ持ち、9世紀前葉とみておきたい。27の土師器小型甕は口縁部に波状文を描いている。28は武蔵型・上武系甕であろう。

#### 6期

S I-119を代表的な資料とする。須恵器は三義窯産で、環の口径は13～14cm前後、底径5～7cm前後であり、底部は回転系切り未調整である。窯資料では大芝原B地点のものに類似しており、9世紀後半か、中葉から後葉の所産と判断しておきたい。武蔵型・上武系甕(32)は口縁部がコの字形をしている。33は台付き甕の台部である。また、この時期の稀少な資料として、ロクロ使用の小型甕(31)を挙げられる。この甕は、内面のロクロ目のシャープさからみてロクロ挽きである可能性もある。これを証するように内外面に粘土紐の巻き上げ痕が確認できない。外面は木口で回転力を目調整をしている。胎土に黒色細粒や赤褐色粒を含み、他の土器群と類似しており、在地産といえるであろう。

## 第2節 堀米遺跡の遺構変遷（第69～71図、第40表）

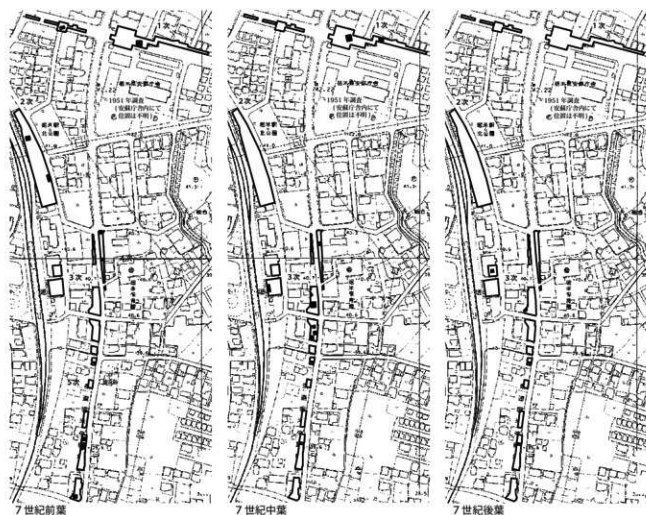
ここでは、土器編年をもとにして、これまで佐野市教育委員会が調査されてきた堀米遺跡の調査成果を含めて各時期の竪穴住居の分布をみていきたい。これまでの調査は、限られた線的な範囲であり、今後の調査で集落の全体動向に変更が出てくる可能性もある。このため、現段階での傾向把握としておきたい。

### 7世紀前葉

堀米遺跡に集団が移住して、古墳時代後期の集落が始まる。南北に長い調査地で、広範囲に竪穴住居が作られる。1次調査区では一辺5m程で中型の8号住居跡、この時期では小型に分類される13号住居跡があたる。8号住居跡の土器は、平底気味で口縁部が長くて、この地域に特徴的な土器を用いており、甕も器厚の厚い土器（報告第18図88）であり、これも在地的なものである。このため、遺跡北部の集団は在地的な

第40表 堀米遺跡竪穴住居跡の時期

時期	1次(51年報告)	2次『堀米Ⅱ』	3次『堀米Ⅲ』	4次『堀米Ⅳ』	5次(本書報告)
7世紀 前葉	8・13号住居跡	S I-01・06		S I-03・04	S I-64・66・74
中葉	6・11号住居跡		S I-5	S I-05・08・10・13	S I-93・96・99・122
後葉			S I-2・3・4	S I-07・09	
8世紀 前葉	3号住居跡		S I-2・3・4		S I-75・79A・120
中葉	14号住居跡				S I-65・80
9世紀 前葉	2・12号住居跡				S I-92
中葉	4・5・18・19号住居跡				S I-79B・117・119
後葉	9・10号住居跡			S I-06	S I-79B・117・119



第69図 堀米遺跡遺構変遷図(1)

土器を交易して消費していたようである。一方、本報告分の5次調査地の土器は、11区S1-66で、器厚の厚い長胴甕や底部の扁平気味な土師器杯もあって、同様に在地的な土器を使用している。しかし、器厚が薄く、細長い円錐状に窄まっていく形態の甕や有段口縁杯もある。この甕や杯は埼玉県城などで一般的な形態であり、この地域からの影響も受けた土器も使用している。限られた調査地であるが、この時期にも南端の集団と北端の集団で異なった系譜の土器を使用していたようである。

生業を反映する遺物では、4次調査地S1-03で長頭鎌が出土しており、狩猟していたと想定できる。なお、今回報告の13区には東西に埋没谷が流れており、集落が開始された時期にも遺構が確認されなかったことから、谷が入っていた可能性が高い。このため、厳密には埋没谷から北側と南側では別な集落の可能性もあるが、可能性を指摘するのにとどめ、今後の調査で明らかにされたい。埋没谷の位置では、9世紀まで遺構が確認されなかったことから、地形が同じようであったとみられる。

#### 7世紀中葉

北部の1次調査地、中央部の3・4次調査地と今回の調査地北部において、この時期の竪穴住居跡が発見された。住居の分布をみると、遺跡中央部において前の時期に比較して格段に住居が多くなっている。埋没谷から南側の今回調査地(5次)では、住居が確認されていない。土器の系譜では4次調査のS1-10・13で細長い円錐状の長胴甕がまとまって出土している。在地系の扁平な土師器杯は16区S1-93・96など



第70図 堀米遺跡遺構変遷図(2)

で出土しており、遺跡中央部の集団では他地域系譜の長胴甕や在地系の土師器環などを組み合わせて用いている。また、4次調査S1-08では壱筋式の長頸甕が出土しており、前時期と同じく狩猟を行っていたようであり、今回調査地(5次)16区S1-93では覆土中からであるが、編物石がまとまって出土した。このため、中央部の集落では狩猟や蓆編みを行っていたようである。近隣で、秋山川の西岸にある寺之後遺跡S1-11において、竪穴住居跡の隅から保管した状態で編物石が出土した(本報告第6図)。しかし、編物石は集落で出土しない遺構もあることから、全ての集団で蓆生産を行っていたのではなく、漁労のように地勢的な特性に左右されないが、比較的狭い地域内において集団間で生産差があり、交易を行っていたと推定される。

#### 7世紀後葉

この時期の住居は少なく、4次調査地で2軒確認されたが、遺跡中央部の集団が継続して居住していることになる。2軒は重複していることから、単一時期では1軒となる。また、3次調査地で、S1-2・3・4は7世紀後葉から8世紀前葉頃であるが、分別できなかった。S1-4では編物石がまとまって出土し、前後の時期のように小規模な蓆生産を行っていた。

#### 8世紀前葉

この時期以降は、調査回数では1次と今回報告の5次調査地で竪穴住居が発見されている。今回報告分



も13区の埋没谷の南北に遺構が散在する程度である。10区S1-75は、竈の付かない小型の竪穴遺構であり、一般の住居とは明らかに異なっている。遺構の性格は特定できなかったが、集落に付属する住居とは別な用途の建物であろう。遺物では三義窯の須恵器を多く使用している。一方、土師器には14区S1-79A出土裏の口縁部に補修粘土が確認できたことから、近傍で土師器生産を行っていた可能性がある。須恵器については、本遺跡から東に3~4キロ離れた三義山麓からの交易品を購入し、近傍で煮沸用の長胴甕を生産した様子が想定できる。なお、S1-79A・120では編物石の可能性のある細長い石が出土している。小規模な席生産を行っていたとみられる。

#### 8世紀中葉

前の時期と同じく1次調査地と今回調査の5次調査地埋没谷の南北に竪穴住居が3軒確認された。前の時期の集団が居住位置を少し移って定着していたと考えられる。消費財で、土師器裏は9区S1-65で武藏型・上武系裏と在地系の裏が混在している。各地から土師器を交易・購入していたとみることができる。次の8世紀後葉の竪穴住居は、各調査地でも確認できなかった。限られた範囲の調査であり、今後の調査でこの時期の遺構が発見される可能性もある。

#### 9世紀前葉

遺跡北端の1次調査地と中央部の今回調査(5次)、16区で竪穴住居が確認され、散在した建物景観が続く。



第71図 堀米遺跡遺構変遷図(3)

消費財の坯は土師器よりも須恵器が大半であり、この時期に三義窯の製品が量産され、交易していたと考えられる。土師器裏は武蔵型・上武系裏が確認された。近距離での交易品である須恵器と比較的離れた地域の生産品である土師器裏を組み合わせた消費財の様子がわかる。16区S I - 92では秤の権衡と砥石を再加工した未成品が出土した。両者の材質は類似しており、使用後の置き砥石を、この集団が再加工していたと考えられる。未成品は勾玉状に削っており、集落での消費財のサイクルとその組織などを考えるうえで参考になる。

#### 9世紀中葉

中葉になると、北部と中央部において前の時期とほぼ同じ位置で竅穴住居が増加する。北部の1次調査地の5号住居跡は、この時期としては大きな竅穴になる。今回調査分(5次)の3軒は、中葉から後葉で時期区分ができなかったため、中後葉とした。この時期には、鍛冶滓などが出土しており、小規模・短期間の集落内鍛冶が行われていたが、鍛冶遺構は発見されなかった。

#### 9世紀後葉

遺跡の北部・中央部に散在して竅穴住居が確認できた。北部の9号住居跡からは平瓦が出土し、この瓦は型押文が国分寺251で、富士町のゼニコ沢窯で生産したもので、8世紀後半の所産になる。国府・薬師寺・国分寺・尼寺で出土し、本遺跡の出土遺構の時期と1世紀程異なっている。窯から本集落に持ち込んだか、上述の官衙・寺院に番上した際に持ち帰った可能性がある。10号住居跡の土鍾は細長い小型品で、秋山川で小型の魚、アユ・フナ・ウグイなどの刺し網に用いられたとみられる(佐々木2016)。本遺跡における土鍾はこの事例に限られ、網漁が盛んに行われてはいなかったが、小規模な漁をしていたとみられる。この時期をもって、堀米遺跡に居住した集団は移住し、古代集落が鞍馬を迎える。

### 第3節 堀米遺跡と鉄生産

堀米遺跡では、14区S I - 79B・16区S E - 121から鉄塊系遺物や羽口が出土し、この遺構の時期は出土した遺物から9世紀中後葉の所産と判断された。また、11区と14区南部では椀形鍛冶滓が土坑内や表土(包含層中)から出土した。これらにより、鍛冶遺構は発見されなかったが、14区周辺で鍛冶が行われていたことが判明する。そこで、この時期の鍛冶遺構がどのような動向のもと操業されたのか、その性格を含めて、栃木県内の鍛冶遺構や鍛冶を含めた鉄生産関連遺物が出土した遺跡の様相を時期的に追って行き、本遺跡の鍛冶について、地域内での位置付けを試みる。なお、県内全域の製鉄については鍋木理広氏がまとめており(鍋木1997)、これに一部依拠する。

#### (1) 県内の鍛冶遺構(第72・73図)

時期 県内における古代の鍛冶遺構は、23遺構発見されている(註1)。これらを出土した土器類をもとに遺構の時期を推定すると、最も古いものは9世紀前葉の上三川町調査の多功南原遺跡の鍛冶遺構である。9世紀中葉に県内の鍛冶遺構は格段に多くなり、15遺構を数える。このうち、10遺構は小山市金山遺跡である。金山遺跡は、この時期に明瞭な鍛冶遺構が集中して出現し、その次の時期には消える特徴がある。9世紀後葉には5遺跡で確認されている。この数は9世紀中葉から減っているが、金山遺跡を除くとほぼ同じ数であって、9世紀代に鍛冶遺構が多くなった点を確認しておきたい。10世紀になると、鍛冶遺構の数は減少して、後半に大志白遺跡群と寺平遺跡で確認できたのみである。

全国的な視点から古代の鍛冶遺構を検討した安間拓巳氏によると、竅穴遺構の鍛冶工房は9世紀になって

9世紀前半

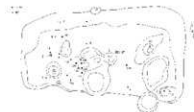


多功南原遺跡 鍛冶場址

9世紀中葉



温泉神社北遺跡 第1号鍛冶遺構



大志白遺跡群 S1-14



谷前野東遺跡 A地区 C1-S1002



下野国分尼寺跡 第1次 S1-122



金山遺跡 田区 S1-022



金山遺跡 IV区 S1-036



金山遺跡 V区 S1-004B



金山遺跡 V区 S1-010



金山遺跡 V区 S1-025



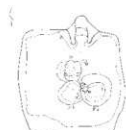
金山遺跡 V区 S1-110B



金山遺跡 V区 S1-128B



金山遺跡 V区 S1-147



金山遺跡 VII区 S1-012



金山遺跡 VII区 SK-231



澁ノ台遺跡 第1号鍛冶遺構

0 1:150 2m

9世紀後半



澁ノ台遺跡 第34号住居跡

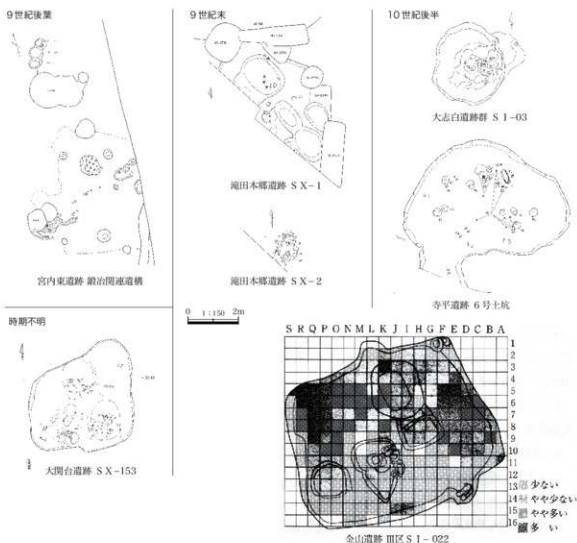


澁ノ台遺跡 7号住居跡



北原遺跡 S1-1250

第72図 栃木県内における古代鍛冶遺構



第73図 栃木県内における古代鍛冶遺構と鍛冶関連遺物分布

増加することが指摘されている(安間 2007)。栃木県内の竪穴の鍛冶遺構も9世紀中葉・後葉に多いことから、東日本の動向に沿って築かれたものと推定することができる。

**鍛冶遺構の形態** 形態では大きく方形・長方形や隅丸方形のものと不整形に分類できる。方形は金山遺跡V区S I-010やVII区S I-012、溜ノ台遺跡第34号住居跡などが挙げられる。長方形は金山遺跡III区S I-022や大志白遺跡群S I-14などである。隅丸方形は金山遺跡V区S I-128B・147など、不整形は多功南原遺跡鍛冶場址・大志白遺跡群S I-03・寺平遺跡6号土坑などである。

**竈** 鍛冶遺構には竈が付くこともあり、従来は竈の有無や方形か竪穴住居と異なった形態であるかが鍛冶専用工房か住居兼用工房の違いと推定されてきた(中島 1996・安間 2007)。栃木県内の鍛冶工房でも、竈の付く工房は方形や長方形など形の整った場合が多い傾向がある。谷館野東遺跡や溜ノ台遺跡第34号住居跡及び金山遺跡の諸例である。竈が付かない遺構では大志白遺跡群S I-03や寺平遺跡6号土坑などのように不整形の場合が多い。この点では上述のような見解が支持される。しかし、県内でも短期間であるが、精錬・鍛錬鍛冶を主体にして鍛冶工房を集約化した金山遺跡で竈をもつ方形・長方形の遺構が一定数存在することは、住居兼用工房であったとみてよいのであろうか。III区S I-22では方眼にして床面の土壌を採

取して鍛冶関連遺物の分布を調査している。その結果、鍛冶がや金床など作業空間以外の場には、鉄塊系遺物などの鍛冶関連遺物がまとまって出土しており、鍛冶作業の資材や廃材置き場となっている。この遺構では住居として利用する空間がないため、竈の有無は住居を改変して工房としたことも推測される。なお、不整形の鍛冶遺構については、鍛冶専用の工房とする見解が首肯される。

**炉・金床・ピットの配置** 金山遺跡の鍛冶遺構では炉・金床・ピットが組み合わさって確認された。このうち、ピットは立って作業を行う先手の位置と推定されている（小林1988）。金山遺跡ではこの3施設が三角の位置関係で配置されて、定型化している。この遺構における作業は、鍛冶関連遺物の分析から精錬から鍛錬鍛冶を行っていたことが明らかになっている。このような配置の鍛冶遺構は、大志白遺跡群 S I - 14、谷館野東遺跡 A 地区 C I - S I 002、溜ノ台遺跡第 34 号住居跡が挙げられる。大志白遺跡群 S I - 14 は精錬から鍛錬鍛冶を行っており、金山遺跡の作業内容に近い。しかし、県内の鍛冶遺構を集成すると、この配置にならない遺跡もあり、温泉神社北遺跡第 1 号鍛冶遺構では金床に相当するピットがなくて、蓮沼遺跡 7 号住居跡では遺構の中央部に焼土があるが、先手や金床のピットは発見されていない。この遺構では、鍛冶関連遺物も少なく、建物も竈を付設した端正な掘り方であり、一時程度の鍛錬鍛冶を主とした操業と目される。このように、作業内容などによって鍛冶遺構内の施設と配置が異なる可能性もあり、出土遺物と施設の関係調べていく必要がある。

## （2）県内の鉄生産関連遺物の時期的な動向（第 74～77 図、第 41 表）

**県内の製錬遺跡** 製錬遺跡の時期について、春日遺跡は報告の<sup>14</sup>C 炭素分析により、三叢山周辺の北山・大前製鉄遺跡群は炭素形態や製鉄遺跡で採集された土器、小山市域は大境遺跡や金山遺跡で製錬系遺物の出土する時期、那須烏山市域は北原遺跡と滝田本郷遺跡で製錬系遺物が出土した時期に基づく。これ以外にも足利市粟谷製鉄遺跡や那珂川町の鍛冶平遺跡があるが、時期は明らかでない。

このように製鉄遺跡の時期を明らかにする根拠は少ないが、上述のような現状での製鉄遺跡から動向をみると、本県域で最も古い製錬関連遺跡は三叢山麓において北山窟周辺で 7 世紀末から 8 世紀初め、その後三叢山南側の大前製鉄遺跡群が 10 世紀前葉頃まで継続すると推測される。

足利市春日遺跡は、8 世紀末の所産と炭素分析され、大前製鉄遺跡群よりも後発となる。小山市南部の製鉄遺跡群も 9 世紀中葉から後葉の所産で、渡良瀬川に面する野木町の清六 III 遺跡などは 9 世紀後葉で、鑄造の鋳型などが出土している。距離的にも大境遺跡等の小山市南部の製鉄遺跡群と時期的に重なり、西方に技術移転があったと推定される。県北では那須烏山市の北原遺跡と滝田本郷遺跡で製錬滓などが一定程度出土している。製錬がは発見されていないが、製錬から鍛冶工程まで一貫した作業をしていたと製鉄遺物の分析から指摘されている。北原遺跡の製錬系遺物は 9 世紀中葉から 10 世紀前半、滝田本郷遺跡では 9 世紀後葉の所産であり、この時期に那須地域南部で製錬が行われていた可能性が高い。

このように、現在までの状況で県内の製錬遺跡についてその動向をみると、三叢山周辺で最初に製錬が行われ、大規模な製鉄遺跡群を形成する。鍛冶のほかには鋳型も出土していることから鑄造も行われている。その後、一部足利市域で 8 世紀代に操業される。

9 世紀中葉から後葉になり、小山市南部の寒川郡、一部結城郡になる可能性もある地域で大規模な製鉄遺跡群が形成される。この時期に野木町西部や那須郡南部において、小規模とみられるが製錬や鑄造が発見して行われる。

**鍛冶関連遺物の時期的な出土傾向** 上述のような製錬遺跡の動向と対比して、鍛冶関連遺物の出土傾向を

みてみる。ここでは、報告書に掲載された鉄生産関連遺物について、土器をもとに出土した遺構から時期を推定した。混入品も一部存在する可能性もあるが、7世紀から10世紀までの官衙や集落における出土数の傾向を提示して、その意義を探っていく。

7世紀前葉では、県内で19軒以上の竪穴住居跡で椀形鍛冶滓などの鉄滓の報告が確認された。特に、磯岡遺跡1区と刈沼東原遺跡でまとまった数が確認されている。磯岡遺跡では羽口もあり、この時期にまとまった鉄器生産を行っていたと考えられる。この2遺跡以外では5遺跡、7遺構で鍛冶滓等が確認できる。後述のように7世紀中葉と比較すると、鍛冶関連遺物の数はやや多く、一定数確認できたことは特筆される。

7世紀中葉には、鉄滓等が出土した遺跡は7遺跡、11遺構であるが、中葉から後葉までを含むと粟宮宮内遺跡が加わる。西下谷田遺跡の初期官衙の遺構でも鍛冶滓等が出土している。官衙造営に伴う鍛冶操業が想定される。

7世紀後葉には鉄滓が出土した遺跡は6遺跡、9遺構が確認できた。官衙関連遺跡は上神主・茂原遺跡があり、集落での鉄滓は5遺跡である。ここで、7世紀代の傾向をみると、鍛冶関連遺物が確認できた遺跡数は、7世紀代は時期の下降に従い、少しずつ減っている。出土した遺構数では7世紀前葉に磯岡遺跡で集中して出土しているが、通時的にみると、出土した遺構数、遺跡数でも大きな変化がない点も確認しておきたい。

8世紀前葉では官衙で西下谷田遺跡、集落では下小屋原遺跡・西刑部西原遺跡などで確認できたのに限られる。現在確認できた資料では、前の時期よりも減少していることを指摘するのにとどめる。

8世紀中葉には、一転して11遺跡、15遺構で鉄滓等が確認できるようになり、増加する。下野薬師寺跡は官寺であるが、その他は集落遺跡であり、集落における鍛冶操業の増加が背景にあると考えられる。

8世紀後葉には7遺跡、13遺構で、鉄滓や羽口が確認されている。砂田遺跡や多功南原遺跡のような地域における大規模集落での出土遺構が多い。

9世紀前葉では7遺跡、14遺構で確認されていることから、概ね8世紀後葉と同じ数といえるであろう。この時期も前の時期と同じく、免の内台遺跡や多功南原遺跡のような大規模遺跡での確認事例が目立っている。

9世紀中葉には、22遺跡37以上の遺構で鉄滓や羽口などが出土している。金山遺跡では、鍛冶遺構が10基発見され、その周囲の遺構から鍛冶関連遺物などが出土している（『金山遺跡Ⅳ』第400図）。この遺跡における鉄滓等の出土遺構数はカウントしていないが、この時期における鉄生産関連遺物の出土遺構数の増加は前の時期に比べ倍以上になる。この時期が、古代において最も鉄生産が盛況したことを出土した遺構数や遺跡数から読み取ることができる。これは最も多くの鍛冶遺構が発見された金山遺跡を除いても前の時期よりも多くなっていることから、集落を含めて指摘することができる。

9世紀後葉には、14遺跡、26遺構で鉄滓などが出土している。遺跡数でみると前の時期に比較して少し減少していることになる。しかし、9世紀前葉以前の数よりも多いことから9世紀後葉は基本的には、盛んに鉄生産を行っていたと評価しておく。

10世紀前半には、鉄滓等が発見されているのは5遺跡、8遺構となり、9世紀中・後葉の極相とは異なっており、格段に激減する。10世紀後半には鍛冶遺構を含めても4遺跡であり、10世紀における鍛冶遺構の確認事例が少なくなったことを示す。10世紀に集落遺跡も激減することが一因と考えられる。

このように、8世紀中葉以降の様子をまとめれば、8世紀中葉から9世紀前葉までは鍛冶関連遺物が確認された遺構や遺跡数に大きな変化はないが、9世紀中葉になって急増して、この極相は9世紀後葉まで継続する。10世紀になり、集落遺跡の減少に関連して、鍛冶を行う遺跡も急減したようである。

第41表 県内鉄生産関連遺構・遺物一覧表

※番号は遺跡位置地図番号と一致する。丸番号は関連遺物出土遺跡。

時期	番号	遺跡名	遺構名・図面載番号	遺物名	備考	
7世紀 前葉	㉔	青龍岡遺跡	2区S1-80-17	鉄滓		
	㉕	青龍岡遺跡	3区S1-29-16	鉄塊系遺物		
	㉖	西州部西原遺跡	13区S1-26-19	鉄滓		
	㉗	磯岡遺跡	5区S1-26-10	鉄滓		
	㉘	磯岡遺跡	6区S1-1-7	鉄滓		
	㉙	磯岡遺跡	1区S1-21-12	鉄滓		
	㉚	磯岡遺跡	1区S1-26-26・27	鉄滓		
	㉛	磯岡遺跡	1区S1-28-9	羽口		
	㉜	磯岡遺跡	1区S1-32-22	羽口		
	㉝	磯岡遺跡	1区S1-35-35	鉄滓		
	㉞	磯岡遺跡	1区S1-47-36・37	鉄滓		
	㉟	磯岡遺跡	1区S1-58-8	鉄滓		
	㊱	磯岡遺跡	1区S1-59-24	鉄滓		
	㊲	菊沼東原遺跡	S158-24~26	鉄滓		
	㊳	菊沼東原遺跡	S160-26	鉄滓		
	㊴	菊沼東原遺跡	S161-49~51	鉄滓		
	7世紀 中葉	㊵	榑城塚遺跡	S1-11-5	鉄滓	
㊶		榑城塚遺跡	S1-37-24	鉄滓		
㊷		千駄塚浅間遺跡	S1-08-1	粘土質の解物		
㊸		五雲遺跡	S1-15-5	鉄滓		
㊹		西州部西原遺跡	3区S1-07-18・19	鉄滓		
㊺		西州部西原遺跡	3区S1-40-8	鉄滓		
㊻		茂原向原遺跡	S1-05-32	鉄滓		
㊼		牧ノ内遺跡	46号-2・3	羽口		
㊽		中道遺跡	S1-46-45・46	鉄		
㊾		榑城塚遺跡	S1-2-4	鉄滓		
㊿		榑城塚遺跡	S1-10-2	鉄滓		
㋀		西下谷田遺跡	S1-502	炉壁		
㋁		西下谷田遺跡	S1-506	鉄滓		
㋂		西下谷田遺跡	S1-507	鉄滓		
㋃		千駄塚浅間遺跡	S1-206-5	粘土質の解物		
7世紀中葉～後葉		㋄	西下谷田遺跡	1-S1-02A・02B	鉄滓	
		㋅	西下谷田遺跡	1-S1-02B	鉄滓	
	㋆	粟宮宮内遺跡	2区S1-206-5	粘土質の解物		
	㋇	粟宮宮内遺跡	2区S1-202-4	鉄滓		
	㋈	粟宮宮内遺跡	2区S1-207-6	炉壁		
	㋉	粟宮宮内遺跡	3区S1-316-16・17	炉壁		
	㋊	粟宮宮内遺跡	3区S1-316-18~32	鉄滓		
	㋋	千駄塚浅間遺跡	S1-202-4	鉄滓		
	㋌	千駄塚浅間遺跡	S1-207-6	炉壁		
	㋍	千駄塚浅間遺跡	S1-316-16~32	炉壁・鉄滓など		
7世紀 後葉	㋎	青龍岡遺跡	2区S1-187-26・27	鉄滓		
	㋏	青龍岡遺跡	3区S1-22-5	鉄滓		
	㋐	西赤船遺跡	第5号竪穴式住居跡-35	鉄滓		
	㋑	西赤船遺跡	第25号竪穴式住居跡-25	鉄滓		
	㋒	磯岡遺跡	S1-58-8	鉄滓		
	㋓	磯岡遺跡	1区S1-07-21	鉄滓		
	㋔	上神主・茂原遺跡	S1-43-29	鉄滓		
	㋕	榑城塚遺跡	S1-10-2	鉄滓		
	㋖	千駄塚浅間遺跡	S1-18-2	鉄滓		
	7世紀後葉～8世紀前葉	㋗	西下谷田遺跡	SD-748	鉄滓	
㋘		西下谷田遺跡	SE-243	鉄滓		

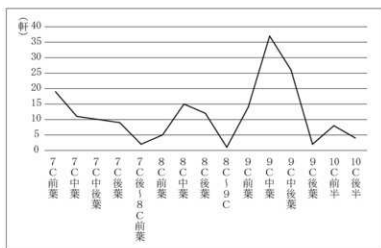
時期	番号	遺跡名	遺跡名・図掲載番号	遺物名	備考	
8世紀 前葉	㉟	西下谷田遺跡	S K-501	鉄滓		
	㊿	下小屋原遺跡	S 1-06-47	鉄滓		
	㊿	寺野東遺跡	IV区 S 1014-5	鉄滓		
	㊿	谷能野北遺跡	D 3-S 1 0002	鉄銚		
	㊿	西側部西原遺跡	3区 S 1-36-30	鉄滓		
8世紀 中葉	㊿	砂田遺跡	5区 S 1-3-11	鉄滓		
	㊿	浜ノ上遺跡	18号住居跡-152	炉壁		
	㊿	青龍河遺跡	2区 S 1-167-7	鉄滓		
	㊿	館之前遺跡	1-5-7	羽口		
	㊿	茂原向原遺跡	S 1-06-27	鉄滓		
	㊿	宮内東遺跡	第5号住居跡-8	羽口		
	㊿	馬門南遺跡	S 1-303-14・15	羽口		
	㊿	下野薬師寺跡	S 1-3011-12	羽口		
	㊿	西赤堀遺跡	S 1-376-36	鉄銚		
	㊿	西側部西原遺跡	3区 S 1-61-18	鉄滓		
	㊿	西側部西原遺跡	3区 S 1-01-35	鉄滓		
	1	多功南原遺跡	第11号住居跡-3	羽口		
	1	多功南原遺跡	S 1-509-1	羽口		
	1	多功南原遺跡	S 1-446-290	銅滓		
	1	多功南原遺跡	S 1-478-326	鉄滓		
	8世紀 後葉	㊿	免の内台遺跡	S 1-38-93	鉄滓	
		㊿	寺野東遺跡	Ⅲ区 S 1 015-1	鉄滓	
㊿		寺平遺跡	16号住居-99	鉄滓		
㊿		島田遺跡	S 1-8-122	羽口		
㊿		砂田遺跡	5区 S 1-4-10	鉄滓		
㊿		砂田遺跡	5区 S 1-12-25	鉄滓		
㊿		砂田遺跡	27区 S 1-46-5	鉄滓		
㊿		砂田遺跡	37区 S 1-59-19	鉄滓		
1		多功南原遺跡	S 1-776	鉄滓		
1		多功南原遺跡	S 1-456-329	鉄滓		
1		多功南原遺跡	S 1-776-311	鉄滓		
1		多功南原遺跡	S 1-714-314	鉄滓		
㊿		五雲遺跡	S 1-02-2	鉄滓		
8世紀～9世紀		14	大間台遺跡	S X-153	羽口・鉄滓・鉄製品など	鍛冶遺構
9世紀 前葉	㊿	免の内台遺跡	S 1-16-92	鉄滓		
	㊿	免の内台遺跡	第57号住居跡-13・14	鉄滓		
	㊿	免の内台遺跡	第83号住居跡-13	鉄滓		
	㊿	上神主・茂原遺跡	S 1-46-13	鉄滓		
	㊿	北ノ内遺跡	S K-185-20・21	羽口		
	㊿	北の前遺跡	A-S 1-21-33・34・35	鉄滓		
	㊿	家田第一小南遺跡	S 1-193-33	鉄滓		
	㊿	砂田遺跡	5区 S 1-4-10	鉄滓		
	1	多功南原遺跡	鍛冶場址-4・6	鉄銚・羽口	鍛冶遺構	
	1	多功南原遺跡	S B-57	鉄滓		
	1	多功南原遺跡	S 1-225-289	銅滓		
	1	多功南原遺跡	S 1-18-318	鉄滓		
	1	多功南原遺跡	S 1-228-321・315	鉄滓		
	1	多功南原遺跡	S 1-080-323	鉄滓		
9世紀 中葉	㊿	砂田遺跡	5区 S 1-9-18	鉄塊系遺物		
	㊿	砂田遺跡	36区 S 1-3-38	鉄滓		
	㊿	浜ノ上遺跡	8号住居跡-98	取鍋		
	㊿	寺野東遺跡	S 1 071-2	鉄滓		
	㊿	免の内台遺跡	第39号住居跡-8・9・10・11	鉄滓		
㊿	免の内台遺跡	第82号住居跡-17	鉄滓			



## 第4章 総括

時 期	番号	道 跡 名	道構名・因得敷番号	道 物 名	備 考
9世紀 中葉	㉔	西州部西原道跡	9区 S 1-7-5・6	鉄滓	
	6	金山道跡	V区 S 1-026-54	鉄屑	
	㉕	茂原向原道跡	S 1-272-17・18	鉄滓	
	⑥	北の前道跡	(B区) S 1-05-25	鉄滓	
	①	仁王地道跡	A 3・3号住居-4	鉄滓	
	㉖	八幡根道跡	S 1-46A-22	鉄滓	
	㉗	磯岡道跡	I区 S 1-160-32	鉄滓	
	④	安川第一小南道跡	S 1-150-32	鉄滓	
	㉘	伊勢崎道跡	S-32-25~29	鉄滓・羽口	
	3	大志白道跡群	S 1-14	鉄滓など	鍛冶遺構
	4	谷船野東道跡	A地区 C 1-S 1-0002	鉄滓・鍛造銅片・がら・銅滓など	鍛冶遺構
	5	下野国分尼寺跡	S 1-114	鉄滓・鉄製品など	
	5	下野国分尼寺跡	S 1-122	羽口・鉄塊系遺物	鍛冶遺構
	5	下野国分尼寺跡	S 1-307	鉄滓	
	5	下野国分尼寺跡	S K-341	鉄塊系遺物	
	2	温泉神社北道跡	第1号鍛冶遺構	羽口・鉄滓・鉄製品など	鍛冶遺構
	1	多功南原道跡	S 1-060-316	鉄滓	
	6	金山道跡	III区 S 1-022	羽口・鉄滓・鉄製品・鍛造銅片など	鍛冶遺構
	6	金山道跡	VII区 S 1-036	羽口・鉄滓・鉄製品・鍛造銅片など	鍛冶遺構
	6	金山道跡	V区 S 1-004B	鉄滓・鉄製品・鍛造銅片など	鍛冶遺構
	6	金山道跡	V区 S 1-010	羽口・鉄滓・鉄製品・鍛造銅片など	鍛冶遺構
	6	金山道跡	V区 S 1-025	羽口・鉄滓・鉄製品・鍛造銅片など	鍛冶遺構
	6	金山道跡	V区 S 1-110B	羽口・鉄滓・鍛造銅片	鍛冶遺構
	6	金山道跡	V区 S 1-128B	鉄滓・鍛造銅片	鍛冶遺構
	6	金山道跡	E区 S 1-147	鉄滓・鍛造銅片など	鍛冶遺構
	6	金山道跡	VIII区 S 1-012	羽口・鉄滓・鉄製品・がら・鍛造銅片など	鍛冶遺構
	6	金山道跡	VIII区 S K-231	鉄滓・鉄製品・鍛造銅片など	鍛冶遺構
9	北原道跡	S 1-528	鉄滓(或動滓)		
7	雁ノ台道跡	第1号鍛冶遺構	羽口	鍛冶遺構	
㉙	山苗代A道跡	S 1-02-12	鉄滓		
㉚	後藤南道跡	2 H(2号住居跡)17~20	鈍型		
9世紀 後葉	㉛	兔の内台道跡	S 1-321-11	羽口	
	㉜	兔の内台道跡	S 1-113-91	鉄滓	
	㉝	兔の内台道跡	第77号住居跡-33・34	鉄滓	
	㉞	砂丘道跡	37区 S 1-59-19	鉄滓	
	㉟	黒崎台道跡	S 1-744-土1	羽口	
	㊱	蟹が入道跡	26号-6	羽口	
	㊲	西州部上原道跡	S 1-4-17・18・19	鉄滓	
	㊳	山海道道跡	S 1-10-9	鉄滓	
	㊴	山海道道跡	S X-81-17・18・19	鉄滓	
	7	雁ノ台道跡	第34号住居跡-12	羽口	鍛冶遺構
	8	蓬沼道跡	7号住居跡	羽口など	鍛冶遺構
	10	宮内東道跡	鍛冶閉道遺構	鉄滓など	鍛冶遺構
	11	滝田本郷道跡	S X-1	羽口・鉄滓など	鍛冶遺構
	11	滝田本郷道跡	S X-2	羽口・鉄滓など	鍛冶遺構
	㊵	横倉道跡	S 1-75	羽口・鉄滓など	
	9	北原道跡	S 1-129	鉄滓	
	9	北原道跡	S 1-295	鉄滓	
9	北原道跡	16区 S 1-1250	鉄滓・羽口など	鍛冶遺構	
㊶	清六田道跡	S 1-44-12~15	鉄滓・がら		
㊷	清六田道跡	S 1-74-12~25	鉄滓		
㊸	清六田道跡	S 1-91-8	鉄滓		
㊹	清六田道跡	S 1-409-11~14・16など	羽口・鉄滓・鈍型		
㊺	清六田道跡	S 1-468-8~11・18~22	鉄滓・がら		

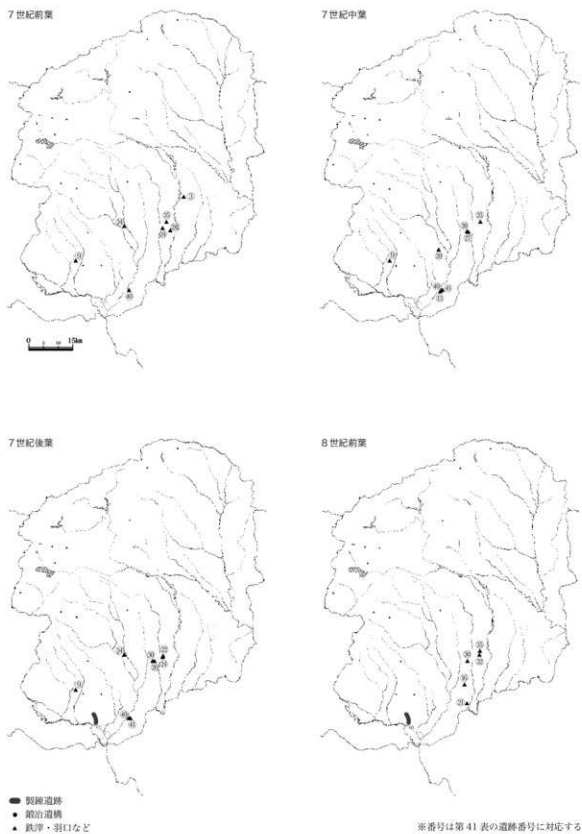
時期	番号	遺跡名	遺構名・図号番号	遺物名	備考	
9世紀 後葉	㉔	清六田遺跡	S 1-469-15・16	鉄滓		
	㉕	清六田遺跡	S 1-475-4	炉壁		
	㉖	松原北遺跡	7号住居址	鉄滓など		
9世紀 中葉～後葉	㉗	堀米遺跡	14区 S 1-79B-8・9	鉄塊系遺物・羽口		
	㉘	堀米遺跡	S E-121-11	鉄塊		
10世紀 前半	㉙	横倉宮ノ内遺跡	6区 S 1-060-9・10	羽口		
	㉚	八幡帆東遺跡	S 1-01A・B-45	羽口		
	㉛	清六田遺跡	S 1-476	炉壁・鉄滓		
	9	北原遺跡	S 1-521	鉄滓(流動滓)		
	9	北原遺跡	S 1-524	鉄滓(流動滓)		
	9	北原遺跡	S 1-650	鉄滓		
	9	北原遺跡	S 1-885	鉄滓		
	㉜	茂原向原遺跡	S 1-10-13	鉄滓		
	10世紀 後半	㉝	茂原向原遺跡	S 1-269-16・17	鉄滓	
		3	大志白遺跡群	S 1-03	鉄滓など	鍛冶遺構
9		北原遺跡	S 1-525	鉄滓		
奈良～平安時代	13	寺平遺跡	6号上杭	鉄滓	鍛冶遺構	
	15	板倉城跡	鍛冶場跡	羽口	鍛冶遺構	



時代	軒数
7C前葉	19
7C中葉	11
7C中後葉	10
7C後葉	9
7C後・8C前葉	2
8C前葉	5
8C中葉	15
8C後葉	12
8C後・9C	1
9C前葉	14
9C中葉	37
9C中後葉	26
9C後葉	2
10C前半	8
10C後半	4

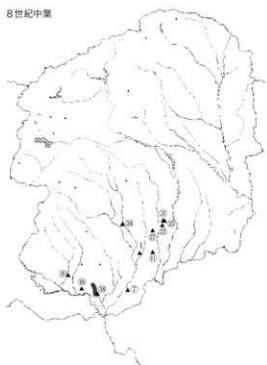
第74図 栃木県内における古代鍛冶遺構と鍛冶関連遺物数の時期別変遷図

第4章 総括



第75図 鍛冶遺構・鉄滓等出土遺跡位置図(1)

8世紀中葉



8世紀後葉



9世紀前半



1 多功南原道跡

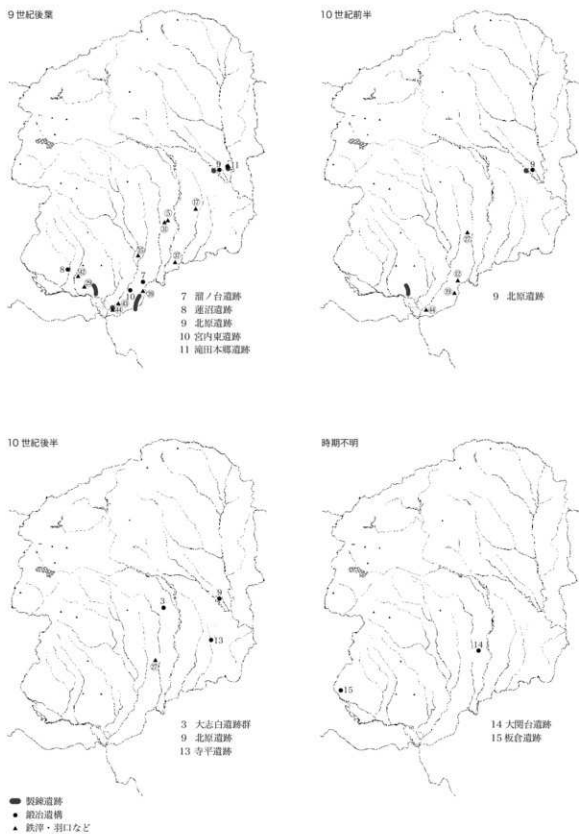
9世紀中葉



2 温泉神社北道跡  
3 大志白道跡群  
4 谷畑野東道跡  
5 下野国分尼寺跡  
6 金山道跡  
7 厩ノ台道跡  
9 北原道跡

- 製鐵道跡
- 鍛冶遺構
- ▲ 鉄滓・引口など

第76図 鍛冶遺構・鉄滓等出土遺跡位置図(2)



第77図 鍛冶遺構・鉄滓等出土遺跡位置図(3)

このような古代の栃木県域における鉄生産の動向をみたくて、先行研究と対照する。「延喜式」主税式の祿物備法による下野の鉄価格は一疋あたり5束で、東山道・東海道、特に関東地方では最も安価になっている。これを福田豊彦氏は広汎な鉄生産が行われていたことによると解釈した（福田1982）。下野国における鉄価格の安さと鉄生産関係遺跡の動向を重ねると、祿物備法の価格は鉄生産遺跡が最も多くなる9世紀中葉から後葉の実態を反映しているとみるべきであろう。

**製錬遺跡と素材の流通** 次に、鍛冶操業地と製錬遺跡間の鉄素材の流通についてみる。栃木県域では7世紀末以前の製錬遺跡は未発見である。このため、7世紀代の資料については金属学的分析を経なければならぬが、その前半代までの鉄素材は搬入品か故鉄であろう。

7世紀末から8世紀初め以降は、下野国内では三叢山麓窯業遺跡の一面に炭窯が発見され、この時期から鉄製錬が行われた。栃木県域で発見されたこの時期の鍛冶関連遺物も佐野市東部の製錬遺跡から流通した可能性が高い。その後、製錬遺跡は三叢山南側に位置する大前製鉄遺跡群に移って、10世紀前葉まで展開する。栃木県域における9世紀中・後葉までの製錬遺跡は大前製鉄遺跡群のみであり、西下谷田遺跡などの官衙及び下野薬師寺跡などの寺院、芳賀郡の免の内台遺跡・寺平遺跡、河内郡の多功南原遺跡・砂田遺跡などの地域の中核となる遺跡や安蘇郡の傾城塚遺跡など山間部の遺跡まで広域に鉄素材を流通していたと考えられる。これに鍛冶遺構でしばしば出土する鉄器が故鉄として回収・再利用される。

小山市東部や那須烏山市域の9世紀中・後葉の鉄素材の流通域は不明であるが、小山市東部の製錬遺跡群は、規模からみても鉄素材を比較的広域に流通させていた可能性がある。距離からみても小山市の溜ノ台遺跡・宮内東遺跡・八幡根遺跡・横倉遺跡の鍛冶の鉄素材は小山市東部の製錬遺跡から供給されたと思われる。安蘇郡に所在する堀米遺跡や蓮沼遺跡・黒袴台遺跡では距離的にみて、大前製鉄遺跡群から素材が供給されたと推測される。

### (3) 集落動向と鍛冶 (第78図)

次に、鍛冶操業と集落の性格・動向との関係から工人の動きなどについてみていく。この点に関しては、安間拓巳氏が集落形態と鉄器生産の関係を検討し、集落内少数付型と集落内多数付型に分類し、鍛冶遺構の大半は、集落内少数付型であることを指摘した（安間2007）。ここでは、以下の点を検討する。

**集落の性格、首長墓や集落の階層関係** 7世紀前葉をみると、青龍湖遺跡の周囲では黒川東岸に地域勢力といえる桃花原古墳があり、鍛冶操業も大きくはその勢力下に行われたとみられるであろう。

小地域勢力としては、まとまって鍛冶関連遺物が出土した磯岡遺跡周辺に、西赤堀遺跡や成願寺遺跡の群集墳がある。西赤堀遺跡では、6世紀末から7世紀初めに全長42mの前方後円墳もある。7世紀前葉には西側にある磯岡遺跡で鍛冶が行われており、小地域の政治勢力の範囲内で鍛冶が行われていた可能性がある。しかし、この時期の中心勢力は石橋・薬師寺周辺や壬生・国分寺周辺である。地域の中小階層まで鍛冶操業・経営が行われていたとみるべきであろう。

一方、傾城塚遺跡は埴輪を有する一級塚古墳などに少し後出する時期で、周辺に大きな古墳も存在しない。このように、7世紀前葉には、本県域で主要な地域勢力者、限られた範囲での地域有力者、勢力と係わらない地域でも鍛冶が行われている。この事実に対して、地域勢力者、地域政権が鍛冶工人を擁していることとともに、地域勢力が顕著でない地域でも鍛冶が行われていることが評価するべきであり、鉄生産を通じて地域勢力者が地域内の生産力を確保するために行った政策とみるべきであろう。

7世紀後半には初期官衙が設置され、評家ともいわれる西下谷田遺跡でも鍛冶が行われる。官衙運営に係

わる操業といえるであろう。ここで注目されるのは、古墳築造の終焉後も槇城塚遺跡や西刑部西原遺跡では、前の時期から続いて鉄滓が出土していることである。主要勢力と係わらない地域でも断続的に鍛冶が行われていたことになる。粟宮宮内遺跡は後の寒川郡家に隣接した位置であり、この時期の三農産須恵器がまとまって出土した稀有な遺跡である。交易の点からもやや優位な遺跡の可能性もある。

8世紀中葉から9世紀前葉までは、それ以前に比べて報告されている数も多くなるが、多功南原遺跡・砂田遺跡・免の内台遺跡など地域で有力者の居住する遺跡や大規模集落において、まとまった数が報告されている。多功南原遺跡や砂田遺跡のように、地域有力者が鍛冶工人を擁して、鉄器生産を行っていたことが想定できる。一方、青龍洞遺跡のような一般的階層の集落でも小規模鍛冶操業が行われている。多功南原遺跡などは、遺構として鍛冶工房と判断できたのは限られるが、小規模鍛冶が断続的に行われており、安間氏の鍛冶操業の2類型の中間的な形態とみられる。ただし、青龍洞遺跡などは安間氏の集落内少数付属型になるであろう。

9世紀中葉には鍛冶遺構の確認数が急増し、県内で最も大規模な精錬から鍛冶を行った金山遺跡で集約操業する。また、鉄滓などが少数出土する遺跡が増加することから、鍛冶を行う集落が拡散し、集落内少数付属型が増加する。その集落も一般的な階層といえるものが多い。

9世紀後葉には集約操業を行った金山遺跡が短期間で停止するが、小規模操業の鍛冶の数は中葉の様相を継承し、広く鍛冶が行われる。

10世紀には、集落数減少して、鉄器生産を行った遺跡は減少し、一般的な階層の集落で、小規模鍛冶を行っていたことが想定される。

このような流れのなかで、堀米遺跡の鍛冶をみると、集落内少数付属型鍛冶が一般階層の集落に拡散した時期に、その動向に沿って操業されたと判断することができる。

**集落の消長と鍛冶の時期との関連** この観点から古代の鍛冶をみることはあまり行われていない。遺跡の調査範囲の広狭や鍛冶関連遺物について報告の有無など諸条件を勘案しなければならない。このため、類型的な把握しておく。

槇城塚遺跡は7世紀前中後葉、西刑部西原遺跡は7世紀前中葉、8世紀前中葉、9世紀中葉に鉄滓が確認されている。多功南原遺跡では8世紀中後葉、9世紀前中葉に、砂田遺跡では8世紀中後葉、9世紀前中後葉に確認できた。このように、西刑部西原遺跡・多功南原遺跡・砂田遺跡は比較的広範囲に調査された遺跡であるが、長期間断続的に鍛冶を行っていたことが確認できる。多功南原遺跡と砂田遺跡は掘立柱建物が多く発見され、地域の有力者の集落であり、このような集団のもとでは、長期・断続型の鍛冶操業が行われていたと考えられる。一方、比較的広範囲を調査した北の前遺跡では9世紀前中葉のみ、仁王地遺跡は9世紀

遺跡名	7世紀			8世紀			9世紀			10世紀		評価
	前葉	中葉	後葉	前葉	中葉	後葉	前葉	中葉	後葉	前半	後半	
槇城塚遺跡	■	■	■									長期・断続型
西刑部西原遺跡	■	■	■	■	■	■						
多功南原遺跡				■	■	■						
砂田遺跡				■	■	■						
北の前遺跡							■	■	■			短期・小規模型
仁王地遺跡								■	■			
黒袴台遺跡									■	■		
寺平遺跡						■				■	■	

第78図 県内鍛冶遺構・関連遺物の時期と型

中葉のみ、黒袴台遺跡は9世紀後葉のみ、寺平遺跡は8世紀後葉・10世後半のみで、短期・小規模の操業である。8世紀代の寺平遺跡は地域有力者が居住しているが、短期で停止している。このような短期・小規模型の鍛冶操業は鍛冶が拡散する9世紀中後葉にも多く確認でき、工人が鉄器の需要に応じて巡回・出向いて鍛冶を行っていたことが想定できる。集成できた資料からみると、このような巡回鍛冶は古墳時代にもあるが、9世紀中後葉に多くなる点を指摘することができる。この場合、鍛冶工人がどのように編成されていたかが課題である。第一の解釈として、多功南原遺跡や砂田遺跡のような地域の有力者の集落が、長期・断続型であることから、このような有力者のもとに編成されて地域経営の一端で鍛冶を行っていたとみる。第二の解釈として、鍛冶資料の増加を鍛冶工人の増加、自立化とみる見方である。断案はないが、10世紀以降減少する事実や有力者の集落が長期・断続型鍛冶であることから、鍛冶工人は地域有力者に編成されて地域の集落を巡回鍛冶していたと推定しておきたい。

#### (4) 県内の古代鍛冶関連遺物 (第79図)

次に、鍛冶と関連して、鍛冶に係わる遺物を出土した遺跡を提示する。

**鋳型出土遺跡** 大前製鉄遺跡群の西方2km程の位置にある後藤南遺跡では9世紀中葉の2号住居跡で鉄鍋の鋳型口縁部付近の破片と獣脚の可能性のある型が出土している。出土した遺構は竈を敷設した一般的な竪穴住居である。竈では下野国分寺跡で8世紀中葉の土器がとりべとして使われている。

清六Ⅲ遺跡は、西に渡良瀬川の低地を望む台地上に立地する。9世紀後葉の竪穴住居跡群から多量の炉壁(青銅溶解貯け含む)が出土し、鍛冶羽口の報告もされており、多様な操業を行っていたようである。SⅠ-409出土の鋳型中子は口径20cm程で、平底の鍋であろう。野木Ⅲ遺跡の北2km程の位置で、思川に面して台地縁辺にある松原北遺跡では鍛冶関連の滓が出土した。9世紀後半頃の土師器坏に「寒」銘墨書があり、寒川郡の頭文字を示すとみられる。郡名墨書土器は寒川郡家である千駄塚浅間遺跡で出土しており、野木Ⅲ遺跡・松原北遺跡の鍛冶・鍛冶など銅や鉄製品生産の経営に寒川郡司が関わっていた可能性が高い。

県内での鍛冶鋳型は2遺跡で、9世紀中葉・後葉に確認できるのみであり、発見されている鍛冶遺構の数からみても、鍛冶操業の方が主体であったと考えられる。

**鍛冶品出土遺跡** 県内での古代鍛冶品は、鉄鍋片や獣脚片がある。鉄鍋は西刑部西原遺跡12区SⅠ-1(9世紀中葉)、西刑部西原遺跡3区SⅠ-8(9世紀後葉)、溜ノ台遺跡第34号住居跡(9世紀後葉)で出土しており、多功南原遺跡16号住居址(8世紀後葉)例も可能性がある。溜ノ台遺跡の鉄鍋は鍛冶工場の故鉄集積品とみられる。

獣脚は金山遺跡V区SⅠ-047B(9世紀中葉)、磯岡遺跡5区SⅠ-32A・B(9世紀中葉)、青龍沢遺跡2区SⅠ-146(9世紀後葉)で出土している。金山遺跡は鍛冶が盛んに操業される時期であり、故鉄集積品であろう。

これら鍛冶品の時期は多功南原遺跡の一例を除くと、全て9世紀中葉から後葉の所産であり、県内で鋳型が出土し始める時期と一致する。但し、故鉄はそれ以前に遡る可能性を含む。東日本でも8世紀末に鋳造遺跡が出現するといわれ(穴澤・長谷川2017)、多功南原遺跡の鍋もその初期製品と評価すべきであろうか。

**鍛冶品出土遺跡の性格** この観点で出土遺跡を分類すると、大きく故鉄集積の鉄生産遺跡と消費遺跡に分類できる。消費遺跡では、階層関係でやや上位と目される遺跡が磯岡遺跡と多功南原遺跡である。磯岡遺跡の9世紀中葉の5区は掘立柱建物が一列に並び、「厨」銘墨書土器や円面鏡・鉄鉢形土器と獣脚が出土するなど、ほかの集落の景観・出土品よりも優位性が看取される。多功南原遺跡は、周囲の集落よりも出土品・

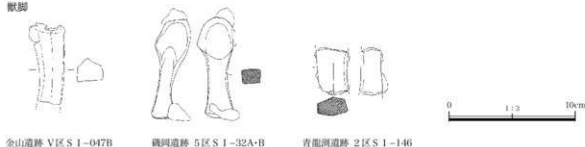


第4章 総括

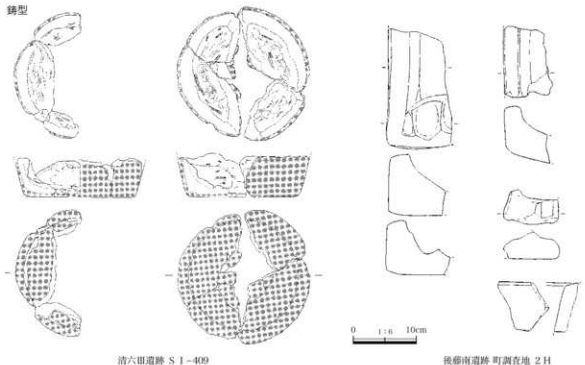
鉄鍋



獣脚



鋳型



第79図 県内出土鉄鍋・獣脚・鋳型実測図

建物構成でも優位な遺跡であり、これから鉄鍋や獣脚出土遺跡の優位性が確認できる。ただし、青龍洞遺跡は竪穴住居の密集する遺跡であるが、大型の掘立柱建物や特殊な遺物は確認されていないことから一般的な階層の集落と判断される。ここでは、全国的にも出土数の少ない獣脚などが、地域で優位な集団で複数事例確認できた点を指摘しておく。

## 第4節 安蘇郡内の土鍾からみた漁労

これまでの堀米遺跡の発掘調査で、漁労に用いる土鍾が発見されている。土鍾は、河川で網漁に用いる重りであり、地域における集団の生業を明らかにする資料となる。佐野市域においても土鍾の出土事例が増加してきたので、地域における地勢と生業の関係をみて、堀米遺跡に居住した集団の特徴を明らかにしていきたい。対象は本遺跡に併行する古墳時代後期から平安時代とする。

### (1) 形態による分類 (第80・81図)

土鍾は大きさや重量によって用途が異なるといわれ、茨城県では佐々木義剛氏が分類している(佐々木2016)。ここでも概ね氏の分類に従って、傾向をみる。

**大型管状土鍾** 最も大きい土鍾は黒袴台遺跡の土鍾で、長さ6.5～10cm程、重量100～350g、孔径が2cm以上の土鍾である。6世紀代(S Z-860)と7世紀前葉のS I-49から出土している。佐々木氏はこの類の土鍾について、重い沈子が必要とする地曳網で、大人数の協同作業を想定している。また、漁獲対象としてはサケを推測している。

これより小さい土鍾は長さ4～6cm程、重量30～50g程、孔径1cm程で、佐々木氏のI A類・I B類に相当する。ゴロノミヤ遺跡S I-102・黒袴台遺跡S I-49(7世紀前葉)・新若宮遺跡S I-12(9世紀後半)で出土している。重量・孔径も前述の黒袴台遺跡の土鍾よりも小さく、囲網漁や流し刺網漁を想定し、コイやフナなどを対象にしたという。

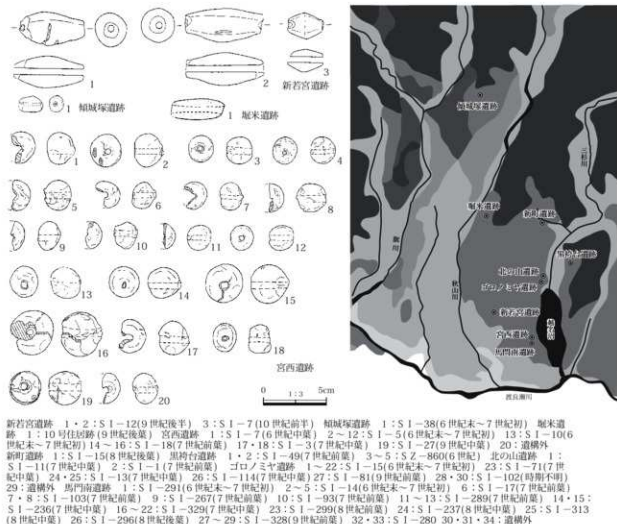
**中型管状土鍾** 長さ4～6cm程、重量10～20g程で、佐々木氏の管状土鍾II A類・II B類に相当するとみられ、コイ・アユなどの刺網漁に用いたと想定している。馬門南遺跡S I-103(7世紀前葉)・北の山遺跡S I-11(7世紀中葉)で出土している。

**小型管状土鍾** 長さ2～5cm程、重量10g以下の土鍾で、傾城塚遺跡S I-38(6世紀末～7世紀初)・馬門南遺跡S I-291(6世紀末～7世紀初)・ゴロノミヤ遺跡S I-114(7世紀中葉)・新町遺跡S I-15(8世紀後葉)・馬門南遺跡S I-328(9世紀前葉)・ゴロノミヤ遺跡S I-81(9世紀前葉)などで出土している。ゴロノミヤ遺跡S I-81出土土鍾は外径2cm程で、佐々木氏の細形管状土鍾に相当し、他の土鍾は氏の管状土鍾III類にあたる。氏はこの類の土鍾をアユ・ウグイ・フナの刺網漁の沈子と推定している。堀米遺跡の10号住居跡(9世紀後葉)出土の土鍾も長さ4.2cmであり、この類に含まれるであろう。

**大型球状土鍾** 径3cm程、重量25～30g程、孔径0.6～0.8cm程の土鍾で、宮西遺跡S I-18(7世紀前葉)において出土している。佐々木氏は50g程のものを茨城県域での最も大きな球状土鍾とするが、安蘇郡域ではこれに相当する大きな土鍾は出土していない。

**中型球状土鍾** 径1.5～2.5cm程、孔径0.8～1.0cm、重量10～20g前後である。出土事例は多くて、馬門南遺跡S I-14(6世紀末～7世紀初)・S I-17・93・289(7世紀前葉)・S I-236・329(7世紀中葉)・S I-237・313(8世紀中葉)、ゴロノミヤ遺跡S I-71(7世紀中葉)、宮西遺跡S I-5・10(6世紀末～7世紀初)・S I-18(7世紀前葉)・3(7世紀中葉)・S I-27(9世紀中葉)などで出土している。佐々木氏の球状土鍾II類に相当し、コイ・フナの刺網漁の沈子と推定している。球状土鍾は、水底に凹凸がある刺網の時に、網裾の隙間から魚を逃さないように長さの短い土鍾を多数装着して、水底の地形沿うようにするという。安蘇郡域では最も多い土鍾の形態である。

**小型球状土鍾** 径1.0～1.5cm程、孔径0.1～0.2cm、重量10g以下の土鍾である。ゴロノミヤ遺跡S I-15(6世紀末～7世紀初)、馬門南遺跡S I-329(7世紀中葉)で出土しており、ゴロノミヤ遺跡S I-15



新若宮遺跡 1・2 : S I -12(9世紀後半) 3 : S I -7(10世紀前半) 榎城塚遺跡 1 : S I -38(6世紀末~7世紀初) 配米遺跡 1 : 10号住居跡(9世紀後半) 宮西遺跡 1 : S I -7(6世紀中葉) 2~12 : S I -5(6世紀末~7世紀初) 13 : S I -10(6世紀末~7世紀初) 14~16 : S I -18(7世紀前半) 17・18 : S I -3(7世紀中葉) 19 : S I -27(9世紀中葉) 20 : 遺跡外  
 新町遺跡 1 : S I -15(8世紀後半) 黒崎台遺跡 1・2 : S I -49(7世紀前半) 3~5 : S Z -860(6世紀) 北の山遺跡 1 : S I -11(7世紀中葉) 2 : S I -1(7世紀前半) ゴロノミヤ遺跡 1~22 : S I -15(6世紀末~7世紀初) 23 : S I -7(7世紀中葉) 24・25 : S I -13(7世紀中葉) 26 : S I -114(7世紀中葉) 27 : S I -81(9世紀前半) 28・30 : S I -102(時期不明) 29 : 遺跡外 馬門南遺跡 1 : S I -291(6世紀末~7世紀初) 2~5 : S I -14(6世紀末~7世紀初) 6 : S I -17(7世紀前半) 7・8 : S I -103(7世紀前半) 9 : S I -267(7世紀前半) 10 : S I -93(7世紀前半) 11~13 : S I -289(7世紀前半) 14 : 15 : S I -236(7世紀中葉) 16~22 : S I -329(7世紀中葉) 23 : S I -299(8世紀前半) 24 : S I -237(8世紀中葉) 25 : S I -313(8世紀中葉) 26 : S I -296(8世紀後半) 27~29 : S I -328(9世紀前半) 32・33 : S I -280 30・31・34 : 遺跡外

第80図 佐野市域出土の土鍾(1)

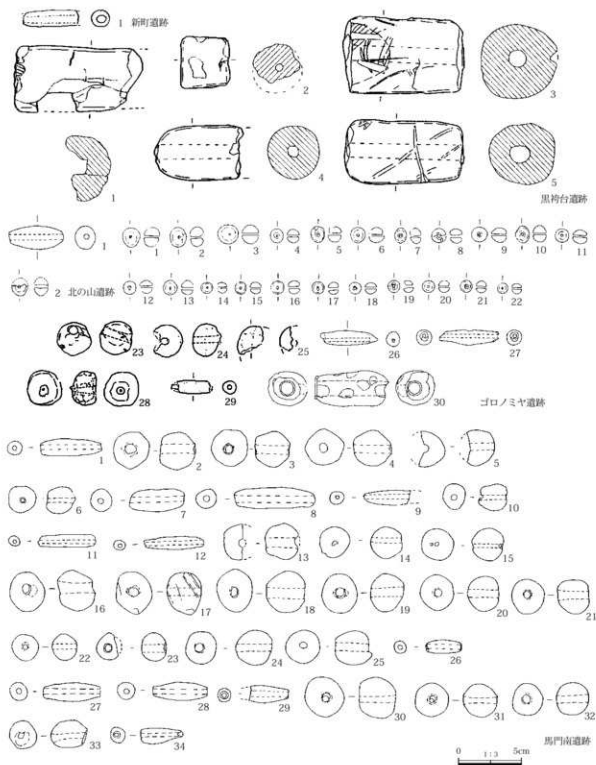
では径と重量の異なるものを組み合わせている。佐々木氏の球状土鍾Ⅲ類に相当し、コイ・フナの刺網漁に用いられたと推定している。

このように分類したが、安蘇郡域で最も出土数の多いのは中型球状土鍾であり、次いで小型管状土鍾であろう。最も大きな大型管状土鍾や大型球状土鍾は出土数が最も少ない。本県において、大型管状土鍾は、小山市八幡根東遺跡で、長さ8.3cm、孔径1.5~2.2cmの土鍾が出土している。時期は出土した住居の時期から9世紀前半から中葉と後半のものである。小型の管状土鍾・球状土鍾も出土しており、多様な漁法を探っていたようである。この遺跡は鬼怒川で大型管状土鍾を用いたとみられる。

## (2) 土鍾の分布

土鍾が出土した遺跡を地図で示すと、佐野市南東部の三杉川・旧越名沼近傍での出土数が多い。黒崎台遺跡・北の山遺跡・ゴロノミヤ遺跡などは旧越名沼に面した台地上にある。宮西遺跡・馬門南遺跡は旧越名沼から西に0.5km程の位置になる。新町遺跡は旧越名沼よりも奥まった位置に所在し、沼まで2.5km程である。

佐野台地西側に位置する堀米遺跡は秋山川まで西に0.5km程、新若宮遺跡は秋山川まで1.4km程である。山麓部では、榎城塚遺跡は足尾山系の先端の丘陵下に位置する。河川までは東の秋山川まで2km、西の旗川ま



第81図 佐野市域出土の土鍾(2)

で1km程の距離である。この遺跡では土鍾の報告は1点のみであり、山麓部での土鍾の出土事例は極めて少ない。また、旗川まで0.6km程の位置にある館之前遺跡では土鍾の報告がない。このため、秋山川や旗川沿いの集落や官衙の可能性のある遺跡では、網漁をあまり行っていなかったようである。傾城塚遺跡は古墳時代後期、堀米遺跡は9世紀代の土鍾であるが、両者ともに小型管状土鍾であり、アユ・ウグイ・フナなどの

刺網漁を小規模に行っていたと判断することができる。土鍾がまとまって出土する遺跡は、県北であるが、温泉神社北遺跡や小鍋前遺跡が挙げられ、これらの遺跡では製塩土器もまとまって出土した。このため、刺網漁で獲ったアユなどの魚を塩漬けか塩煮して、保存できる食品にして交易していたと考えた（津野 2015）。堀米遺跡では製塩土器も確認されず、土鍾も少数であることから、交易品加工というよりも自家消費のための漁労であったとみられる。

『佐野市史 民俗編』によれば、越名沼ではウナギ・フナ・ナマズなどが漁獲されたという。網を用いる漁法では地曳網や追い込み漁が行われ、これらは集団での協同作業の漁を行ったという（佐野市史編さん委員会 1975B）。大型管状土鍾の使用法と越名沼における民俗事例が類似しており、古代における漁法が類推できる。これらの遺跡では、地勢を利用した漁により、コイやフナなどの魚を交易していたと考えられる。関東地方の海浜部で古代製塩が行われるようになるのは、製塩土器で見える限り、7世紀末から8世紀初め頃である。この頃以降の越名沼周辺の集落では、アユ・ウグイ・フナなどを保存加工して、食品を交易していた可能性がある。今後この周辺の遺跡での製塩土器の再確認により明らかになっていくであろう。

このように、安蘇郡域という限られた範囲においても、地勢に応じて異なった漁労と交易・消費が行われていたことが考えられるようになった。

## 第5節 堀米城跡と中世の遺構・遺物

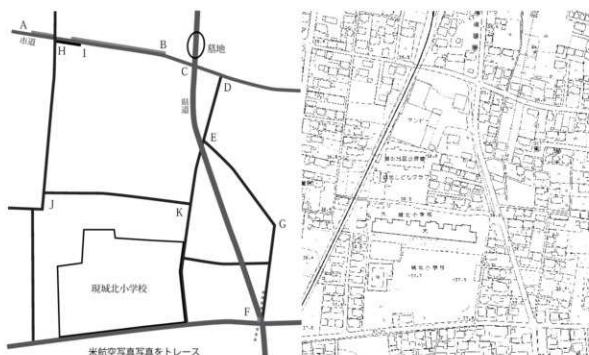
### (1) 堀の時期

千葉県日本寺に伝わる梵鐘に堀籠宮内左衛門尉源有元の銘が記され、この梵鐘は元亨元年(1321)作である。このため、堀籠氏は14世紀前半頃にこの地域を支配し、その居城が堀米城と考えられている（佐野市編さん委員会 1975A）。市史では堀米に残っていた堀跡や土塁から城の位置と範囲を推定している。今回の調査では、市史に推定した範囲よりも南側において堀米城跡と係わる可能性がある堀跡(1区S D-01)が発見された。ここからはかわらげが出土しており、出土位置などは明らかでないが、その時期を検討する。下野国内の中世かわらげの編年は大澤伸啓氏が行っている（大澤 2003）。氏の足利市域編年によれば、非ロクロ成形のかわらげは、2期(13世紀前半から中頃)になくなるという。本城跡堀跡出土の皿形は平底で、器高が高く、口径が小形である。小皿形の口径も氏の2期よりも小形になっている。ロクロ成形かわらげでは、体部が内傾し、内面で底部・体部が緩やかに移行する特徴などから3期(13世紀後半から末)とみておきたい。非ロクロ成形かわらげが2期とやや形態差があることを時期差とみて、ロクロ成成品と合わせてみると、1区S D-01のかわらげは13世紀中葉から後半の所産と考えておきたい。小山市域の編年では皿形や小皿形は2期(13世紀中頃)に近い形態である。

これらの点から堀米城跡の堀は13世紀中葉から後半には掘削・機能していたと考えられる。有元が日本寺の梵鐘を作った1321年に何歳であったか明らかではないが、堀から出土した土器の年代から少なくとも、有元の先代以上が堀籠氏の祖となる可能性が浮上してきたことになる。

### (2) 周辺地割りととの関連(第82図)

『佐野市史 資料編1』によれば、堀米城跡は城の西側に堀と内側に土塁、北側にも堀と内側の一部に土塁が残っていたという。市史の城址略図でも推定城跡北辺にあたる市道堀米67号線の北側に接して堀の波線が記されている。戦後の米軍撮影の航空写真でも市道北には黒い帯状の部分があり、堀とみられる(写真



第82図 堀米城跡周辺の地割

を基に道をトレースした図のA-B間、以下同じ)。しかし、今回調査した県道堀米停車場線と市道堀米67号線の交差点付近には市史にも堀の波線が記されていない。また、今回の調査でも8区南端で堀跡は確認できなかった(C)。このため、城北辺の東部は現市道下になっている可能性が高い。航空写真を見ると、県道市道の交差点より東側に30m程の位置から北北東-南南西方向の道(D-E)がのびている。これが城の東辺になるのであろうか。市史では北辺堀の内側に土塁があるとするが、航空写真ではH-1間が黒くなっている。土塁が林となっている可能性もあり、北西部に残っていたと解したい。

今回発見された堀は、従来の推定地南端よりも150m程南の位置になる(F)。堀がのびる方向は北よりも少し東に振れた向きになっている。その周囲の地割りをみると、米軍撮影写真でも堀のある交差点から北北東に道がのびており(F-G)、この向きは堀と平行している。さらに、本報告写真図版に掲載した図版1下段の写真で右端の調査区端土層をみるとロームがレンズ状にあることが確認できる。これは盛り土で、土塁の可能性もある。この考えに立てば、北北東にのびる道との間隔が12~13m程であること、土塁の外側に堀が掘割されることから、二重の堀であった可能性も浮上する。この道は終戦後の航空写真や現在の地割りでも交差点から150m程のびている(F-G)。ここまでは堀が続いていた可能性があるが、航空写真では北西に折れていることから(G-E)、それ以上推定することもできない。

市史によれば、城跡の南辺や東辺は遺構が遺存しておらず、推定線を示している。航空写真でもJ-K間に地割りが明瞭に認められ、この地割りは現在まで続いている。これを南辺とすると、今回発見された堀を含めた城の形態が複郭式になってしまう。城跡は推定範囲よりもさらに南側に広がっていた可能性もあるが、今後の周辺地域の綿密な調査によって堀の延長を確認して、城の形態を解明していくべきであろう。

### (3) 堀米遺跡8区の遺構群

8区では、長方形や方形の土坑群と井戸が発見された。井戸SE-54ではまとまった陶器・土器が発見された。陶器では常滑焼の片口鉢が出土しており、第53図6(以下、遺物番号のみ)の口縁部は肥厚し

て丸味をもち、8の高台は断面三角形を呈する。この形態は、常滑5型式から6a型式に相当し、1220～1275年に位置付けられている（中野2005）。かわらけでは非ロクロの2は口縁部のヨコナデが不明瞭な味であることから、大澤伸啓氏編年（大澤2003）の2期、13世紀前半から中葉とみられる。3のロクロかわらけは、底径5cm余り、大澤氏の2期小皿形の底径の範囲内になる。これらの点からこの井戸は13世紀前半から中葉と位置付けておきたい。

土坑では、SK-55からロクロ製の小皿形かわらけが出ている（第59図1）。大澤氏の編年によれば3期以降に器高が低くなり、6期以降に口径が小さくなる。これらの点を勘案すると、本土坑のかわらけは2期になり、井戸と土坑の一部が併行し、13世紀前半から中葉とみられる。

このように井戸・土坑の時期は400m程南側で発見された堀跡の時期と概重なっていたことになる。1区SD-01が堀米城跡の堀とどのように繋がり、この堀の時期が堀米城跡本体の時期を反映するのか、厳密には不確定である。しかし、現在得られている資料からは、堀米城の一画と考えざるを得ない。この立場に立ち、8区の井戸・土坑群をみると、城の北東側、鬼門の方角を墓地としていたといえる。しかし、土坑墓であることから、庶民の集団墓と考えられる。その範囲は9区で長方形土坑等が確認できず、11区でわずかに確認されたのみである。このため、13世紀代の庶民層の集団墓地の範囲は堀米城北辺から北へ30m程の限られた所であったと想定される。今回の調査は南北に細長い限られた範囲であり、東西方向を含めた墓地範囲の確定は、今後の課題である。

#### （4）鋳物について（第83図）

1区SD-01からは溶解炉の大口径羽口や炉壁片が3点出土した。また、10区SI-75では銅粒が散在して付着した羽口先端片が出土した。この遺構は8世紀になるが、羽口の外面径からみると大口径羽口と考えられる。SD-01出土の羽口は酸化色になっており、銅か鉄生産によるか判別できないが、SI-75の羽口は銅生産のものと思われる。羽口は小破片のため、鋳造炉の復元はできないが、参考までに羽口と炉が復元された埼玉県金井遺跡と京都府京都市東山区教養部構内の事例を挙げておく。

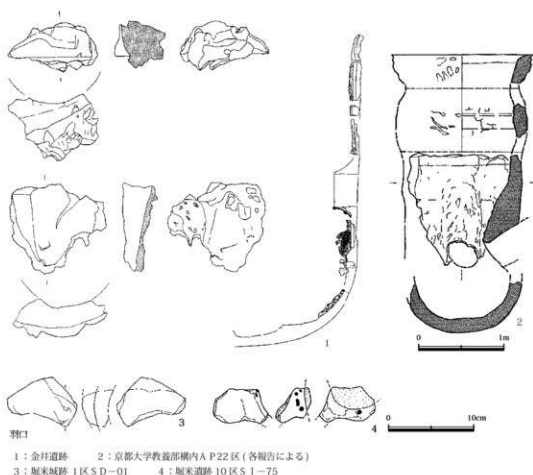
特に大口径羽口は鋳造炉の送風管であり、この周辺で鉄か銅の鋳造を行っていたことが想定でき、堀の時期が13世紀中葉から後半と位置付けられたことから、鎌倉時代後半に鋳造が行われていたと判断することが可能になった。これまで、年紀のある最も古い天命鋳物は千葉県日本寺の元亨元年（1321）までであった。今回の調査によって、これよりも天命鋳物の初現時期が遡ることが明らかになった。また、この羽口片の確認によって、初期の天命鋳物が堀米周辺で行われていたことも明らかになった。さらに、この地域が日本寺の梵鐘製作の大檀那である堀米有元の居城地であることを勘案すると、初期の天命鋳物の操業に堀米氏が関わっていた可能性も出てくる。前述のように、堀の時期は有元の先代以上にあたり、この頃に堀米氏が創業したとみることができよう。

#### 註

1 ここでは、7～10世紀の鉄生産関連遺跡を扱う。集成図には掲載しなかったが、足利市板倉城跡と多功南原遺跡SX-077（『多功南原遺跡 奈良・平安時代編 第2分冊』636頁）がある。時期は明らかでない。

#### 【参考文献】

赤熊浩一 1994『金井遺跡B区-K-1』（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団  
足利市遺跡調査団 1990『板倉城跡』足利市教育委員会  
穴澤親功・長谷川 渉 2017『古代製鉄遺跡研究から見た川戸台遺跡』『古河市歴史シンポジウム 古河川戸台遺跡をめぐる諸問題～対観東戦争・天台教団・平将門の乱～』古河市歴史シンポジウム実行委員会



1: 金井遺跡 2: 京都大学教養部構内A P 22区 (各報告による)  
 3: 堀米遺跡 1区 S D-01 4: 堀米遺跡 10区 S I-75

### 第 83 図 鑄造溶解炉復元図と羽口

- 安間拓巳 2007『日本古代鉄器生産の考古学的研究』淡水社  
 池田敏宏 2000『土師器塚について』『小丸山北遺跡・山苗代A遺跡』栃木県教育委員会・(財)栃木県文化振興事業団  
 池田敏宏 2009『栃木県域における6・7世紀の土器様相—地域間交流を中心視座にすえて—』『古代社会と地域間交流—土師器からみた関東と東北の様相—』六一書房  
 五十川信矢・飛野博文 1984『京都大学教養部構内A P 22区の発掘調査』『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和57年度』京都大学埋蔵文化財研究センター  
 市貝町教育委員会 2009『仁王地遺跡発掘調査報告書』  
 市貝町教育委員会 2016『寺平遺跡発掘調査報告書Ⅱ』  
 宇都宮市教育委員会 2005『刈道東原遺跡』  
 宇都宮市教育委員会 2008『姿川第一小南遺跡 第3次調査』  
 宇都宮市教育委員会 2008『みずほの台遺跡群Ⅱ 根本西古台墳群第3次・西側部上原遺跡』  
 宇都宮市教育委員会 2013『北の前遺跡 B区』  
 大澤伸啓 2003『下野国におけるかわらけの変遷—中世前半を中心として—』『墳 静夫先生 古稀記念論文集 栃木の考古学』  
 小山市教育委員会 1987『宮内東遺跡』  
 小山市教育委員会 1990『八幡根東遺跡発掘調査報告書』  
 小山市教育委員会 1997『宮内東遺跡—第4次発掘調査報告書—』  
 小山市教育委員会 2012『牧ノ内Ⅱ』  
 鍋木理広 1997『栃木県製鉄遺跡研究覚書』『研究紀要』第14号 栃木県立博物館  
 上三川町教育委員会 2010『島田遺跡Ⅶ』  
 河内町教育委員会 2000『大志白遺跡群発掘調査報告書 古代・中・近世編』  
 (公財)とちぎ未来づくり財団 2012『東谷・中島地区遺跡群 13 砂田遺跡(10区・12区・13区・16区・27区)』栃木県教育委員会



- (公財)とちぎ未来づくり財団 2013『東谷・中島地区遺跡群 15 砂田遺跡(7~9・11・14・15・17・20~22・25・26・28~42区)』栃木県教育委員会
- (公財)とちぎ未来づくり財団 2013『東谷・中島地区遺跡群 16 西州部西原遺跡(古墳・奈良・平安時代編)』栃木県教育委員会
- (公財)とちぎ未来づくり財団 2014『北ノ内遺跡・助五部内遺跡・星ノ宮遺跡』栃木県教育委員会
- (公財)とちぎ未来づくり財団 2014『下野国分尼寺跡Ⅱ』栃木県教育委員会
- (公財)とちぎ未来づくり財団 2016『横倉遺跡・横倉戸館古墳群』栃木県教育委員会
- 小島友美 2002『まとめ』『ゴロノミヤ遺跡』佐野市・佐野市教育委員会
- 小林公治 1988『奈良・平安時代の嚴治の復元的考察』『文学研究科紀要別冊』第15集 早稲田大学大学院文学研究科
- (財)栃木県文化振興事業団 1990『三ノ谷東・谷館野北遺跡』栃木県教育委員会
- (財)栃木県文化振興事業団 1990『溜ノ台遺跡』栃木県教育委員会
- (財)栃木県文化振興事業団 1993『谷館野東・谷館野西・上芝遺跡』栃木県教育委員会
- (財)栃木県文化振興事業団 1993『免の内台遺跡』栃木県教育委員会
- (財)栃木県文化振興事業団 1994『金山遺跡Ⅱ』栃木県教育委員会
- (財)栃木県文化振興事業団 1995『金山遺跡Ⅲ』栃木県教育委員会
- (財)栃木県文化振興事業団 1995『馬門南遺跡』栃木県教育委員会
- (財)栃木県文化振興事業団 1995『横倉倉ノ内遺跡』栃木県教育委員会
- (財)栃木県文化振興事業団 1996『大塚遺跡群』栃木県教育委員会
- (財)栃木県文化振興事業団 1996『金山遺跡Ⅴ』栃木県教育委員会
- (財)栃木県文化振興事業団 1996『寺野東遺跡Ⅶ 歴史時代編』栃木県教育委員会
- (財)栃木県文化振興事業団 1996『西赤堀遺跡』栃木県教育委員会
- (財)栃木県文化振興事業団 1997『温泉神社北遺跡』栃木県教育委員会
- (財)栃木県文化振興事業団 1997『滝田本郷遺跡』栃木県教育委員会
- (財)栃木県文化振興事業団 1997『八幡根遺跡』栃木県教育委員会
- (財)栃木県文化振興事業団 1999『多功南原遺跡』栃木県教育委員会
- (財)栃木県文化振興事業団 1999『清六三遺跡Ⅳ(古代・中世編)』栃木県教育委員会
- (財)栃木県文化振興事業団 1999『東谷・中島地区遺跡群 1 磯岡遺跡〔I区〕』栃木県教育委員会
- (財)栃木県文化振興事業団 2000『小丸山北遺跡・山苗代A遺跡』栃木県教育委員会
- (財)とちぎ生涯学習文化財団 2001『大間台遺跡』栃木県教育委員会
- (財)とちぎ生涯学習文化財団 2001『上神主・茂原 茂原原 北原東』栃木県教育委員会
- (財)とちぎ生涯学習文化財団 2001『北の前遺跡 縄文~古代編』栃木県教育委員会
- (財)とちぎ生涯学習文化財団 2001『黒袴台遺跡』栃木県教育委員会
- (財)とちぎ生涯学習文化財団 2001『馬門南遺跡Ⅱ』栃木県教育委員会
- (財)とちぎ生涯学習文化財団 2003『西下谷田遺跡』栃木県教育委員会
- (財)とちぎ生涯学習文化財団 2005『東谷・中島地区遺跡群 6 磯岡遺跡(2~7区)』栃木県教育委員会
- (財)とちぎ生涯学習文化財団 2007『東谷・中島地区遺跡群 8 砂田遺跡(4~6・18・19・23・24区)』栃木県教育委員会
- (財)とちぎ生涯学習文化財団 2007『西赤堀遺跡』栃木県教育委員会
- (財)とちぎ生涯学習文化財団 2008『北原遺跡』栃木県教育委員会
- (財)とちぎ生涯学習文化財団 2008『高島遺跡群 下小屋原遺跡・高島館址』栃木県教育委員会
- (財)とちぎ生涯学習文化財団 2009『原北遺跡・茅堤北遺跡・伊勢崎Ⅲ遺跡』栃木県教育委員会
- (財)とちぎ生涯学習文化財団 2009『五雲遺跡』栃木県教育委員会
- (財)とちぎ生涯学習文化財団 2009『青龍河遺跡・皇宮前塚』栃木県教育委員会
- (財)とちぎ生涯学習文化財団 2011『千駄塚浅間遺跡・栗宮宮内遺跡』栃木県教育委員会
- 佐々木義則 2016『茨城県における奈良・平安時代漁網跡の分布とその用途』『寝尾岐考古』第38号
- 栃木県教育委員会 1976『堀米遺跡発掘調査報告書』
- 佐野市教育委員会 1988『向原遺跡 蓮沼遺跡 十二天塚古墳』
- 佐野市教育委員会 1990『館ノ前遺跡』
- 佐野市教育委員会 2002『ゴロノミヤ遺跡』
- 佐野市教育委員会 2003『ムジナ塚遺跡』
- 佐野市教育委員会 2006『富西遺跡Ⅱ・石橋遺跡』
- 佐野市教育委員会 2007『傾城塚遺跡概観Ⅲ』
- 佐野市教育委員会 2007『堀米遺跡Ⅱ』
- 佐野市教育委員会 2008『北の山遺跡Ⅱ』
- 佐野市教育委員会 2008『新若宮遺跡』

- 佐野市教育委員会 2008『ゴロノミヤ遺跡Ⅳ』  
 佐野市教育委員会 2009『ゴロノミヤ遺跡Ⅴ』  
 佐野市教育委員会 2009『新町遺跡』  
 佐野市教育委員会 2009『堀米遺跡Ⅲ』  
 佐野市教育委員会 2010『槇塚遺跡』  
 佐野市教育委員会 2015『堀米遺跡Ⅳ』  
 佐野市史編さん委員会 1975A『佐野市史 資料編1』佐野市  
 佐野市史編さん委員会 1975B『佐野市史 民俗編』佐野市  
 下野市教育委員会 2013『下野薬師寺跡発掘調査報告書』  
 津野 仁 1995「栃木県における6・7世紀の土器編年と地域的特徴」『東国土器研究』第4号  
 津野 仁 1996「土器編年」『金山遺跡Ⅳ』栃木県教育委員会・(財)栃木県文化振興事業団  
 津野 仁 2007「本地域に特徴的な土器—鶴田中原タイプ張について」『東谷・中島地区遺跡群8 砂田遺跡(4～6・18・19・23・24区)』栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯学習文化財団  
 津野 仁 2011『寂光沢窟跡』栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯学習文化財団  
 津野 仁 2015「下野国の古代集落と生業」『那須官衙の時代—律令期地域社会の移り変わり—』なす風土記の丘湯津土資料館・なす風土記の丘資料館  
 栃木県教育委員会 1992『山海道遺跡』  
 栃木県教育委員会 1993『金山遺跡1』  
 中島信親 1996「古代鍛冶工房と鉄器生産体制の変容について」『年報 都城』7 (財)向日市埋蔵文化財センター  
 中野晴久 2005「常滑・渥美」『全国シンポジウム 中世窯業の諸相—生技術の展開と編年— 発表要旨集』  
 中村岳彦 2016「栃木県・佐野地域における古墳時代後期の集落動態—地域考古学研究のための一試論—」『地域考古学』1号  
 日本窯業史研究所 1989『栃木県二宮町 蟹が入遺跡』  
 野木町教育委員会 2001『松原北遺跡』  
 芳賀町教育委員会 1992『免の内台遺跡』  
 福田豊彦 1982「文献史料よりみた古代の製鉄—製鉄史における九世紀関東の位置—」『古代日本の鉄と社会』平凡社  
 藤岡町史編さん委員会 2003『藤岡町史 資料編 考古』藤岡町  
 前澤輝政 1986『多功南原遺跡』上三川町教育委員会  
 山口耕一 1999「多功南原遺跡の土器の変遷と遺構の変遷」『多功南原遺跡』栃木県教育委員会・(財)栃木県文化振興事業団

## 付編

### 堀米遺跡発掘調査に係る自然化学分析

バリノ・サーヴェイ株式会社

#### はじめに

栃木県佐野市に所在する堀米遺跡では、古代の集落跡や中世の堀跡などが発見されている。この内、9世紀代とされる平安時代の住居跡からは石製の権衡や砥石、砥石を再加工したと考えられている石製品の未成品などが出土している。本分析調査では、これらの石製品や未成品を対象として、岩石薄片作製鑑定を実施し、岩石を構成する鉱物や組織を明らかにした。以下にその結果を報告する。

#### 1. 試料

岩石薄片作製鑑定の対象とした試料は、石製品 (No.1 S I - 92 未成品, No.2 S I - 92 権衡, No.3 S I - 119 砥石) 3点である。

#### 2. 分析方法

薄片観察は、岩石を0.03 mmの厚さに研磨した薄片を顕微鏡下で観察すると、岩石を構成する鉱物の大部分は透光性となり、鉱物の性質・組織などが観察できるようになるということを利用しての。

薄片用の岩石チップは、ダイヤモンドカッターにより切断・整形する。チップの片面を# 180～#800の研磨剤を用いて研磨機上で研磨した後、プレパラートに貼り付ける。プレパラートに貼り付けたチップは、ダイヤモンドカッターにより薄く切断する。プレパラート上のチップは、# 180～#800の研磨剤を用い、研磨機上で厚さ0.05mm以下になるまで研磨する。さらに、メノウ板上で# 2500の研磨剤を用いて研磨し、正確に0.03mmの厚さに調整する。プレパラート上で薄くなった薄膜状の岩石片の上にカバーガラスを貼り付け、観察用の薄片とする。薄片は偏光顕微鏡下において観察記載を行う。

#### 3. 結果

偏光顕微鏡下における観察から構成鉱物および組織の特徴を明らかにした。構成物の量比は、観察面全体に対して多量 (> 50%)、中量 (20～50%)、少量 (5～20%)、微量 (< 5%) およびきわめて微量 (< 1%) という基準で目視により判定した。顕微鏡観察に際しては下方ポラーラーおよび直交ポラーラー下において代表的な箇所を撮影し、写真図版に示した。以下に鏡下観察結果を述べる。

##### 試料番号: No.1 S I - 92 未成品

本岩石は、粗粒シルト～細粒砂サイズの多量の石英、中量のセリサイトを含む変質流紋岩である。基質は、淡灰色を呈し、粒径0.10mm以下の珪長質鉱物やセリサイトによって置換されている。鉱物片には配向性を示すものは認められず、塊状を呈する。副成分鉱物として、粒径0.24mm以下の緑泥石、水酸化鉄、ジルコンが中量～極めて微量以下存在し、基質に点在する。

##### 試料番号: No.2 S I - 92 権衡

本岩石は、細粒シルト～細粒砂サイズの多量の石英、中量のセリサイトを含む変質流紋岩である。基質は、

淡灰色を呈し、粒径 0.10mm 以下の珪長質鉱物やセリサイトによって置換されている。鉱物片には配向性を示すものは認められず、塊状を呈する。副成分鉱物として、粒径 0.08mm 以下の緑泥石、ざくろ石、水酸化鉄が微量以下存在し、基質に点在する。孔隙は、微量存在し、孔径 0.47mm 以下、不定形状を呈し、基質に散在する。内部に充填鉱物は認められない。クラックは、二条程度存在し、長さ 15mm 以下、幅 0.11mm 以下を示して分布する。

試料番号：No.3 S I - 119 砥石

本岩石は、細粒シルト～中粒砂の火山ガラス片の仮像を含む凝灰質泥岩である。基質は、灰色を呈し、粒径 0.01mm 以下の微細不定形状を呈する珪長質鉱物や、粘土鉱物によって埋められる。粘土鉱物は、淡褐色を呈する。鉱物片に配向性を示すものは認められず、塊状を呈する。砕屑片の淘汰はやや良好である。鉱物片は、粒径 0.12mm 以下で、緑泥石などが微量程度認められる。火山ガラス片の仮像は、珪長質鉱物によって置換されている。基質に粒径 0.03mm 以下の不定形状を呈する水酸化鉄が鉱染状に分布する。孔隙は、微量存在し、孔径 1.6mm 以下、球状～不定形状を呈し、内部に充填鉱物は認められない。

#### 4. 考察

鑑定の結果、No.1～No.2 はセリサイト化作用を被った変質流紋岩であると考えられる。分析試料の変質流紋岩は、セリサイト化作用により生じた石英やセリサイトが基質を構成し、初生鉱物は残存していない岩相を示す。変質流紋岩の源岩である流紋岩は、関東地域では鬼怒川上流域～中流域に広く分布しているが、遺跡の位置を考慮すると、今回の分析試料の推定される産地としては、群馬県桐生市からみどり市大間々にかけて渡良瀬川に点在する金山流紋岩類や藪塚層が可能性として挙げられる（高橋ほか、1991）。

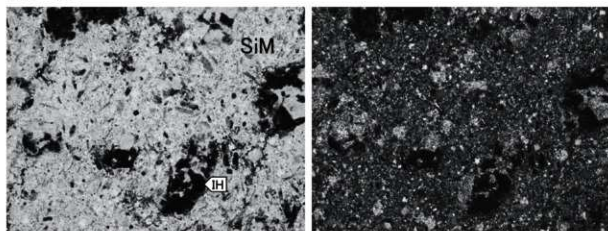
No.3 の試料は、凝灰質泥岩に鑑定された。凝灰質泥岩の産地は上述の藪塚層や鬼怒川水系の新第三紀火砕岩に伴って分布するとみられるが、遺跡の位置を考慮すると、上述の藪塚層には、水底に堆積した凝灰岩を主とする湯ノ入凝灰岩部層が分布しており、No.3 の試料の産地は藪塚層に由来する可能性がある。

なお、推定された各産地について、変質作用の程度など分析試料と同質の岩石が分布しているかどうかは不明であり、産地の特定は難しい。今後、分析事例の蓄積が望まれる。

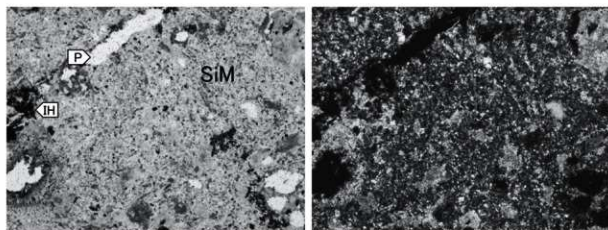
#### 引用文献

高橋雅紀・大友育也・齋藤和男、1991、群馬県東部金山地域に分布する溶結凝灰岩の K-Ar 年代、地調月報、42、167-173。

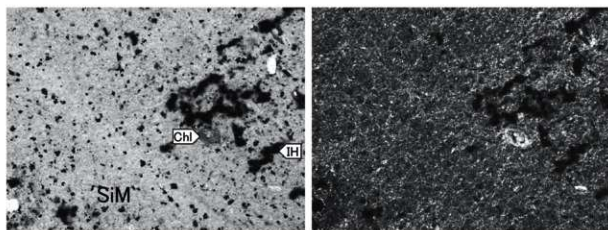
図版1 薄片



1. No.1 SI-92 未成品



2. No.2 SI-92 権衡



3. No.3 SI-119 砥石

ChI: 緑泥石. SiM: シリカ鉱物. IH: 水酸化鉄. P: 孔隙.

0.5mm

左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

# 写真図版



1区SD-01 (南西から)



1区SD-01 (南から)



4区 全景 (南西から)



5区 全景 (西から)



6区 全景 (西から)



7区SX-23 セクション (南から)



4区SK-02 セクション (北西から)



4区SK-02 遺物出土状況 (北西から)



4区SK-04 セクション (南から)



5区SD-06 セクション (南から)



5区SD-06 完掘 (南から)



5区SK-12・13・14・16 完掘 (南から)



5区SK-17 完掘 (西から)





8区 北部全景（北西から）



9区 南部全景（西から）



9区 北部全景（南から）



10区 北部全景（南から）



16区 北部全景（南から）



16区 北部全景（西から）



8区S1-64 セクション (南東から)



9区S1-65 完掘 (南東から)



9区S1-65 カマド遺物出土状況 (南から)



9区S1-65 遺物出土状況 (南東から)



9区S1-70 完掘 (南西から)



9区S1-70 カマド (西から)



10区S1-74 完掘 (南から)



10区S1-74 カマド (南から)



10区S1-74 炉 (南から)



10区S1-75 遺物出土状況 (南西から)



10区S1-75 遺物出土状況 (東から)



10区S1-75 セクション (南東から)



10区S1-75 ビットセクション (南から)



11区S1-66 遺物出土状況 (北東から)



11区S1-66 貯蔵穴セクション (南から)



11区S1-66 カマド (上から)



11区S I-66 カマド (上から)



11区S I-66 貯蔵穴遺物出土状況 (北東から)



11区S I-66 南半部 (西から)



14区S I-79B 北辺、S I-80 完掘 (西から)



14区S I-79B カマド (西から)



14区S I-79B 中央部 (南から)



14区S I-79A セクション (南から)



14区S I-80 カマド遺物出土状況 (南から)





14区南部(S1-79A・SK-78)全景(西から)



15区S1-81 完掘(西から)



15区S1-81 セクション(北から)



15区S1-88 完掘(南から)



15区 南部全景(西から)



15区 北部全景(南から)



16区S1-92-99 セクション(南東から)



16区S1-92 遺物出土状況(南から)



16区S1-92 遺物出土状況 (南東から)



16区S1-92 カマド (南から)



16区S1-92 カマド掘り方 (南から)



16区S1-93 セクション (北東から)



16区S1-93 遺物出土状況 (南から)



16区S1-93 完掘 (南から)



16区S1-93 完掘 (西から)



16区S1-93 カマド (南から)



16区S1-93 カマド掘り方 (南から)



16区S1-93 掘り方 (北東から)



16区S1-96 完掘 (南東から)



16区S1-96 貯蔵穴セクション (南から)



16区S1-96 貯蔵穴 (南から)



16区S1-96 カマド掘り方 (南東から)



16区S1-96 カマド (南から)



16区S1-92 掘り方、S1-96-99 完掘 (南から)





16区S1-92 掘り方、S1-96・99 完掘（東から）



16区S1-99 カマド掘り方（南から）



16区S1-117 完掘（南東から）



16区S1-117 P1セクション（南西から）



16区S1-117 掘り方（南東から）



16区S1-119 完掘（南から）



16区S1-119 完掘（東から）



16区S1-119 発出土状況（南東から）



16区S I-119 遺物出土状況 (北東から)



16区S I-119 東壁際坏出土状況 (南から)



16区S I-119 カマド (南から)



16区S I-120 セクション (南西から)



16区S I-120 完掘 (南から)



16区S I-120 掘り方 (南西から)



16区S I-122 完掘 (南から)



16区S I-122 セクション (南から)



16区S I-122 カマドセクション (東から)



16区S I-122 カマド (南から)



8区SE-54 セクション (南西から)



8区SE-54 上部完掘 (北から)



10区SE-76 セクション (西から)



16区SE-114 セクション (南から)



16区SE-114 上部完掘 (南から)



16区SE-121 遺物出土状況 (西から)



16区SE-121 遺物出土状況 (南西から)



16区SE-121 セクション (西から)



8区SK-40 セクション (南西から)



8区SK-42-43 セクション (東から)



8区SK-44 セクション (南東から)



8区SK-45 セクション (南東から)



8区SK-46 セクション (南から)



8区SK-47 セクション (南東から)



8区SK-49A-50 セクション (西から)



8区SK-61 完掘 (南西から)



8区SK-62A セクション (南西から)



8区SK-63 セクション (南西から)



11区SK-71 椀形澤出土状況 (西から)



11区SK-67・68、SI-66 完掘 (南西から)



16区SK-94 セクション (南から)



16区SK-101A 完掘 (南から)





16区SK-102 セクション (南から)



16区SK-106A・106B・106C 完掘 (南西から)



16区SK-107 完掘 (南西から)



16区SK-110 セクション (南から)



16区SK-111 完掘 (南から)



16区SK-123 完掘 (南西から)



8区北部道路南北側溝 (北西から)



8区道路南北側溝 セクションB-B' (南西から)



8区道路東西側溝 発掘 (北西から)



9区道路南北側溝 セクションC-C' (北から)



13区 北部全景 (西から)



13区 中央部セクション (南西から)



旧石器調査全景 (南から)



旧石器調査ルーム土層 (南から)



旧石器調査ルーム土層 (西から)









10区S I-75-10



10区S I-75-12



10区S I-75-13



10区S I-75-15



10区S I-75-16



11区S I-66-1



11区S I-66-2



11区S I-66-3



11区S I-66-4



11区S I-66-5



11区S I-66-6



11区S I-66-7



11区S I-66-8



11区S I-66-9



11区S I-66-10



11区S I-66-11



11区S I-66-12



11区S I-66-14



11区S I-66-15



11区S I-66-16



14区S I-79A-3



11区S I - 66 - 18



11区S I - 66 - 19



11区S I - 66 - 20



11区S I - 66 - 21



14区S I - 79A - 5



14区S I - 79A - 7



14区S I - 79A - 8



14区S I - 79B - 1



14区S I - 79B - 7



14区S I - 79B - 8



14区S I - 79B - 9



14区S I - 79B - 10



14区S I - 80 - 5



14区S I - 80 - 4



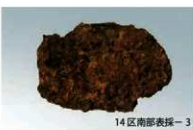
14区S I - 80 - 6



14区南部表探-1



14区南部表探-2



14区南部表探-3



15区S1-88-1



14区S1-80-2



15区S1-81-3



16区S1-92-1



16区S1-92-2



16区S1-92-3



16区S1-92-4



16区S1-92-6



16区S1-92-7



16区S1-92-8



16区S1-92-9



16区S1-93-1



16区S1-93-4



16区S1-93-5



16区S1-93-6



16区S I - 93 - 8



16区S I - 93 - 11



16区S I - 93 - 12



16区S I - 93 - 14



16区S I - 96 - 2



16区S I - 96 - 3



16区S I - 96 - 4



16区S I - 117 - 3



16区S I - 119 - 1



16区S I - 119 - 2



16区S I - 119 - 3



16区S I - 119 - 4



16区S I - 119 - 6



16区S I - 119 - 7



16区S I - 119 - 10



16区S I - 119 - 11



16区S I - 122 - 4



# 報告書抄録

ふりがな	ほりごめじょうせき・ほりごめいせき
書名	堀米城跡・堀米遺跡
副書名	快適で安全な道づくり事業費(補助)一般県道堀米停車場線堀米工区に伴う発掘調査
巻次	
シリーズ名	栃県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第385集
編著者名	津野 仁
編集機関	公益財団法人とちぎ未来づくり財団 埋蔵文化財センター
所在地	〒329-0418 栃県下野市葉474番地 TEL 0285-44-8441
発行機関	栃県教育委員会 公益財団法人とちぎ未来づくり財団
発行年月日	西暦 2017年3月30日(平成29年3月30日)

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ ー ド		北 緯 東 経		調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "			
堀米城跡・ 堀米遺跡	佐野市 堀米町地内	138 133	6400 6394	36° 19' 36"	149° 34' 52"	20140512 ~ 20160624	3,208㎡	県道拡幅工事

所収遺跡名	種 別	主な時代	主 な 遺 構		主 な 遺 物	特記事項
堀米城跡	城 跡	中 世	堀	1	かわらけ・銅銭	城の一画の堀か。
堀米遺跡	集 落 等	古墳時代 古代・中世	竅穴住居跡	19	土師器・須恵器・かわらけ・ 中世陶器・鉄製品・鉄滓・ 羽口	古代集落と 城外北東部 の中世墓地。
			井戸跡	4		
			土坑	多数		
			道路側溝	2		

要 約	<p>これまで推定されてきた堀米城跡の南に150m程の位置で、13世紀中葉から後半の堀跡が発見された。南北朝期の堀籠有元の城といわれてきたが、それよりも遡った時期から城が造られていた。城の北東側は庶民の墓地であった。また、堀から铸造用羽口が出土し、これまで伝世品から1321年までが上限とみられていた天命鋳物の初現時期が遡ることになった。さらに、鋳物の生産に堀籠氏が関わっていた可能性も浮上してきた。</p> <p>堀米遺跡は、これまで想定されていた範囲よりも南に広がり、7世紀前葉から9世紀後半まで、散在的に竅穴住居が作られる。この間に小規模な漁舟や蓆編み・鍛冶などが行われた。集落内鍛冶は、短期・小規模型で、県内において古代の鍛冶が最も盛んになる9世紀中葉から後葉に、本遺跡でも巡回する鍛冶工人によって操業されたと考えられる。</p>
-----	---

---

栃木県埋蔵文化財調査報告第385集

堀米城跡・堀米遺跡

—快速で安全な道づくり事業費（補助）一般県道堀米  
停車場線堀米工区に伴う発掘調査—

発行 栃木県教育委員会

宇都宮市堀田1-1-20

T E L 028 (623) 3425

公益財団法人とちぎ未来づくり財団

宇都宮市本町1-8

T E L 028 (643) 1011

編集 公益財団法人とちぎ未来づくり財団

埋蔵文化財センター

下野市紫474番地

T E L 0285 (44) 8441

発行日 平成29年3月30日発行

印刷 下野印刷株式会社

---